論學庸中故言

本間文庫
文庫 14
D 4

海内 中 本 小記

京都帝國大學圖書之印

文學士 久保天隨 著

文學評論 塵中放言

東京 鍾美堂發行

余は專門的學科の研究に、日も維れ足らざるを感ずる間に於て、現代自國文學の玩賞に對し、少からざる須要と興味とを發見したり。故を以て、身、評論家たる天資に乏しきを知ると雖も、一時興到の餘、嘴を其間に容るゝを禁ずる能はず、大方の笑、固より顧みるの暇なく、唯だ以て自己の滿足を求むるのみ。最近二三年間、帝國文學・中學世界・明義・新文藝の誌上に於て、忌憚なき言を吐くを敢てせしもの、全く如上の旨意に本づく。

さなきだに、學淺く才短き余が筆に成れるもの、短篇零章、豈に傳ふべき價値あらむや。今之を蒐拾刊行して世に問ふは何の故ぞ。嗟乎、余は燕石を珍とせし痴者に似たる

文庫14
D4

なきか。

然れども、翻て想ふ、余は此書を編するに先ち、昨非の幾分を悟了せしと雖も、未だ全く然らざるものあり。されば、本書の價値を全然自ら否定したる日は、やがて一段の識力を進め得たる後なるべし。余は絶えざる活動を以て、この方向に無限の進程を趁ふを期すと雖も、復た識者の指教を俟て、一層之を速かにせむを望まざるを得ず。是に於てか、余は本書の發刊を決行し、その無意義に終らざるべきを確信したりき。

明治三十四年八月

塵中放言目次

因襲的詩想の排斥……一頁
わが國民の厭世觀……五
羇旅の詩趣……九
隱居的文學……一二
近時流行の著書……一五
古書の豫約飜刻……一六
漢學の教授と漢文讀本……一八
青年日本畫家に告ぐ……二二
無責任の批評……二九
作書術の進歩……三〇
漢學者の無氣力……三二

庫14
D4

俚諺に就て……三七
走馬燈的文壇……三九
腐敗せる社會……四〇
下賤なる小說家……四二
典故の運用……四五
文壇の生氣……四八
花袋の「ふる鄕」……四九
貧富の階級……五二
「鶯下地」……五四
風葉と鏡花……五七
簡潔の文章……五九
紀行文學……六一
昨今の漢詩壇……六三
少年文學の本領……六六
修辭の工夫……七一
氣品の高卑……七五
少年文士を戒む……七七
文士尿護論……八一
現時の文章……八八
少年讀書の趣味……九五
楠公意志論……一〇二
虛僞的奇矯を叱す……一二二
現代の和歌……一三一
兒童唱歌……一四一
狹隘なる寫實小說……一四九
現代の學風……一五九

庫14
D4

教育と家庭……一六三
想像の缺乏……一六九
陋劣なる國民氣風……一七四
先覺の訃音……一七九
古代史の解釋……一八六
文士品性問題……一九二
文壇に於ける制裁……一九九
鐵幹に與ふ……二〇三
鐵幹對新聲社……二〇七
品致ある罵倒……二〇九
怒罵と嘲笑……二一一
乙羽を悼む……二一三
蘆花の近業……二一五
名を好むの愚……二二〇
娯樂としての文藝……二二三
少年雜誌の弊……二二五
赤門派の女士を評す……二三〇
我が所謂「美的生活」……二四三
「文學研究法」の序……二六四
「小山水」の序……二六六
高山樗牛「文藝評論」の序……二六六
高橋紫燕遺著「獨眼龍」の首に書す……二六八

文學評論

塵中放言

久保天隨著

因襲的詩想の排斥

過去一千餘年の日本詩界は、佛敎の感化を受けて、多くの可憐なる厭世詩人を出したり。仇波打ち寄する浮世の海の騷がしきに驚き、山よりも難く水よりも險しといひけむ行路に彷徨し、瑣々毛髮の比の如き小事、その意の如くならざりしを怨み、こゝに專ら人世と隔離せむことを務め、徒らに身を花鳥風月の間に寄せ、女兒的涙痕を水莖のあとにじませしに過ぎざるのみ。膽小にして心廣からず、彈回せずして撓折せしもの、彼等は、むしろ薄志弱行の徒たる誚を免れ得べきか。或人の之を呼で受動的厭世といひしもの、余輩その頗る中れるを知る。今夫れ、この種

の厭世觀を見るに、其世に及ぼす所の影響たるや、固より少く、もし大にありたらむには甚だ好ましからざるものなり。故に余輩は、これを排斥するこの非理ならざるを確信するものなり。

而して、この種の厭世思想は、我邦の歴史と聯關して、久しく泯滅せず猶ほその承嗣者を現時の世界に得て、時に或は其聲を高めむとすることあり。是れ余輩が痛歎して止む能はざるところ。試に現時本邦の詩界を觀るに、二三人士の斬新高妙なる思想を皷吹するものなきに非ざれども、十中の八九までは、舊時の思想を繰返へすに過ぎざるが如し。山寺の春の夕くれ、一杵の鐘聲、落花の雪を吹き下し、奥山の庵近く、紅葉ふみ分け鹿の鳴く音の聞ゆるなどを初めとし、四季景物の題詠に係るもの多くは凄涼冷艶の姿趣に得る所あり、哀れなる詩境ならずといはず。其嫌ふべきは、常套に屬すといふの外、雄壯豪宕なる自然の大詩境あるを知らずして然るかと思はしむるに在り。これはまだしものこと

しことに厭忌の情に堪へざらしむるは、新出の青年詩人が失戀の餘に出でたる厭世的口吻の泣言の流行なり。勿論戀愛の神聖を主張せし人さへ在りし今日此頃、余輩は必ずしも之を斥けて卑陋といひ猥褻といふの野暮は爲さずといへども、區區の微懷豫め懼るゝ所の者の一者は、この種文學の普遍的感化の結果は、青春妙齢の人を驅りて昔男うつろひ易き花ひと時の戀の戯に浮身を窶さしめ、更に下れば禽獸を去る一歩底劣情の奴隷たらしめ、あたら克己進取の熱誠なる性情を消失せしめむかにあるなり。之をかの王朝時代の淫靡なる風俗と聯關して發生せし柔軟文字に比較して幾許の逕庭かある。而してこの種のへな〳〵文學が新しき手を藉りて、春雨のふるごとに萠へ出る庭上の小草の如く、續出せむとする傾向のほの見ゆるに至りては、余輩は遂に言ふ所を知らざるなり。

文學の超絶的なる、固より不可とは爲さず。しかも今の時にありて、全

く國家的觀念を遺却し、害毒を流すを意に介せざるに至りては、未だ善として首肯する能はず。國民的大詩人の現出は、余輩が夙に鶴首して望む所。且つ夫れ國家の强盛時代は眞摯熱誠なる文學の出つべきときにして、浮華柔艶の文學は國家の生命を縮少すること、東西の歴史、證し得て歴々たり。而して之を今の時に見る、果して如何。嗟乎、國民的大詩人遂に起たざるべきか、眞摯熱誠なる大文學、遂に出でずして止むべきか。若しかくの如くならむには、國家形勢の趨向する所、また憂慮すべき者なくむあらず。

されば余輩は、今日の新聞雜誌に掲載する新體詩なむどが、如何に多くの愛讀者を得て、喧傳せらるとも、その内容たる思想の刷新を見ざる以上は、未だ文學の完全なる發達となし、手を擊て慶することを能はざるなり。況んや、思想の承嗣は、動もすれば沈滯に流れ、頽廢に歸することあるに於てをや。

自然を哦ふは可なり、然れども造化が特に秀靈を我邦土に鍾めて成せし、崇高雄偉の風光あるに留意せよ。人事を歌ふは可なり、然れども戀愛の圏外に、詩題なしといふ勿れ。失戀なむどは、毫も自慢の種にあらず、世態の變遷に從て、面白き詩材の盡きさるは、濱の眞砂のそれにも似たらむか。嗟呼、今の詩人たるもの、南荒遠戍の征夫戰鬼、近くは孤兒院裡乳に啼くの人に同情を寄するを欲せざる乎。余輩が獻芹の微衷之を括言すれば、心膽を開張し視聽を廣くし、上は無窮宇宙のきはみより、下は人生康衢のほとりまでを眺め盡し、承嗣せる舊時の厭世的思想を去り、眞摯熱誠の情を以て文字を驅使するを勉めよといふにあり。若し夫れ、情熾に血湧くの時、或は嘲俗に趨き、罵世に流るゝことあらば、更に大に觀るべきと爲すなり。

わが國民の厭世觀

余輩は既に過去厭世思想の承嗣として、今日の詩界の萎微氣力なきを論じ、之を排斥せむことを主張したり。然れども余輩は厭世觀そのものを排するに非ず。所謂受動的厭世家と雖も、或點に於ては頗る之を尊敬せむとするなり。よしや渠れ、意志薄弱にして且つ人生の義務を忽にせりとの非難を免れ得ざるべきも、渠が確に不調和なる社會の裏面に存せる醜點を觀破したる者なるとは明かなり。嗚呼社會は圓滿ならず表裏固より觀を異にす、外は美にして内は醜、功名富貴長へに在るべからず。望むに足らず、恃むに足らず。渠れや、之を悟了せり。淖汚泥の中に埋ひ、濁穢に蟬蛻し、以て塵埃の外に浮遊し、世の滋垢を得ず、嚼然泥して滓せざるものは渠れなり。唯た憐むべく惜むべきは、渠れや、餘りに小膽なりき。故に一たび江河の濁流、懷山襄地の勢をなすを見るや、ひたすら捲倒せられむとを危懼し、憂慮するの外、一意なく、之を避くるに汲々然、自ら中流の支柱となるの自信を缺きたり。桑の弓の巖をも透す堅猛なる

意志や、斃れて止まむてふ不屈の精神や、ともに之を有せざりき。然れども、かげろふの捉へ難き幻影と、雲にも乘らむ空望とに欺かれて、覺えず八幡知らずの邪徑深く迷ひ入りしを知らざる痴愚には非ず。その一旦翻然として慾を斷ち世を遺れ、簞食瓢飲、抒栗を食ふて、命を繫ぐを甘するに至りては、一種の勇氣と克己心との存するあり。

こゝに一の驕兒ありと假定し、人の之に對するや如何なる態度をなすかを考察せよ。そのよく驕兒の友たらむものは、其爲すところに任せ自ら之に加はり、遊邀笑謔すべし。もし志薄く氣弱き婦女子の類ならむか、驕兒の暴を知りつゝも、之を督責するの勇氣なく、同居し居るときも務めて之を避け、自ら之に近接せざるを得ざる不幸を悲泣せむのみ。もし意志勁固にして氣力强盛なる壯士ならむか、鞭撻百回、嚙み付く如くに叱責するを禁ぜざるべし。更にこれが嚴父たるべきものの資格を求めむか。教化方を盡くし、馬鹿につける藥なきと知りつゝも、之を善に導

くを力むるなるべし、この四者の外、他の態度はあらず。

今夫れ社會はこの驕兒の如きのみ。之に對する第一者は世俗の滔々たる者、固より言ふに足らず。第二者は、前にもいひたる受動的厭世者のみ。第三者は、活動的厭世者、その爲す所、社會に對し、時勢に對し、更に人生の問題に關し、進て宇宙終極の秩序に對し、之を破り之を蹂躙するを敢てするものなりかくの如きは到底常道に非ずと雖も活動は人心の仰望たる以上、その行動猶ほ有望的なり。第四者に至りては世の汚濁紛亂を見ても、敢て絶望せず、また冷笑せず、慈悲哀憐の情、油然として湧くが如く、之を救濟改良せむが爲には、獨力空拳を揮ひ、萬世の大計を講ずるを爲すかくの如きは余輩が理想的聖者なり。

以上の四段の階級は、思想發展の上に於て、必ずあるべき進程なり。而して之を本邦に見るに、古往今來、受動的厭世者は多かりしも、活動的厭世者は寥々晨星も啻ならず、況んや其上のものをや。本邦思想界の進歩

せざりしも、亦た宜なるかな。今ま余輩の患ふるところは、一般民風の輕佻浮薄にして、優柔阿曲なる、他を爲ね俗に媚ひ、當世の風潮に順應するを勉め、厭世ともなるべきまで、人生社會を觀察し憂慮する眞摯の人物の絶無なるに在り。

羈旅の詩趣

外的閲歴をして饒富ならしむるは、遠遊に若くなし。東山魯國を小とし、泰山天下を藐としたるも、いと古く、司馬子長李太白を引くも、新らしからず、西歐詩人の多くが瑞西伊太利に旅行せしなど述べむもうるさかるべし、然れども、古くさく且つうるさき丈け、益す其然るを證する也。城地春秋淺、田園造化忙、是れ決して人を瞞する語に非ず、終年城市紛闘の衢に跼蹐し、春秋の偉觀を知らず、乾坤の納納たるを悟らず、徒爾明窓淨几の間、香を燒き書を讀む、力を得る處、固より少し。自然は一大詩卷な

り、之を讀まざる者、何ぞ大文學者たるを得む。而して之を爲すは羈旅に若くなし、其間また種々の「人」に接見するを得べく、俗謠口碑を拾蒐し得べく、想像の湧出を助けしむるとあり。余輩は露伴と水蔭とが善く詩趣ある好文字を作るを以て、必ず羈旅に負ふ所ありとなすなり。

誰か我國の風物を以て、雄大崇高の趣に乏しといふぞ。信飛の境上、奥羽の曠土、蝦夷の舊地、何ぞこの景趣に乏しからむや。纖柔なる歌人者流は終に踏破する能はざりしなり、彼等は知らざりしなり、天地淑靈の氣は其間に鬱積するも、未だ之を吞吐する者なく、我が邦人が自然に孤負せし罪、亦た多かりしと謂ふべし。

また想ふ北海濤怒るの處、霧晴れて月明なるの夜、氷塊上に躍る海豹を射むとする蝦夷の蠻兒、三冬雪深き羽越の山村、爐に倚り繩をなひつゝ正成幸村の優劣論を講ずる若者、芭蕉の影暗き窓の下に布を織り掌に入墨したる可憐なる琉球の新婦、かゝると數へ來らば濱の眞砂のそれならねど中々に盡し難かるべし、而して是れ羈旅の人に非らざれば終に知る能はざるところ、之を歌ひ之を述ぶる豈に亦た妙ならずといはんや。

あるは區々江島小洞の探險を阿弗利加内地の跋渉ほどに吹き立てるあり。皆な今の文學者が一般に無性にして活潑ならず、自然を感謝敬虔する情の薄きを證す。かくの如くして不朽なる天然畫の出ざるも怪しむに足らず。今夫れ造化が本邦に賜與せし所、固より多し、而して未だ宇宙の神秘を洩露せし者あらず、嘆何ぞ罷まむ、昨臺澎新に我皇の版圖に入る熱帶圈裡の景象又た多少を其の間に見るべく、新高山の絶頂を攀ぢ天風浩々の下、呂宋群島を雙眼に收むるを得ば其快や如何ならむ。余は記して此に至り轉た神逝に堪へざるなり。

隱居的文學

短兵孤城に嬰り秋風落日徐に運命の盡くるを待ちつゝあるは、夫れ漢詩作家の一隊乎、固より彼等も多少の趣味を解し、三千年來の支那的舊思想ながらも、温柔敦厚の本旨を操守し、自ら一種の定見あるに似たり、熙朝昇平の美を謳歌し、文學上に多少の貢獻をなさむと欲するの志何ぞ殊勝ならずといはむや、彼等は常に無趣味なる俗吏、無教育なる商賈より排斥せられ、迂濶となされ、變人となされ、贅物となされ、唯一の手段、敬して遠けられつゝあるも、心ある者は詞人とし、騷客とし、將た前代文學の遺物として、多少の尊敬をなすに狐疑せず、然れども悲いかな、感化力を有する必須の俊才として、之を待つものは無きなり、更に之を譬へば別宅に靜養しつゝある老隱居の我家の幸よかれと祈りつゝも、今は家政に手出しするの權利なく、一旦御目出度なりたればとて、其家の

維持に於て一の影響なく、毫も困難を感せざるも、たゞ其存在中は固より奉りて置くを要するが如し。嘗て或人の言を聞く。曰く、漢詩作家に二種あり、所謂積極的詩人は他より詩人視さるゝを悅ぶ、吏才を賞贊すれば、頭を掉り、これ容易なり、言ふに足らずと辯し、編次の書あるを以て、敬服すれば、著書は容易なり、未だ本領を發するに足らずと氣張る。之に反して、消極的詩人は人に詩人視さるゝを厭ふ。人もし詩人を以て呼へば百方辯疏、或は公務の餘暇之を樂むといひ、或は文章の餘事之を作るといひ、要するに、猶ほ博奕に勝るが故といひ、謙遜して尻込するなり、と。均しく是れ隱居ながらも前者は老いて猶壯、時に理窟や小言をいひたがるものに類し、後者は自ら其分に甘んじ、徐に天命の盡くるを待ちつゝあるにも似たらむか、

余輩は屢言へり。自覺せる大國民は獨立の文學を建設せざるべからず、偶然の機會にまぐれ込みし外國文學摸倣の陋習は、極力以て排除す。

べし、夜光の璧、車十乘を照すもの果して拾ひ得べくむば、何ぞ礙碍を擲棄するに踟躕せむ。漢詩に對する則ち此の如きのみ。一たびは懷風藻の時代に行はれ、再び覇府時代、儒教の盛行に伴はれて榮へたりし摸倣の漢詩は、幾何の効果と利益とを日東の帝國に與へたる。世人の一般、眼ある者も、之に對して亦た頗る冷淡なりき。而して今之を棄てむとするに及びては、未だ弊屣を拋つ程には、あらざれども、さばかり甚しく之を悼まず、取りも直さず、隱居の死亡なればなり。

漢詩は今日の趨勢に考へて、遂に絶滅すべき運命を有し、遲くとも二三十年を出てず。積極的詩人のひねたる者、時に口角の沫を飛ばし、議論することなきに非ざるも、隱居の小言として耳を借す人なきも笑止や。數年前大江なにがしの西洋生噛りの詩論をこきまぜたる漢詩改良論や、野口寧齋が新造の文字いかめしき準國民文學とやらの卓說や、惜むべし、秋の蚊の聲のそれほどにも聞えざりしよ。

消極的詩人の心の奥に秘めたる所は知らざれども、外面の行爲は漢詩の運命を知覺し居るものに似たり。隱居の隱居らしきはなか〳〵にしほらし。余輩は漢詩の絶滅に關して毫も痛痒を感せざれども、この種詩人あるに想ひ到れば、轉た一掬の哀涙なき能はざるなり。

近時流行の著書

こゝに小冊子あり、內容は多くも二三百頁を出てず、讀むには骨が折れず、而かも多少の快味を博し得べきもの、尋常雜誌店頭に陳列する評論的史傳一流の書、即ち是なり。その流行最も盛にして、到る處に持て囃され、著者は勞少くして、且つ手ひどき批評の手術にもかゝらず。割のよきには遣り手が多く、二三年前より引き續き、萌え出づるや一犁春雨の後、小草の繁きよりも繁し。古より傳ふべく、名ある人、その數何ぞ限らむ。堆積せる材料は、汗牛充棟、猶ほ足らず。多少の鑑裁力と、叙述法とを心得

居る者にありては、寶山前に在り、しかも無盡藏たるべし。唯だ夫れ細心精緻の研鑽を經ず、漫衍放浪の敘述をなすもの、眞正の學界には些少の貢獻をなすを得ず、その文辭にても見るべきあらば、紙花たるを得むのみ、然らざる者は、反古にも劣れり。この類の書、文壇の小人が、衣食の爲にするものとせば、笑て之を措くべきも、堂々たる知名の士にして、之を爲すに至りては、實に羞恥の念なきかを疑はしむ。且つ又た憐むべきは、此類の書の最後なり。その持て囃さるゝも、僅に是れ槿花一日の榮、洋紙の屑なれば貴からず、殘骸を夜店の燈下に曝らすに至る。を免れず。猿鶴蟲沙、知名の士も、無名の徒もこゝに至れば區別なきを奈かむ。

古書の豫約飜刻

歐西思潮の流溢を促しゝ時や、一たびは、その文化に眩目し、曾て自國に發生したるものをば忘却し、優しき假名文の古書は、僅に鄰侯架上に

傳へられしが、國民が一たび反省し自覺するに及んでは、斬新なる研究法を以て、之を吾が手近きものに試み、將に混沌の八竅を穿たむとして古書の拾蒐漸く初まり、爲に價格をさへ昂げぬ。活版印刷の術、又た進み飜刻の擧日に盛なり、而して、これは啻に利得あるのみならず、又た頗る有益なる企業たり。獨り惜むべきは、わが邦人の缺點として、毫も信用を重ぜざること是なり。出版完成の期限一年といふ桃栗既に實るべき三年になるも、約に違へば、事未だ完からず。豫約者より搾りたる金圓は、子母繁殖し、出版者は濡手に粟の丸もうけをなしつゝも、馬鹿見せられて憤る人の怨の程を思はず。近き所が、經濟雜誌の群書類從、國史大系、哲學書院の史料大觀、その他には曰く何、曰く何と、其例固より多し。今夫れ印刷の進歩は文化に大影響あり、書肆の勉惰は書籍の普及に關係する所少きに非ず。余輩は近來屢之に對する非難の聲を耳にし、亦た默すること能はず、皷を鳴らして之を攻むるに怯ならざるなり。

漢學の教授と漢文讀本

嚴密にいへば漢學と唱ふる名稱や、漠然として捕捉すべからざるものあれども、從來襲用し來りたるものにして、支那古文學の研究ともいふべき程の事たるは誰しも知る所なり。而して漢學の教授といふは、支那古書を讀破すべき學力を授くるものなり、誰か漢學を以て今日に用なしといふぞ。人も知る如く我邦の開明之を彼土に受くるの大なるは固より蔽ふべからず、宛ら歐西今日の文化が希臘羅馬に負ふ所あるが如し、故を以て歐西の學界に希臘羅馬の古文學の研究の廢せられざる以上、本邦に於て漢學の研究長しへに絶えざるべし。之を普通教育の一學科となす、決して非理の事にはあらざるなり。

試に今日多くの尋常中學若くは高等學校に於ける漢學の教師を見よ、頭上白髮を戴きたる前代の遺老にあらざれば、青髭未だ抽かざる書

生上りの先生なり。兩者ともに眞正の教授法を心得ず、役に立つもの少きなり。就中前者老人輩にありては、從來漢學者の習氣を傳へ、磊落奇偉をまねるを以て唯一の能事とし、講義教授の上にも、この弊あり、史記鴻門の會にいたり、左氏鄢陵の戰に及ぶの時、案を叩て慷慨するの活氣はあれども、人を教ふるに非ずして自ら快を取らむとするに似たり。又た後者の若先生に在りては、素養未だ足らずして生徒に衝込まるゝこと多く、これも人を教ふるにあらずして、人に相談する如きさまなり。故に生徒は要領を得ざるに苦み、興味を覺えざるに倦ぐみ、遂に教場を擧けて催眠窟となし、黃帝が華胥を學び、宰予が朽木に做ふに至る。皆曰く是れ晝眠の時間なりと。嗟乎、此の如きは果して教育の本旨なるか。

夫れ、必要あればこそ之を學科の中に加へたるなれ、既に學科の中に加へたるなれば、教授に於て能ふ丈けの手段を盡くして、相當の効果を生ずるを期せざるべからず、教師の如き固より其人を得ざるべからず

これは當分致方なき事とするも、教授法及び教科書の改善に至りては、實に現今の急務たるなり。

漫然たる講義は教授の良法に非ず、宜しく生徒をして自ら求めしめ、神解融然たらしむべし。而して又た漢學と他の學科とを以て、互に獨立乖離するものと爲すなく、之を調和せしむること必要なり。然れども余輩は未だこゝに多くの經驗あるものに非されば、教授法に就て多く吻々するの權利を有せず。たゞ教科書の件に關して聊か献芹の言をすを得む。

古頑なる漢學先生が、偏に古書古本を尊重し、中學程度の智識との諧合を忘却し、一般生徒學力以上に在る困難なる古文を以て教科書とし、自修を廢し、一に教師の講譯を聽きて領得せしむるが如きは、有害無益なる大弊なり。是れ本とは、漢學を重くせむ爲にせしなるべきも、かくては秋毫の効果なくして終るべきのみ。まことに完全なる漢學の教科書は今や大旱の雲霓なり。

漢文の教科書は、固より國文のそれと體裁を同うして可なり。最も完全なる組織的方法により、興味と効果とを併得せしめむ爲に、妥當不偏の撰擇をなし、年代を追うて編輯し、略傳を付して作家の性格人物を審にし、簡潔明晰なる評論をも記入し、外方よりして學生の理解會得を助けしめ、作品の眞趣を洞察せしむべきなり。かくの如くすれば、勞少くして功多く、略ぼ支那文學古今變遷の大略を知悉し、その趣味を領得すべく、多少の讀書力を養成せしむべきなり。教科書は、獨り文章のみに限らず、清高純潔、志氣を尚ふするに足るべき詩歌の混入するを拒まず、否寧ろ然るべきを信ず。

「三代より春秋戰國にいたるの間、述作固より多し。而して五經三史の如き、支那文學全體の根據基礎たるべし、苟くも漢學を習修せむとするもの、專ら力をこゝに注がざるべからず、是れ古書を以て教科書に充つ

る所以なり」とは、漢學者が余輩に對して辯解する言辭なるべし。然れども、これ亦た僻說にして、漢學專門を以て自任する者は、かくならさるべからざるも、普通敎育の上に於ては、斷じて然るべからず。又た決して然るを得ざるなり。わが言の如くすれば、生徒の收め得たる漢學上の力量或は薄弱なることもあらむ。然れども普遍せしむるに於ては、頗る見るべき者あり。以て漢學の位置を高めたりとなすを得む。是れ、余輩が自ら論旨の謬らざるを信する所以なり。

青年日本畫家に告ぐ

近來日本畫工に對する批評を見るに、一人として同情を表するものあらず、甚しきは嘲笑を以て之に加へむとするに至る。余輩は必ずしも評者の言を以て全然同意すべき者と爲さずと雖も、また時弊に的中するを認めざることあらず。かくの如くして日本畫工に對する批難益す

其多きを加へむか、啻に畫工其人の貶斥に力あるのみならず、延て日本畫、即ち日本美術の一部、將に鼎の輕重を問はるゝに至らむとす。聞く所によれば、某洋人の如きは、日本畫を以て純粹の繪畫として承認せず、僅に以て紋樣の一種に過ぎざる者と爲さむとすと。彼れ碧瞳兒、日本畫の性質を知らず、趣味を解せず、乃ち敢て然ると雖も、半面の眞理、自ら伏藏するに至りては、亦た疑ふべからざるに似たり。

今夫れ如何なる寫實的繪畫と雖も、觀覽者に對しては、多少の約束を保有するなり、鉛筆畫の並行線を以て陰影となす如き是なり。而して日本畫にいたりては、この種の約束を保有する、殊に甚しとなす。但し余輩は常に之を看るに馴れて、敢て怪まざるのみ。新來の洋人、始めて日本畫を觀るもの、その之を解する能はざるや、亦た宜なり。例せば圓板と球體とを區別せざるも、余輩は手鞠と粧鏡とを判定し得べく、半面の顏を寫して頬と額とに高低なきも、役者の似顏たるを解するに苦しまず、日本

人には實際あるまじき長鼻と、もと側面的なるべきがわざ〳〵正面的に畫かれたる如き小口とを有する女子の圖は、その美人畫たるを拒まざるが如し。然れどもこれは、余輩即ち之を看馴れたるものに限らざるを得ず。かくの如きは、美術の普遍的性質に於て缺如する所あり、作品の價値を卑うする所以なり。

批評者はまた日本畫題の千篇一律なるをいひ、同一の排置規摸の者がたま〳〵ならず陳列せらるゝをいふ、是れ事實なり。而して其原因亦た容易に推知すべきなり。凡そ學問の輔助を要する職業技術甚だ多かる中にも、縱ひ淺くとも廣きに亘らざるべからざる者は、畫工と速記者となるべし。こゝに又た前者は、後者に比して、比較的に深からむを要するなり。由來日本畫工は山水を畫くの習癖あり、而かも植物學を知らず。昆蟲魚鳥を畫くの習癖あり、而かも動物學を知らず。故を以て間ま噴飯に堪へざる

誤謬を來たすとあり。唯だ其れ之を知らず、而かも實際の寫生をも爲さず、恣に想像を馳せ、或は古人の作品に摸擬し、因襲又因襲、遂にこの弊を來たすに至る。今、日本畫工の一人を捉へて、試みに問ふて曰はむ。汝が常に山水畫に於て伴はしむる所、園子を累ねたる如き樹木は何地に產し、何と名くるものなりや、と。千百の畫伯、恐らくは之に答ふる能はざるべし。これ最も適切なる例證に非ずと謂はむや。

かくいへばとて余輩は決して理想畫を排するものにあらず。鸞鳳龜龍は、支那古代の話傳に見ゆるもの、之を畫く、妨げざるなり。霓裳羽衣の仙女を畫くも、亦た可なり。但し現實の者を描寫する上に於ては、意味なき淺浮なる想像を以て誤魔化すべからざることを主張する者なり。

今ま實際に注意せずして、この種淺浮なる想像を以て描きたる作品の例を擧げむか。中村不折氏には頗る御氣の毒なれども、手近きまゝにありふれたる日本新聞の挿繪に付て論ぜむ。而してその稍や植物學の

講義に亘る處なきにあらざるの一事は、前以て讀者の寛容を乞はむ。そは去る十月某日の紙上に見えたるあけびの書なり。抑もあけびの果實は決して一房に數個を生ずるものに非ず、一花梗の上に附着する雄花は、十個以上に至ることあれども、雌花は概ね一個、罕に二個のみ。故に一房に生ずるあけびの果實は、一個を通例とす。然るに、かの紙上の書は四五個を一房に生じたるものにして、一種の畸形なり。若し實際あけびの何者たるかを知る者ならむには、たとひ寫生なりとも、故らに此種を畫くべき謂なし。由來日本新聞の挿繪は和洋折衷の新機軸を以て世上の歡迎を受け、その輕妙瀟洒の韵致は尋常摸擬者流の夢視するを得ざる所、扨てもこの失態は何ぞ乎素細密の注意を缺くの致すところ憐むべきこといもなり。更らに摸寫を以て基本とする如き意氣地なき斗筲輩に至りては、余輩また言を爲すを欲せざるなり。

むかしは、王履華山の四十幅を畫きて儕輩を壓倒したりき。大雅堂の

富岳に登るや數十回、必す其路を異にして大作品を成就せり。其他應擧が雞に於ける、狙仙が猿に於ける、一として寫生に非ざるはなし。現實の者を畫かむとせば、よろしく寫生を以て主とすべきなり。かの足、戸を出てずして葫盧依樣倪山孫水なむどを摸擬し、之を以て本邦の風景人物に移さむとする、乃ち非理なることなからむや。凡そ日本畫の流派、種々ありと雖も、その本源は支那にあり。いま山水畫に就て論ぜむに、支那人その地の山川を寫生し、數を累ね、符合一致の點を生ずるに至りて、始めて一種固定の筆法なるものを生ぜり。支那畫の筆法は、支那の山水より胚胎せしなり。畫家は之を以て地形土質、山容水勢、全く相肖ざる本邦に其儘應用せむとす。故に適ま某地に遊びて、その風景を畫くの際、その師奉的筆法に束縛せられて、毫も實景を描寫するを得ず。觀覽者は其題名によりて僅に某地たるを知るのみ。此の如きは直に自然を摸擬すて、ふ繪畫の精神に背戻するものにして、日本畫の價値を失はむとするは、實に

この一點にあり。

この弊はことに風景畫に關して然るものにして、人物畫にいたりてはやゝ日本化され一種の特徴を備ふるを見る。然れども、その沒理學と、れ事とし、細密なる注意を缺き、つまらなき誤謬の存するに至りては一なり。

余輩が生ひ先長き青年の日本畫家に勸告する所は、適用し得さる師奉的筆法を拋棄して、新筆法を工夫し勉めて自然を寫生し、細密なる注意を以て造化の幾微を穿鑿し、沒理學の陋習を一洗し、務めて約束を減じ去り、雄大なる作品を出せといふに在り。而かもこれ老年者に望むべからざればなり。蓋し余輩は、日本畫の純然たる美術たるを認識し、且つ將來なほ發達の見込なきにしも非ざるに想到し、敢てこの言をなすもの、自ら狂夫の言に非さるを確信するなり。

無責任の批評

世に無責任なるは、新聞雜誌の上などに見ゆる新刊書籍の批評なりかの記者や、固より確然たる學科的知識の根底あるにあらず、皿の如く淺き知識を以て、萬般の社會事實を論議する傍、之に及ぶなむめり。故を以て、論する所、毫も肯綮に中らず、卻て其眞價を失はしむるに至る。著者が御氣の毒の程も推察せられ、又た之に信據して、その書の價値を認識し、購讀して見むなどいふ世人の迷惑も甚しかるべし。これさへあるに中には他を毀傷せむとして、暴言罵辭を以て加ふるものさへあり。社會の先覺者となり、指導者となり、宜しく高尚なる心事を養ふべきものにして、卑屈極まれり、口に密、腹に針、陰に之を褒して陽に之を擠す。而してまたこゝに可笑しきは、多少の關係あるを利用して、これのみは少し褒めて下されと賴む。今は、どこまでも情實の世なるかな。

然りと雖も、當今刊行の書籍、多くはこれ二束三文の屑物、著者も固より自ら重を托せざるべき程のものゝみ。かゝるものは、先づどうでもよき事として、而かも恐るゝ所は、クーパー類似の小膽狹心の文士をして、これを五月蠅がるの極著書を出すの勇を失はしめむとするにあり。

作書術の進歩

吹き拂ふ秋風一陣、敗葉を散らすが如く、近時雜誌界の荒蕪頽廢せるに反して、やゝ持囃さるゝは、兎も角も、一廉の體裁を具へたる小冊子の流行なり。その原因たるや、固より種々あるべしと雖も、一般の讀者が、漸くまとまりたる知識を渴望し、斷片的議論よりも體系的記述を重んじ、特殊的探究に先て、原理的講述を望むの傾向あること、確にその一因たらずむばあらず。

こゝに機を視るに敏にして、兼て作書の速成に巧に、以て巨利を博せ

むとする文士あり、而かも是れ自ら新說を出すに非ず、圖書館裡に一二週の籠城をなし、前人の所說を蒐集し、拔取し、補綴し、外貌だけは自著の如く見せかけて、以て盲目なる世人を瞞過するまでのこと、其罪たるや亦た深い哉。彼れ等の所爲は、宛然としてアーピングの所謂古錦繡を剪裁して却て繃褸となすものゝ、その典據なる書は、もとより同一にして、百方より剔刔して、殆んと剩す所なきに至るなれば、或は李義山の幽鬼に扮する者、坐上絕纓の大笑を博したるに類似の事あるを得む。嗚呼これ作書術の進歩たる哉。

かの博文館より逐次刊行しつゝある、帝國百科全書の如き、亦たこの種の者に非ざるなき歟。杜撰孟浪、讀むに堪へざるもの、實に少からず。而してその所謂著者を尋ぬれば、これが、さても尊き當世知名の專門家かとや、余輩は同館が知識普及のため、この種の書籍の刊行をなせるを喜び、豫期せしところ、猶ほ聊か大なるものありき。蓋し、書肆は名を以て、書

を賣り、著者は利の爲に作る、加之著者が猶ほ修業の靑きものたる以上は、これも當然たり。余輩は今自ら不明を愧つる外なかるべし。

翻て想ふに、かの著者も亦た意氣無い哉。難を棄て易を撰ひ、不朽の盛名を願はずして、一時の虛譽を貪る、何ぞ奮勵一番、專門的大著述に心懸けざる、又た何ぞ少くとも、歐西大家傑著の飜譯にても思ひ立たざる。或は恐る、彼等爲さゝるにあらず、能はざるものならむを。

漢學者の無氣力

維新前後の漢學者は言論に於ても、行動に於ても、頗る活潑なりき。よしや、彼れ、或點に於て頗る頑固朴陋なりしと雖も、その氣力の充溢して、大に爲すあるに足りしは、聊か多とすべきなり。然れども時勢の變遷は、此種の輩をして自由なる翱翔飛舞を爲さしめず、言論の口を塞き、行動の手を扭ち、之を社會の一隅に押込めて、喘々たる餘息を保たしめたり。爾後年を經ること三十、彼等も寄る年波に敵し得で、氣力全く疲憊し、多くは鬱々快々として、芋蟲の如く書齋に蟄居し、安閑として一事を仕出かさず、折角の堂々たる漢學者先生も、此に至りては、浮世を外の隱君子の如く、無用の長物の如く、生ける字書、聲ある本箱の如く、又は厭世家の標本の如く、因循、姑息、頑固、時勢後れ、あらゆる面白からぬ語の代表者の如く思惟せられ、且つ吹聽せられたりき。

歐西思潮の注入流溢は、一時あらゆる在來の文物、制度、風俗、習慣を破壞したり。漢學の衰頽と漢學者の驅逐とは、その激盪の結果に外ならずして、遂に前記の憐むべき境遇に立ち走らしめたるなり。然れども國民の眩暈と酣醉とは、或時經過の後、漸く正氣に復し、その前に漢學全廢などの妄論を唱へたるを悔悟し、聊か愧慙したる氣味もあり。從て漢學の聲價頓に加はり、勃然として復興の好運を見るに至りき。是に於てか、先の諸老先生は、高眠の中より起されて、再ひ敎鞭を執り、後進を誘導する

の大任に當りたり之に加ふるに、歐洲研學の盛なる、また手を、この區域に出すを聞くに及て、負けじ者をとて起つものもあり。本邦の學界に於て、漢學の研鑽大に見るべき者ある筈の運に立ち到りきし。しかも奈何せむ、希望は實際と副はず、絶えて見るべき者なきを。而して其責之を誰に歸すべき。

今之を指導者即ち諸老先生の責に歸せむは、太た酷なりと謂はざるべからず。何となれば、今日學術の精神の何たるを知らず、教授の方法の如何を問はざる如きは、固よりその缺點として非難すべき者なれども、是れ今更の事にあらず。且その思想の守舊的なるは、舊時代の人として、且つ久しくこの日新の社會と隔離したる結果なればなり。然れども、之を以て典據となす、毫も不足なし否、單に典據たるべし、之に從學する者は自修を怠らず唯だ典據として依賴すべきなり。若し然らずむば、新研究の精神を發揮する能はず、折角の炊經酌史も尋句摘章の末技に陷り、

居然として陳套の見解に陷らむのみ。然れども實際その從學者の爲す所を見るに、大に然らざる者あり。其失は依賴するに過ぎ、適當なる區劃線外に超出して崇信奉戴したるにありき。故を以て雪窓螢火多年の苦を積むと雖も、尨雜なる書籍に對し、空漠なる意義を領得し、思索の精緻と探求の警敏とは、共に求むべからず、研究的批評と體系的敘述とに想ひ至らず、腦は縮み、眼はかすみ、勇氣沮喪し去り、因循以て自重となし、退窘以て高臥といふ而して社會と阻絶するを以て學者の本分と誤想し、萬事を抛棄して、その優れたる者僅に本の蟲とならむとす。何ぞ其憐むべきや。誠に惡しき處似易きとは之を謂ふ者にして、今の青年漢學者は精神的に老衰し、不活潑と無氣力とは早く已に膏肓に入るの疾となりぬ。之に由て視れば、本邦漢學界の不振は、其罪實に青年學者にありといはざるべからず。しかもまた守舊主義に趨向する者の如くなれば、世の注意を惹起するに及はず、實際に於て多少の行動あるにもせよ、遂に懶

眠を貪るものと一の擇ぶ所なきなり。

かの諸老先生や、かつて活潑なる氣力を有したる時ありき。而して今の青年學者は直に老衰せむとす。誠に氣力は欲しきものなり。その氣力だにあらは、之を以て新研究の方面に向け得べければなり。

余輩は已に漢學者の無氣力をいへり。斯文學會是れ老年漢學者懶眠の集合なり。東亞學會、是れ瓦散したる青年漢學者の團結なり。而して學者が研鑽の結果として見るべき者、絶無なるは固より顯著なる事實なり。余輩豈に、他に言を費すを要せむや。

而して更に、痛心すべきの事あり。諸老先生の漸々凋落し、典據を失ふと是なり。而かも青年漢學者は氣力なきが上に涵養日尚ほ淺く、以て代ゆるに足らず。漢學界の前途頗る遼遠にして、日暮れむとすの趣あり。今試に之を漢初に比す、爾時秦の博士の存する者既に老い、新なるものは全經を見ず、何ぞ相似たるの甚しき。余輩の痛嘆は、爲にいよ〳〵增さるべきなり。是に於てか寄語す、爾ぢ、青年漢學者よ、志氣を高大にし、實力を涵養せよ。十年の素養、以て百年の慨を發し、而かも陳腐なる囈語を吐くなく、どこまでも斬新の研究を以て、迷宮の鍵を啓くを期せよ。嗟呼氣力や先づ興起せざるべからず。而して氣力の一語、之を誤解する勿れ。むかし漢學が一般の教科たりし時、漢學者の氣力は、政治上の言論と、社會上の行動とに於て用ひられたりし事もありしが、今日一種專門的探究的學科となりし時に於ては、この氣力、少くとも余輩はこゝに論ずるものは、轉化して學問の研鑽に對する獻身的精神となるべき者に外ならざるなり。

俚諺に就て

人類内部の激烈なる感情が、覺えず知らず、口頭に迸出せしもの、是れ詩なり。和歌や、俳諧や、自ら定式ありて、故らに高尚なる雅言を用ひたる

藝術的作品なり。而して無智文盲の農夫野人にありては、之を諒解する能はず、況んや之を作爲するに於てをや。然れども彼等と雖も、その感情を發露するの途なきに非ず。言語の鄙俗と、形式の不備とを問ふ勿れ。俗謠なり、俚諺なり、また一種の詩に非ずして何ぞ。

俗謠の詩たるや、人みな之を知る。然れども俚諺にいたりては重視する者少し、請ふ余輩をして語る所あらしめよ。俚諺の特點は、幾度か社會諸般の事物に遭遇し、經驗したる後感發したるものなれば、語簡にして意味深く、善く人情の幾微を穿ち、道德上、社會上に於ける萬古不易の大法則を言ひ盡したるにあり。然れども多少敎訓的旨意を含むの故を以て、時に方便として、故らに虛妄怪異の言をなすことなきに非ず。以て婦人、小兒等、抽象的觀念に短く、具體的想像に富むものをして、直に諒解し、且つ永く記憶し、丹田に藏して以てその行爲を愼ましむ。飯をこぼすと目が潰れるといひ、物を食て臥ると牛になるといひ、出爪を取ると耻をかくといひ、茶の出花を飲めば人に憎まれるといひ、茶を呑むと色が黑くなるといひ、月夜に出あるけば月やけで色が黑くなるといふ如き是れなり。之を以て彼等の迷信を起し、救ふべからざる惡弊に陷らしむといふ者は愚なり。その成長するや、一旦虛妄なりしを悟ると雖も、既に敎訓を領得したる後なれば、良心より發したる信仰の念慮は依然として變せざるべし。これ其効果にして、世々相傳へて消滅せざる所以なり。

藤井紫影氏が本邦の俚諺の或種類を集めて、之を帝國文學に寄せられたる其勞や謝すべし。余輩は更に之を大成したる一部の書籍の出でむことを望む者なり。

走馬燈的文壇

東坡句あり、曰く、世上曾無不好人と。頃ろ文壇風聞記と題せる新刊の一書を見る、小說家評論家を合せて、無慮數十人、どれも、これも、罪のなき

面白き人の如く、而かも皆多少えらき所あるに似たり。濟々たる多士、人中の麟鳳、かくも多く一時に輩出せしは、眞に昭代の慶事なるかな。然れども、翻て此等の多士が周旋し左右する今日文界の狀況如何を想ふとき、轉た茫然自失せずむばあらず。畢竟するに、彼等は大にえらき所なく多くは是れ一時の虛名を僥倖したる者のみ。されば碩果の永く存する者なく、靈光の後代に巍然たる者、また求むべからず。千羊の皮は、遂に一狐の腋に若かず。多しと雖も、何とか爲さむ。紛々たる群小作家の跳躍し顚轉し、新陳代謝するさまは、正に走馬燈に似たり。之を走馬燈的文壇といふ。

腐敗せる社會

人類は肉體に糧食を要すと同しく、精神にも糧食を要する者なり。糧食なるもの、一言すれば消亡を補充し、絶えず新なる活動力を附與する者なり。今夫れ文學の超絶的絶對的なるは、固より其所なり。然れども、遂に「人」と隔離すべきにあらず。その俊絶なる者にいたりては、能く革新を命令し、社會開進の前驅をなす。而して天來の詩美は、高潔なる好尙を養成し、人心を醇化せしむるにあらずや。是れ、直に一種の精神的糧食たるを得べし。

近時社會の趨勢を見るに、この精神的糧食、求むるに難きを以ての故か、さなきだに傾き易き肉體的慾望の發揚をして其絶頂に達せしめ、醜態百出、走屍行肉、陌上に絡繹たり。嗚呼、肉感に耽醉する民、何ぞ健全牢固なる社會を組織するを得む。病的社會には、活動の元氣なし。纔て來るべきは、沈滯と腐敗と頽散とあるのみ。魚の腐するや、其外貌なほ鮮なり、唯だ其臭は掩ふべからず。社會の腐散するとき、亦之に同し。其表面に見ゆるところは、未だ變ぜざるも、早く既に一種の臭聲を聞くにあらずや。而かも此間に立ちて、精神的糧食の一大卸元たるべき文士は、他の卸元た

る宗教家、教育家と同じく、絶えて其本務を全うせず。或は愚昧にして其天職を知らず、或は狡獪にして之を遺却し、優柔偏狹、俗と俯仰し、世に媚付し、藥を與へずして毒を與へ、愈よ他の病處を挑發せんとす。此の如きは、斷じて排除指斥すべきものに非ずや。

嗚呼文士に氣慨なく著作に逸品なき、今日の如きはあらず。憐れなる國民は、惡風頽俗に沈浸すること愈よ深く、遂に機械的勢力を借りて、根本的革新を行ふの止むを得ざるに、至らむとするか。

下賤なる小說家

現今多少知名の小說家にして、尋常講釋師の張扇より材料を叩き出し、我は顏に澄ます者、指を屈すれば、三人あり。上をちぬの浦の浪六となし、中を村井弦齋となし、下を半井桃水となす。

浪六はいづれの作に見るも、講釋本より罷りつんでざるは無けれども、文章だけは流石に一家を成し、一種の筆癖と嫌味とを併有するにもせよ、勁拔奇矯の筆致、自ら特得の妙味を覺ゆること無きに非ず。穉氣青臭く骨未だ固まらざる青年作家に比し、將た脂粉の氣、紙面に滿つる戀愛小說に較ぶるとき、自ら一頭地を拔くものあるが如し。是れ彼が往年一時の聲名を博し得たる所以にして、魯縞を穿つ能はざる强弩の餘勢今に猶ほ社會一部分の讀者に渴仰せらるゝ者、敢て理なしとせず。この頃太平新聞に連載せる原田甲斐の如きは、興味索然、終に當年の精采氣力を認むるに由なしと。雖も、この微々たる無名の新聞紙をして兎に角生命を繫ぎ得せしむる者と聞くに至りては、死馬の骨五百金の價ある者、非歟。

次に弦齋は、之を講釋師に喩ふるとき、松林伯圓、或は庶幾からむ。飽くまで今樣にして情に近く平易と流暢とを主として、酒でざれ、鹽でざれ、若しく味淋でざれ、之をごちや交ぜにして、分量頗る多く、味に變

化あるを求むるの趣酷だ相似たればなり。但し彼は泥棒伯圓の綽名さへある如く、好んで綠林豪客の暴行を縱談するに反して、此は社會を侮辱し紊亂する底の構想を爲さず、どこまでも罪なく、毒なく、淫靡猥褻、彼の人の子を賊する如き文字なし。蓋し世道人心の上に於ける影響如何に慮る所あり、小說を以て一種世敎の方便と爲す者歟。此の如きは固より文學の眞正本領に非ず、古代東洋思想の殘夢に過ぎずして、兎角の誹議を免れずと雖も、猶ほ聊か高きところなしと謂はず。その作るところの長篇日の出島の如き、批評家は齒牙に懸くるに足らずとして斥くるにも係はらず、大に幼稚なる讀書社會に持て囃さるゝは、文章結構より も主張の成効として見るべく、寧ろ喜ふべきを覺ゆ。

若し夫れ桃水に至りては、唯だ面白く讀ませむと勉むるを知るのみ。浪六の氣骨なく、弦齋の主張なし。彼は固より文學者に非ず、偶ま以て文學者の仲間入したがるは、猶ほ藥舗の番頭、帳合の暇に、春水一派の小說を談ずる類のみ。近刊の文藝倶樂部の卷頭に載せたる書そらごとの一篇の如き、荒唐、無稽、陳腐、不自然、あらゆる這種の文字を以て加ふも、猶ほ足らず。讀み畢るまで、欠伸幾十回、京傳種彦時代の讀本の最劣なる者にして、猶ほ下れり。冒頭第一の文句、「今は昔東國の太守松平陸奥守と聞えしは……」といふ如き、古の物語に擬せしなるべけれど、何ぞその口吻の「一席伺ひます」と相似て聞ゆるや、否、寧ろ祭文調なり。蓋し桃水の小說は朝日新聞の讀者に限りて、讀まるべき者なり。文藝や、新小說に首を出し、大方に讀んで貰はむなどの考を起すに至りて、唯だ僭越といふべきのみ。

典故の運用

古への小說家は、皆多少學問の修養あり、歷史、地理、風俗の變遷等、大方は領會し得て、以てその構想に資せり。その平生蘊蓄する所の知識は、獨

り小說中に發洩するを以て足れりとせず、各自隨筆の選著あり。京傳の骨董集に於ける、種彥の用捨箱に於ける、將た馬琴が玄同放言等に於ける、雜駁なりと雖も、豐富なるを多とすべし。今樣は無下にいやしき爲而非小說家は、淺薄なる經驗を種として、萬の言の葉を編み出し、一時の虛譽を博するに過ぎず、井の淺き者は、その枯るゝこと亦た早し、彼等が永く續いて作品を出す能はざるもの、その理因の一は、確に此に存すといふべし。かゝる中にありて、桃水の漢學通こそ中々に凄しき者なれ。

畫そらごとの「三」に、醜貌怪容の人の故事を、漢土の古書より拔き出したる、典故の該博を以て誇り顏なりし馬琴と雖も、必ずや九泉の下に慙愧する所あるべからむ。これは姑く措きて「九」に至りて、三種の畫幅のことを記するを見る、其一は悼倡君が春申君と密通して武安君李牧を誅せむとする狀を畫き、其二は陳の靈公が寵臣公孫寧と夏姬が衣を被りて踊狂する狀を畫き、其三は則天武后が辟陽張易之と二人樓閣に上り

階梯を引かせて宴樂の狀を畫けりといふ。終の一は眞違もなき樣なれど、他の二は多少耳新らし。第二の公孫寧といふは、孔寧、儀行父、二人のことなるべし。若し夫れ第一に至りては、余輩の淺學なる、未た耳にせざるもの、出所は何に在りや、後學の爲め、承り度き者なり。この分にては、彼の醜貌怪容の一件に就いても、眞違なきを保せず、但し面倒なれば、一一探鑿は爲さゞるべし。

聞くむかし式亭三馬、源語の講義を聞くや、半にして廢して曰く、稗史小說を作る能加減に似つかはしき事を引き廻はせば足れり、何ぞ特に一々故義を究むるを要せむやと。桃水たるもの或は亦た同一の主義を以て筆を弄するか、その是非は爰に論せず、而して彼の講釋師が故事を引く多くは此類なり。此に由て之を視るも、彼が講釋師の化身としか見えざる下卑賤劣なる小說家たるを知了するに足らむ。彼の如き輩に向て、文學の眞義を說くは所詮無益の事なるべし。余輩、復た何をか言はむ

文壇の生氣

國民之友、一たび新例を開き、毎年夏の讀物として、諸雜誌が競うて夏期附錄を掲げし時代は、今から思へば盛なることなりき。文壇生氣の沮喪は、雜誌界の恐慌と伴うて、昨秋より今に至りて、猶ほ止まざらむとす、而かもその恢復の期、豫め知るべからず。嗟乎、何ぞ心細きの甚しきや。今夏の如きは、特に目ぼしき新刊なく、それが爲か、あらぬか、諸家の舊稿を蒐めたる、片たゝる小冊子、賣口頗る好しと聞く。この一事を以て、社會人心の逆戻りを證すと爲すが如きは、推斷むしろ暴に過ぎて、取るに足らずと雖も、その饑渴の狀態に在るは、遂に爭ふべからざる事實たり。故を以て、要求を囑するの聲は長しへに絶えず。而かも老成の大家は、沈默して言はず、新進の作家は、獨力荆榛を排して進む、底の勇氣と自信とを缺き、遂に一般の求むる所を滿たす能はざるなり。然れども、文學者は、他より動されて漸く起つ如き意氣地なき態をなすべからず。要は各自得たるところに就いて、孜々怠らず。自國の文學を樹立せしむる爲に、努力せざるべからず。一時の毀譽褒貶に心を動かし、或は喜び、或は悲しむもの何ぞ道ふに足らむや。修養固より缺くべからず。之を以て沈默の辯解となす、或は可なり、但し恐るゝところは、恬逸懶放に陷り、再ひ爲すことあるべき能力を失ふとならずやといふに在り。

花袋の「ふる郷」

嗚呼故郷！故郷は、實に飄涙せる游子が胸奥に潛める、一種靈妙なる琴線なり。情、一たび動いて、之に觸るれば、無限の妙音を發す。むかし劉琨胡騎に晉陽に圍まれき。琨、夜に乘じて、胡笳を軍中に奏す。賊、流涕歔欷して、懷土の情あり。曉に向つて、又吹く。賊、遂に圍を解いて去りきといへり。若し、夫れ、月照の遺吟とか、埋骨豈無墳墓地、人間到處有青山といふに

至りては、匿より時勢の必要に驅られて、爲にするの意に出でしもの、到底人の眞情と爲し難し。見よや、泗水の亭長、すでに天下を一統し、大風起て雲を飛揚せしめ、威、海内に加はるの時に當り、何か故に豐沛の父老を聚め、酒を置いて、舊故を語りしか、故郷の前には、英雄なく、兒女なく、功名なく、富貴なし。何となれば、故郷は、美妙なる天眞の一大魔力なればなり。この魔力は、最も純潔優美にして、常に珠の如き涙を伴ふ。故を以て、たとひ其心たるや、冷酷頑僻にして、鐵の如く、灰の如き人なりと雖も、中宵夢圓かならずして枕頭に風雨を聞き、曉天程に上り馬上に鵑響を耳にするとき、豈に潸然として客涙に咽ぶことなかむやは。傳ふ、仲麿明州に在りて皎月の東海の波上に生るゝを視るや、愁然歌て曰く、青海原ふりさけ見れば、春日なる、三笠の山に出でし月かな、と。千秋の下、一唱三歎、人を して酸鼻せしむ。彼の虛傲、僞張、故らに情を矯めて、自ら英雄豪傑の皮相のみを摸する小豎子の如きは、固より論ずるに足らざるなり。知らずや、

英雄豪傑の天眞爛熳、反つて兒女よりも多感多涙なるを。蓋し愛家の情なきものは、愛郷の情なきものならむ。愛郷の情なきものは、愛國の情なきものならむ。故郷はかくの如くして、詩人の好個の題目たり。余は花袋が慧敏の眼光を以て、筆をこゝに着けしを喜ぶ。

瀟洒たる百五十頁ばかりの一冊子、落魄の游子が、故郷の門閭に入りし刹那、風を得たる走馬燈の如く、極めて急に廻り初めし、ありとあらゆる者の紀念たる、慈母や、祖父や、友人や、沼や、寺や、川や、戀人や、恩師や、黃楊の樹や、夜學會などを錯綜したる幽艶なる詩的趣味を、その獨特の清新なる筆致を以て、叙述せしものゝよしや、例の多少冗長なる辭句に富みて、截利快痛ならざるを傷にするも、猶ほ黃絹幼婦の讃辭を呈するを惜まざるべきなり。

由來、花袋は小説もやり、新體詩もやれども、さして見るべき者なく、紀行文は比較的に長所たるが如しと雖も、豪宕雄壯の景を描破すべき翻

海倒山の大手筆なし。たゝどこまでも、清新にして可憐なり。故に、この種の題目を操縱するに適す。惜む所は、その全力を傾注せざりしかにあり。然れども、少年諸子が新秋燈下の讀物として不可なりとは、謂はず。文情縷々、絶えむと欲する處に於て、無限の風神を見るといふべきのみ。

貧富の階級

衣食足て、禮節は知るべきのみ。名は忘れし佛國の一小哲學者はいへらく、社會といひ、國家といひ、不完全なる者の發明ありてより以來、吾人いかに自由を奪はれたるよ、いかに權利を褫がれたるよ、噫、と。吾人は、常に疑ふ、文明といふ者は、社會の一小部分に限れる者なるを。自由といひ、平等といひ、同權といふ、名は則ち美なり。然れども何如せむ、是れ貴賤の族制に代ふるに、貧富の階級を以てしたるに過ぎざるを。

物質的文明の進歩を代表すともいふべき、精巧なる諸種機械の發明は、使用する勞働者の數を減し、貧民をして愈よ職を失はしめ、之をして泣面に蜂なる重ね〳〵の不幸に陷らしむ。是れに於てか、穿隙の盜を爲さざる限りは、溝壑に餓死する悲慘なる運命に立ち到らむとす。此の如きは、眞に憫むべきのみ。而かも、世はこの下流社會の止むを得ざるに出でたる犯罪を尤むるに嚴にして、上流社會の故意に出でたる惡德を恕するは、何の故ぞ。かの下流社會に於ては、教育固より普及せず、之に加ふるに、家庭の構造、生活の方法等は、その風儀の發生に、至大なる關係を有す、且つや家族は社會の單位として、その影響する所、固より少なからずといはず。

We quareled like blute and who wonder?
What self-respect could we keep,
Worse housed than your hacks and your pointers,
Worse fed than your hogs and your sheep?

Our daughtors with base born babies,
Have wandered away in their shame;
Yf your misses had slept, squire,
Where they did your misses night do the same.

今日社會問題の研究、漸くにして盛なるもの、誠に其理なしと謂はず詩人といひ、小說家といふもの、固より人と隔離するを得ず。而かも同情なく、熱血なく、清涙なく、絕えてこの間の消息を傳ふるを期せず。僅に探偵者流の小文士が、覺束なき筆先によりて、余輩はその實況の一斑を聞くを得たりしのみ、嗚呼、今日の貧民は、其れ愬ふる所なくして止まむとするか、彼等をして、多少高尙なる快樂を享受するを得せしめ、兼て安心立命の境地に到達せしむるは、果して是れ誰の任ぞ。

「鬘下地」

單行の小說、久しく跡を絕ちしが、輓近に至りて、又ぽつ〳〵出初むる傾向あるが如し。櫻痴が山陰麒麟の如き、未だ言ひ爲すに足らず、風葉が苦心の作、女歌舞伎、いづれ出つべしと、久しき前より傳へられ、大旱の雲霓として望まれしが、こたび盛裝して、雜誌店頭に上りし鬘下地は、確にその衣裳を改めて、江湖に見えたるにやあらむ。世間の視線を一身に萃めたる人氣取の女優、坂東染八が、なにがし文學士との因緣斷ちがたく、妻ともつかず、客ともつかず、當座はをかしき雙棲をしたりしものから、性癖の相反するは、遂に容られず。鵲駕已に還りて、墜歡拾ふに由なく、覆水盆に反らず、破鏡再び照さず、憐むべし章臺の楊柳、裊娜の姿、なほ情致をしのぶべきも、春風いたづらに寂寞たり。起て技を演ずる舞臺の上に、覺えず、曲中の人と同化し、恩愛一塊の肉を憶うて、狂亂の悲劇を活現せしに畢る。着想は、一とほり尤らしく、ちと凝り過ぎし痕跡はあれども、先はさしたる大闕點なし、然れども、蛙の子は科斗に過ぎず、彼は文想とも

に、到底、その師たる紅葉の繩張を跨いで、一歩を踏過することを敢てせず。果然、小紅葉の綽名は、その同輩の間に喧稱せられつゝあり、おそらくは、行末長く、この大榮譽ある好名稱の下に、一生を埋却せむとするなるべし。而して、彼の文藻は、年が年なればにや、猶ほ未だ沈着老成の域に至らざる者ある如く、試にその所謂苦心の章句を摘載せむに、「狂言もはね打変して塒を急ぐ夕の鳥」「辛苦の皺をば野邊は今霞引幕雲雀の囃子」などいふがあり。一讀おもはず噴飯す。釣針ならねど、矢鱈に引かけたがる貼張附熨を勉めて、迂拙かくの如きに至りては、むしろ憫むべしと爲す。且つや第一回第二回の如きは、扨ても自ら辛抱してよくも〳〵書き立てしものかな。當人は之を以て十分に所謂通なるものを極めこみたる積なるべけれど、讀者は、一品も多く賣りたがる呉服屋の忠義小僧なるものが、豆藏めきし饒舌のそれよりも五月蠅く、覺ゆるのみ。大通もかくては、いやらしきものなり。一笑。

風葉と鏡花

紅葉門下の桃李、世に風葉と鏡花とを推す。而かも風葉は、余が前に之を蛙の子の科斗に喩へたる如く、全く紅葉的なり。淺易の想を文るに、彫繪の辭を以てし、勝を委曲纖軟の趣致に取る。その氣局の狹少なるは、遂に爭ふべからず。詮するところ、其作は"Not inspired, but made"の者にして、詩歌の眞本義を發揮する者にあらず。若し夫れ、鏡花が之と門を同うして出でしに至りては、誠に瓜の蔓に茄子を生したる類乎。鏡花の作品、世に出づるや、毀譽褒貶、交も到り、論未だ定らず、其定まらざるは聊か大なるところあり、尋常の代物に非ざるが爲ならむのみ。蓋し彼は誠に詩味を解するもの、その落想に、一種警拔幽奥の趣あるは、他に匹儔を見ざるものといふべく、時に險奇怪譎に馳せて、劇心裂腸の文字、夜堂人なく、鬼氣森として襲ひ來る底の者あり、未だ頗る到らずと雖も、是れ、その強い

て求め勉めて過ぐるの故に出で其失やなほ有望的なり唯だこの初一念あり他日心機開通し詩境進開すれば粟小の寶珠化して四萬八千塔となり燦然たる光明能く四面に融透するものあらむ之を一言すれば風葉は淺才なり庸才なり鏡花は奇才なり神才なり故に前者の作るところ小道具の鑿の先に出でゝ技工を專にして典型小なれば得る所大ならざる代りに失ふとき亦た小なり後者は渾身の力を籠めて沛然一揮立ろに章をなして血沸き肉躍り縱横馳突局面既に大にして得失亦た大是れその時に善あり不善ある所以兩者を比較するとき其の詩才の優劣詩品の高下固より天壤も啻ならずといふべし趙甌北句あり曰く到老始知非力取三分人事七分天之を轉用して以て詩才と作品と相關するの理を論ずべし技工の巧を飾るべきは僅に三分にして言はゞ瑣末に過ぎず而して根本の七分は構想の妙に因るといはざるべからず今夫れ天に得たるところ多き者他は追々に兼有併得すべく遂に及び易からずと爲すなり余は鏡花の一天才なるを知り黑百合のなほ鬚下地に勝れるを斷言するに憚らず鏡花たるもの努力して怠らず早く渾成圓熟の老境に到達するを期せよ

簡潔の文章

むかし歐陽公客と外に出づ街上忽ち放れ馬の駈け來る者あり老犬地に臥し之を避くるに暇あらず遂にその蹈み殺すところとなりしを見るや歸て客に問て曰く子之を記せば如何と客對へて曰く犬あり通衢に臥す逸馬蹈て之を殺すと公笑て曰く子をして史を作らしめば千卷萬卷猶ほ足らざる可しと客仍て公にその何と書するかを問ひしに曰く馬犬を路に殺すと余今にして此の一條の話柄の當今文壇に對し頂門の一針たるべき價値あるを知りぬ蓋し現時の文章之を十數年前に比すれば精密巧妙見るべき所あり確に進歩をなしたるに相違なき

も、冗長、敷衍の弊を生じたるは、又た確にその病なり。而して、その俑を作りたるものは、實に民友一派にあり。その勢の風靡する所、一世を席卷して、遂に此に至らしめたるが如し。夫れ、かの民友一派の文たるや、歐文直譯體より出でゝ、委曲周匝を貴ばたる極は、自らその瑣碎軟弱に陷りたるを知らず。唯だ文章篇幅の一點より見るとき、その長きことは、三伏の牛涎の如し。夫れ、たゞ委曲周匝を主とす、故を以て、含蓄の深きものなく、餘韻の長きものなく、一誦面白しと覺えたるものも、再誦すれば、絶えて其妙を見ざるなり。かくの如きは、新聞雜誌の論說、たゞ一時の間に合せば濟むべき種類の文章に適すと雖も、苟くも詩歌の範圍内に入るべき美文に在りては、斷じて避くべきものなり。余輩は、今の世に於て、一字を增減ずべからざる文を見ざるを悲む。少年子弟、文を爲るを學ぶもの、先づ敘述排置の上に於て、語少くして意足る如き、簡潔の姿致に於て、其意を致さゞるべからず。

紀行文學

すでにこの純潔なる大自然を以て、吾人人類の前に披展されたる一大詩卷と爲せば、之を讀破して、幽秘の意義を闡明し、その價値を比較し批判する、亦た可ならずや。且つ夫れ、趣味の高尚なる者は、善く自然を觀察するを得べく、感情の溫雅なる者は、善く自然と同化するを得べし。かくの如くして、詩的感興の喚起さるゝあり、之を敘述したるもの、亦た純たる文學的作品たるを得べし。古來東洋に於ける文學者の思想傾向は、人世康衢の上にあらずして、山水風月の裡にあり。故を以て、紀行文學の由て來るところ、亦た久しきのみ。東漢の馬弟伯が封禪儀記より始めて、李習之の南行記、歐陽修の干役志あり、下りて入蜀記、吳船錄の見るべきあり、遂に徐霞客の遊記にいたりて、大に備はれりとなす。更に之を本邦に見るに、貫之が土佐日記を初めとして、更科日記、十六夜日記など、頗る

古く、足利氏の中葉以後、公卿僧侶が流離巡囊の時に成りし記程の書、群書類從に收めしもの、蓋し尠少にあらず。其後、三千風、古松軒、南谿の輩にいたりて、卷帙浩瀚なるもの、頻々として世に出てぬ。かくの如くして、我邦に存する紀行の書は、汗牛充棟も啻ならずと雖も、純然たる文學的作品として推すべきものは、寥々晨星も啻ならず。何となれば、記するところ山程水驛の次第のみにして、或は風俗人情に及び、或は奇聞古蹟を誌することあるも、絶えて詩的感興の貫通するものあらず。故を以て、史家其他の專門家が參考に資すべき者たるを得べしと雖も、之を文學的方面より見るときは、亦た言を爲すに足らざる者、比々として是なり。紀行文中、人間を記するは不可となさず、然れ共、主とする所は自然の觀察叙述にあるを以て、兩者を對峙せしめ、錯綜せしめて、一層讀者の同情を喚起する如くならしむるを可とす。而して不十分なる史的考證の如きは、斷じて沒趣味に陷らしむる源因たるを忘るべからず。若し夫れ、現時流行の紀行文にいたりては、誠に或人のいべる如く、旅行案内の燒直位の者にして、却て名所圖繪にも及ばざる者あり。かくの如きは、紀行の文學となり得へき特性を領得せざるに起因す。余は柳子厚が柳州八記を讀み、アービングが旅人の譚を閲して、手卷を釋くに忍びざるものあり。愛誦百回にして、猶ほ且つ罷む能はざらむとす。是に於てか、愈よ紀行文學の可能を信じて疑はざるなり。

昨今の漢詩壇

社會人文の進捗は、自然の大法則にして、悠久に亘りて變せず。苟くも日に新にして、又日に新たにすべき現今の時世に在りて、昔なからの陋習を固守し、自ら之を悟覺せざる者、其愚や實に憫笑すべきのみ。余輩は常に漢詩壇の衰滅に瀕するを見て、國民文學の樹立の爲に、額手して慶せずむばあらず。五六年前、詩壇末路の燈火は、星社の諸人によりて、その

名の如く、微明を點したりき。而かも時勢風潮の然らしむるところ、永續儼存するを得ず。聞くが如くんば、青崖脫し錦山去りて後、槐南居然として牛耳を執り、一綫の生命を維ぐを得たりしも、今や殆んど期定の會合をなすことなく、時に送別祖道の會を爲せしことあれども、固より一時の事に過きず。是に於てか、槐南は別に親近の諸輩を招致して、雪門の一旗幟を樹て、月ごとに日を期して霞舉說詩軒に詩醇杜詩の講義をなし題を課して創作を試み、後に「新詩綜」を發行して、大に人の耳目を聳動せしめむを期せしが、昨年歲末に於て之を廢刊し、今は殆んど稱道するに足るもののあらざるに至りき。他に梅潭等諸老の統率するところ晩翠吟社も亦た久しく消息を耳にせず、石埭の新創せし一半見吟社知らず猶ほ存するや否や。更に之を新聞雜誌の上に見るに、日本新聞、文苑の一欄、湖村の精勵に出つと雖も、生半熟の新顏のみ徒らに多く、竹磎の刊行するところ鷗夢新誌はなほ健なるべきか。之を要するに、現今の漢詩壇日

一日にその運命を短促して、よその見る目も頗る氣の毒なり。

こゝに槐南一人は流石に騎馬の才射鵰の手といふべく、加ふるに半生蘊蓄するところ優に他の典據となすべし。余は元より彼が帝室制度取調員として如何なることを爲しつゝあるかを知らざれども大學が新たに之を中幸に潰しの利く者となすに足るべく、現今の所謂詩人輩起し來り講師の班に參せしめ、支那文學の一部を講演せしめしことの頗る正當なるを信ずるものなり。蓋し彼の如き根がいづれ舊思想を以て立ち已に自ら「詞章の學」などやゝ奇なる名目を標榜して滿足し居ると傳へらるゝ者なればとても體系的敘說をなすを望むこと能はざるべしと雖も之に由て從來學者の拋棄して秋毫顧みざりしところ、支那詩歌の研究をして大學內に盛ならしむるは强ち望むべからざることにも非ず。陳吳にして在らば劉項の出づるや亦た期して待つべく、頗る慶賀すべきの事に屬す。蓋し漢詩の摸作は斷じて廢すべきも、漢詩の研

究は愈よ推奬すべき者なればなり。

少年文學の本領

かの葫蘆依樣の醜を極め、瑣碎卑猥にして不健全なる所謂戀愛小說の外、思を搆へ筆を着くる處なきかの如く思惟せる、群小作家の横行する現今の時世に於て自ら一派を拓開し少年文學の名目を標榜し、忠實なる細筆を驅りて黽勉姑らくも休まざる巖谷小波の如きは多少の識力を備ふる者となすべく、又聊か高しとすべきに庶幾からむか。余輩は某評家が之を明治時代に特殊なる產出の一として數へしことの必ずしも過賞となすべからざるを知る。然れども、彼の作るところ未だ必ずしも余輩を滿足せしむるものならず。何となれば、多くは古今東西に存在せる童話の紹介に止まり、又その創作に係るものは、僅に以て無害の讀物となすべきに過ぎざればなり。儻しくは是れ少年文學の眞本領を

知悉せざるに由るか將たこれを知るといへども未だ行ふに暇あらざるか、他の西鶴に擬せる修身童話等の如き、元より不文なる敎育家の手より出でしもの、その稱道するに足るもの少き、固より怪しむに足らず。

ろも少年文學は、敎訓を主とする者にして積極的に有益明晰なる理義を含有し、之を一貫するに健全確固なる思想を以てせざるべからず。更に之を細說すれば、第一に兒童的なるべく、第二に想像的なるべく、第三に道德的にして、正邪善惡に關する判定を下すに慣れしむべく、第四に多訓的にして、社會天然の現象事項に關聯し、不朽の價値を有し、常に反省を爲さしめざるべからず。而して第五には調諧的にして、深き印象を與へしめ、種々興味の源泉を疏導するものたるべきなり。この五件の要求に適合したる者は、少年文學中の絕品にして、悠久の價値あり。余輩はグリムの國民的小話の善く之に當つべきを知ると共に、ロビンソンクルーソーの一書を有する英國文壇の千古の光榮を羨望せずむばあ

らざるなり。而してロビンソンは最も人耳に近く、之を説明すれば、少年文學を知らしむるに於て、頗る便宜なれば尚ほ下に多少の言を加ふるを得むか。

ロビンソンの著者ダニエル、デフホー其人の本領を發揮し、之に確然たる證を與へしは、ヘルマン、ヘットチルの功に歸すべしと雖も、ロビンソンの書に就いては、一百年前すでに有名なるルーソーによりて稱道されしとありき。曰く、こゝにエミールが最初に讀了し、永く彼の書籍的寶庫となり、依て希望の基礎を確立せしめし一書あり。そは凡ての天然知識の論議を莊重に道破したる教科にして、又吾人が進捗をなす間、常に試驗石となり得べく、その興味は決して腐敗することなく、何時見るも旨新らしく、無限の快味を博したるものなりき、かくの如き不可思議の書は、何者ぞといふに、是れアリストートルに非ず、プリニアスに非ず又ブッソンに非ず、實にロビンソン、クルーソーその者なりきと。

今夫れロビンソンの書たるやゝの基礎と開展とに於て兒童的なる、と復た贅せず。且つや外部の副産物は全く教育の目的に對して作爲されしこと、殆んと疑なきか如く、一言すれば簡單にして流暢、また頗る想像に滿ちたり。就中この想像たるや粗雜に現實の境域に進入したるに非ず、獨特の運用を以て之をなし、技工の精妙、炳然として觀るべし、更にその天然知識と相關するの深きと、道德的に構成され且つ家族社會を反映的に悟覺せしめ得べきとは、改めて詳論するを須ゐず。誠に少年文學として他に匹儔を見さる者と爲すべく、局面の大と規畫の妙とは殆んど加ふること蔑かるべきのみ。この書はかくの如くして人間の天然的發達を總括して、殆んど剩すところなく、以て頗る大と呼び得べく、依て有力なる形像を余輩の眼前に幻出せしむもの、故に若し謂ひ得へくむば、實に歴史哲學の一種たるべし。すでにこの絶大無比の價値あり、故を以てその及ぼせし効果は、一々述ぶるに堪へず。その初めて世に出で

しや、直に老幼高卑の愛讀を博し、幾くもなくして殆んど凡ての國語に飜譯せられ、ポタニー灣頭、瘴烟蠻雨の寰區に於てさへ、倫敦、巴里、聖彼得堡の市民に見ると同じき喜悅を以て、家傳戶誦せられ、又洋中寶珠の名を冠して亞刺比亞人の好愛と得きといふ。少年文學の著作も、此に至りて決して輕々看過すべきものに非ざるを知らむ。

余輩は現時の我邦に於て此の如き者の出でむことを望むの頗る大早計にして、猶ほ卵を見て時夜を求め、彈を見て鷄炙を求むるに似たるを知らざるの愚にも非ず。蓋し獨逸に於てさへ、グリムに注意せられ、而かも猶ほ童話の價値を解するもの多からずといふを、この極東新進の國に於て何ぞ然かく早く言を爲すに足る者あるを得むや。然れども家庭に於て文學を樂しむに至らざるは、一半の源因、確に少年文學の缺乏にあるを知らば、之を推奬すること固より非理のことに非ず。而して余は極致の標型に就て、敢て如上の言をなせしのみ。

修辭の工夫

文章たる者が、人間思想の文字的表顯にして、之を讀者の心靈中に傳通輸達し、確然たる認知を得せしむるを以て、その理想となすとは、今復た贅せず。而して現時文を以て家に名づくる者を見るに、雙方のエコノミーに注意せざるは言ふまでもなく、聲調措辭に寸毫の顧慮を加へざれば、讀者をして十分なる欽尙愼重の態度を以て之に臨ましむる能はず。されば折角の名論卓說ありと雖も、之を讀み終らしむると能はず。此弊は詩人と文士とを問はず、一般に見る所にして、その源因を探究すれば、修辭の工夫に意を致さゞるにあり。故に斯學の研究は、今日に於て最も推奬すべき者なり。エドモンド、ステッドマンは嘗て言をなして曰く、凡そ藝術と稱するものに於ける天然的進歩は、局部細微の個處の整飾より始めて、全體の完璧に及ぶ者なり。若し、夫れ他が老熟の筆致を模倣

して得々たる者は、進歩の徑路を知らず、一躍以て彼岸に至らむと欲すると同じく、無法亦た極れりといふべく、その成功を見ること尠しと。而して彼は更にシニヤンの事に論及して曰く、彼はその少時にありて頗る熱心に辭藻の運用を學び程なく之に熟達するに至り、依て之をかの清新なる詩想の上に被らしめたり。而して現時にありては、人は、粗莽の言辭を發するを耻とせず、而かも現實世界の僅少なる經驗と、偏畸したる觀察とを以て自ら足れりとなすと。たまゝ以て東西その弊を同うしたるを見るべく、また修辭の工夫の必要なるを知悉すべきなり。

世愈よ下れば、すべての事、自ら實際的傾向に趨き、唯だ一時の間に合はせを以て足れりとし、藝術の理想を沒却するに至ると、殆んど言を爲すに堪へざる者あり。かれ等實際的人民の思想を以てすれば、修辭の工夫を以て文章を粧飾するや唯だ論理の確固ならざるを掩蔽するところの狡猾手段にして、秋毫道稱するに足らざる細工に過ぎざるなら む

蚫、何ぞ其謬れるの甚しき。而して彼等が平易直接にして技工なき者を以て最善となすや、亦た疑ふべからず。カンターベリーのフランクリンは、その說教を始めむとするに先ち、聽者に告けて曰く、余は預め聽者諸君が余の粗野なる言辭を寬恕せむことを望む蓋し余は唯だ明白にして絕えて掩藏する所なきを以て善となすが故に、かつて修辭學を修めざりきと。かくの如き辯解は、偶ま以て斯學の本領に對する誤解と謬見とを表彰せしに過ぎざるべきのみ。蓋し彼等は明白にして掩藏するなしといふを以て文章の美を極めたる者と思惟するならむと雖も、憐むべし、終に辭章の美が果して何者を意味するかを解知せざるなり。ルーテル曰く、修辭は言語を以て事物を修飾し兼ねて之を廣大にするものなりと。而してマッシュー、アーノルドは曰く、物の迂曲廻旋して始めて之を表顯すべき者を直接に發出せしめむとするは、至難この上なきことなりと。是れ以て世人の所謂明白なる者の遂に明白ならず、掩藏する所

なしといふ者の遂に模糊に畢るを證すべきに非ずや。

余は以上の理由を以て、今の日に、修辭の學が普通學校に於て、必ず一科を設けて教授さるべき必要あるを知ると同時に、苟くも之を悟覺したる者の他を待たずして、自ら研鑽を爲すを望まざるを得ず。勿論修辭の學たるや、いかに通曉すと雖も、直に以て命世の大文豪を起すべき者に非ず、復た決して思想の價値を昂め、立言をして特殊ならしむる能はず、唯だ才能の存する人に限り、之をして正當なる方向を取るに至らしむべきのみ。然れども獨逸の一名家がすべての藝術上の才能は生れながら有する者にして、今更詮なきことなれども、若し勉強によりて發達し得べき才能の世にありとせば、ろは疑なく獨りかの文章に於ける者ならむといひし如きは、多少の議論を避け得ざる者にもせよ、穩健確固の言として可なるべく、修辭研鑽の効果の異常なるを知るに足らむ。且つや、之より進て實地に文章の修錬を爲すに至れば、必ずその內容として

一の言ふべき者を有せざるべからざるが故に、尋思構想は遂に廢すべらず思索の鍛錬に於て益する所亦た尠少に非さるべければなり。

氣品の高卑

すべて藝術的作品に於て、技工的評量を先とするは、勿論なれども、余は其外に所謂氣品なる者が、批判者の腦中に於て著しき勢力を有するを知る也。然らば氣品と手腕との兩者兼ね得たる者にして、始めて神品を以て許すべきを斷言し得べし。例を以て之を言へば、彼の幇間的畫師の稱ある山名貫義輩の手に成りし着色畫と、前年物故せし野口幽谷の寸縑と迚ても比べ物にならぬは、いふまでもなく、拙堂笛浦の徒の文、いかに絢爛を極むと雖も、一齋息軒・聱牙に及ばざるは、讀者の善く知る所なるべし。ポープの如き英國詩壇の一名家たるに相違なく、その傑作「セレープ、オブ、ゼ、ロック」の一篇に至りては、特に文字の華麗と富豔とを見

るべしと雖も、終に氣品の缺乏よりして、批評家の排斥を免れず。時やゝ後れたりと雖も、蘇國の土音を脱せざるバーンスの夐に超越する所あるを疑はざるなり。蓋し、この氣品なる者は其人の天分に關するものにして、心靈的根抵が、その主要なる基礎をなすと雖も、他に猶ほ複雜なる者を包含するに似たり。故にその研究、頗る困難にして余の寡聞なるや、歐西の評家、未だ之に就いて確然たる解説を下せしものあるを聞かず。然れども私に謂ふ。地歩高ければ局段亦た高く、識見高ければ意度亦た高く、氣量高ければ骨格亦た高しと。而してこの地歩といひ、識見といひ、氣量といふもの、固より修め易からず、是れ天分といひて敢て不可なき所以のみ。顧て之を現時の文界に見るに、一群斗筲の少年文士輩あり、自ら才力を知らず、其分に過きて高く自ら標置し、相集りて朋曹を結び、互に阿諛褒稱をなし、當代の名ある者を侮慢し、惡言を崇飾し、凌傲自ら快と爲す。夫れ傲は凶德なり、況んや恃む所なくして、之を行ふもの、その愚

や憐むべく、其志や亦た小なり。而して彼等の爲すところを見るに、實際に於て氣品の高きものあらず、僅に覺束なき技工を以て自ら滿足するのみ、加ふるに修養を爲すを知らず、何ぞ言ふに足る者あらむや。修養は獨り學問をいふに非ず、亦た人格にあり。余は此言を爲さゝるを得ざる今日の非を悲しむ者なり。

少年文士を戒む

曩に花ひと時の所謂文學の盛行につれて、僻陬山村の少年輩に至るまで、苟くも中學程度の知識を備ふるものは、夢の如き青春の希望と野心とに驅られて、その作り出せし詩文を雜誌なんどに投寄し、その採錄して印刷に附せらるゝを見るや、さながら登龍門の榮ほどに思ひ做すものあり。詮し來れば、其志大なりとは見えず、誠につまらなくして、殆んど稱道するに足らずと雖も、要するに誰しも有り勝ちの事にして、且つ

は、罪なく、博奕にまさること、萬々、亦た以て深く責むるに足らず。この風は、今に至りて猶ほ衰へず、少年雜誌の賣口、頗る善しと傳へられ、加ふるに雨後の筍の如く、その新出の者を見る、亦た其故なくむばあらざるなり。然れども少年輩の手に成りし者を檢するに、甚だ首肯する能はざる者なくむばあらず。一般社會頽廢の影響は、さすがに顯著なりとは見えねど、さりとて亦た生氣振起したる者もあらず。彼等は元、はかなき希望と野心とに驅られ事をなす者にして、人より多少えらく見られむとを以て、唯一の目的となすに似たり。余はこゝに特に新體詩の流行を認む、すでに新體詩といふ、幾分普通の文章よりも立派らしく、之を作る者亦た何となくえらく見らるると謬想すればならむか。かくの如きは、啻に謬想として、其人の向ふところを誤らしむるのみならず、亦た將來の文界をして萎靡せしむる一大原因たらずむばあらず。何となれば、新體詩を作るものは、七五とか五七とかに文字を排列鋪張すれば、その內容は花

を賞し月にかなしむ底の承嗣的舊時思想に外ならずとするも、將た今樣はむげにいやしき失戀の吹聽に過きずとするも、兎に角、律語たる名義を具へて、彼等の望む如くに、俗眼を瞞着するに足ればなり。此さもしき輕佻の心より延いて思想の鍛錬を怠り、專ら外形を重んじて、內容を輕んずるの風を醞釀せむとす。且つ夫れ律語の體制たるや、固より大ならず、而かも修辭の工夫をなすときに方りてもその推敲は常に一點に止まり、全體の上に大缺點あるを認知せざる如くならしむること往々にして之あり。すでに內容に就いて意を致さず、又外形に就てその完を求めず。少年文士が作詩の弊は、かくの如くして實に三文の價値を認めず。かの「君が輩何ぞ一詩を賦して虜を退けざるか」といひしもの、當に少年輩が紳に書すべき千確萬確の名語たるべきを覺ゆるなり。勿論吾等は敢て傲然自ら持し、以て少年文士を輕侮するものに非ず。固より彼の自己の天分を覺知して從事する人に對しては、之を休止する權利を有

せず。然れども之を一般にいふときは、律語に先て散文の修養を望まずむはあらざるなり。今夫れ散文なる者は、必ず確然たる見地より出でゝ、多少の含蓄なかるべからず。故を以て實際之を屬するに方りて、多少思想を鍛錬するの必要あり。ゲーテは、その晩年に至りて、後進青年文士の述作を評し、穩健なる散文を以て文壇に旗幟を樹つるものなきを浩嘆して、爲に數千言を費したりと聞けり。而して修辭の點よりいふとき、散文に於ては局面ひろく、意義散漫なるべからざるを以ての故に、あらゆる部分に注意を爲すの要あり。文辭を習熟する、之に過ぐる所あるべからず。故に余は信ず、律語に於て成効せむとする者も、一度は必ず散文の修錬を經さるべからずと。虎を畫いて成らず反て狗に類するは、固より笑ふべしと雖も、鵠を刻して成らず尚ほ鶩に類するは猶ほ且つ取るべきなり。是れ以て初より律語を事とするの益なく、散文を修むるものゝ常に得る所あるに比すべからざらむや。余は之を直接に少年諸氏に勸

奬するのみならず、かの少年雜誌の編纂に從事する諸彦に對してもその採錄の上に於て勉めて此の方針を取られむことを切望せずむばあらざるなり。

文士保護論

屬者、文士保護論を唱ふる者あり。醉人の爛語にもまして、頗る笑ふべきことゝもなり。今夫れ、彼の冷酷なる浮世と鬪ひて、之に打克つは、人生的旅行の理想たらむのみ、故に保護なるものは、自ら樹立する能力なき者に就いて、始めて謂ふべきなり。鰥寡孤獨、もしくは廢疾の者、とてもとても渡るにつらきこの浮世の波濤に駕して超ゆる能はざる者あるに於ては、所謂慈善家なるもの、人道の維持よりして、之を救濟すること、固より惡しきに非ず。而かもその方法にして完全ならすむば、亦た懶惰の游民を增加するに過ぎざるべし。之を要するに、保護の事たるや、他の能

動者の方面よりして申し出さる日はあるべきも、受動者の方面よりして願ひ出づべき性質の者に非ず。よしや如何なる事情ありて、我より言ひ出づべき權利ありとするも、堂々たる七尺の軀、好個の男兒、苟くも強頂の骨あるもの、何ぞ之を爲すを屑しとせむ。且つや、報を望むの心は商人根性にして、哀を請ふの聲は婦女の泣言たるべきに於てをや。

われ等は、所謂文士保護論なるものが、現時に多少の聲譽ある文士自身の口より出でしを見て、轉た慨歎に堪へざらむやとす。今その謂ふところを檢覈するに、何ぞ其れ心細くて悲しげなる。これを夜の野草に這ひめぐる吟蛩のすだくに比せむか、然れども、彼の吟蛩、自ら露を吸うて生き、自ら秋を悲んで啼くのみ、絶えて他と相關せず。彼等は蟲にも及ばざるを見るなり。之を一言すれば、今の所謂文士輩は品性頗る卑しく、特に氣慨に於て缺乏する所あり。卑劣なる下司根性は一般の通性として、その作品の裏面にもほの見ゆること往々にして之あり。仍て此論の出つるを見しのみ。古しへ、武士は食はねど高楊子といふ。之を斥けて痩我慢といふ勿れ、中に自尊の强盛なる意志を存するに非ずや。われ等はこの語を以て大和民族不屈の精神を表彰したる絶好の金言として、愛誦して歇まず。維新以後、歐西新潮の疏導せらるゝや、一般の民心に少からぬ變化を來たせしこと、今復た贅せず。而してこの種の武士的精神は、頭上のちよん髷と腰間の雙刀と共に、一朝にして廢れ了んぬ。滔々たる物質的潮流は大八洲の全部に溢れ、人は唯だ利を求むるを知る耳、復た羞惡の心あるを見ず。米搗ばつたの如く頭にて疊の埃をたゝくを辭せず、豆藏の如く喋り立て、追從を以て禮讓と心得、唯だ他に引き立てられむことを翹望す。その意氣地無き加減は、紅樓媚を賣るところ、纖弱なる女子にだも及ばず。誠に言語道斷のことたるのみならず、よろしく長太息すべきなり。文士保護論の如き、畢竟するに、理窟は跡から付けたるものにして、實はこの根本的精神より出で、社會一般が多少文學の價値を認

識したるに際し、好機乘すべしと爲し、敢てぐづり出せしといふに非ず、試にねだり見て糞の色せる多少の阿堵物にありつき、生活をも多少らくにせめむとする下心に過きさるべきなり。

文士にして社會的生活に多幸ならず、憐むべき境遇に沈淪するは、古今東西、すべて然るところ、固より近ごろ起りしとにもあらず。虞卿窮愁に非すんば、亦た書を著はして、以て自ら後世に見はるゝこと能はざるなり。詩の人を窮するか、窮人にして初めて詩を善くするか、歐陽公の言も、すでに千年を經へむとするに非ずや。有客有客字子美、白頭亂髮垂過耳と吟したる少陵の野客も、トラベラーの曲中に

Or onward, where the rude carinthian boor
Against the louse less stranger shuts the door.

の句を着けたりし當年のオリバーも、將たパンの缺片を市上に拾ひし彼のオビアム、エーターの作者も、ミューズの寵兒としては、千金の子、猶

ほ且つ及ばさる者あり。至竟美の神は妬む故に人は美神と財鬼とに兼事する能はず。窮愁の境涯は時に異常の文士に對して必須にして十分なる要件なることありといふも不可ならむ。今夫れ窮愁に安んする能はず、他の保護を請ふに至りては、すでに文士たるの資格なく、男兒が乾剛の性を失ひたるものなり。余は敢て道ふ、保護論を唱ふる文士は、そのむかし文學及ひ文士の何者たるべきかを十分に解知せず、漫然自ら身を誤りし者にして、かてゝ加へて眞正の美的生活に滿足するの操守なく、金のみが幅の利く俗的生活を願ふものに外ならざるを。聞いて極樂見て地獄たるもの、獨り娼婦の境涯のみに非ず。間口十間の大商店も、中は火の車なることあり。光明なる表面に眩し、暗黑なる裏面を知らず、大早計に事を爲すもの、毎々この事あり。未來の大文士たらむなどいふ希望と空想を有する少年輩は、宜しく之に鑑みる所あるべし。苟くも一だび事に從ひし者は、苦しくとも泣くべからず。龍の泥中に蟠して未だ雲

あらざるとき、猶嬾の笑を奈何ともするなく、時に他の一擧手一投足の勞を望むことあらむ。然れども是れ韓退之の事ならむのみ、吾は之を稱して乞食根性といはむとす。

シャンパンを欲する勿れ、ラムの酒に舌を皷せよ。マニラの烟草を欲する勿れ、ヒーローにても辛抱せよ。乞食しても樂をしたがる素丁稚は、斷然文士たるとを廢して北海道に砂金でも拾ひに出掛けるを宜しとす。鷦鷯林に巢ふも一枝に過ぎず、偃鼠河に飲むも滿腹に過きず、文士が匏米僕賃の資は高の知れたものに非ずや。その以上を望むに至りては慾の沙汰といふべく、至竟文壇の賊なり。若し當年折檻硬骨漢の口調を借るを得ば、臣願くは尙方斬馬の劍を得て……といはむのみ。

長江天塹、豈に能く飛渡せむやといひて、文士數十輩、後庭に侍宴し、狎客を稱する得て、貴嬪と唱和せし支那の梁陳時代や、宮庭的文雅を誇飾して、新作の戲曲を王后貴人の前に捧讀したる佛國の往昔は、定めて今

日の文士保護論者が殆ど理想として見る所なるべきか。然れども聯合軍が天津を陷れ、折角ため置きし敎育資金をも戰鬪費の中に加へむとする今日だめなるは知れた事たるのみならず、かくの如きは、復た國運の振張に對して藥にならぬこと勿論なり。而してゲーテを引き立てしワイマー公や、梅聖俞が一篇の詩を常に錢數千にて買ひ上げ以て美酒を客に供するを得せしめし宋代の一皇親の如き、今の世界に鐵の鞋物なること言ふだけが野暮なるべし。

以上の言、之を總括するに、文士保護論は文士が自ら口にすべき者ならさるは云ふまでもなく、窮愁は文士の藥にして、之に安んすると能はざる者は廢する外なく、又保護にして可なりとするも、保護して吳れる人なきを奈何ともし難からむといふにあり。なほ一言すべきは、保護するに足る人ありや否やといふこと是なり。保護すべき價値のものは、保護せざるも、自ら天職を全うして、確然樹立すべく、その他の群小文士の

如きにありては折角の保護も無益にして攀花折柳の資を與ふといふに過きさらむ。文士保護は今の日にありて敢て喧々する必要なき閑問題なるべし。

現時の文章

現時の文章何ぞ夫れ紛亂蕪雜を極めたるの甚しき。今の文を以て家に名づくる者たゞ漫然として筆を着け拙劣の字を連ね自ら稱して一氣呵成と爲し乃ち速きを誇る其作くるところに取るべきものあらむ謂れなく中には文章の根本的要素といふべき明晰を缺く者さへ少からず何ぞ況んや勢力の善く他の注意を惹起すると醇美の人をして手を釋くに忍びざらしむるものとあるを得むや。一言以て之を蔽へば一時の間に合せのみを以て足れりとなす者文章の廢頽こゝに極れりといふべし。昔者柳宗元言をなして曰く、茲道の大に闡けたるや、家ご

とに修めむことを勵み、精を刓り慮を竭すもの、幾千年。その間、簡札を耗費し、心神を役思するもの、其れ數ふべけむや。しかも文章の錄に登り、彼の後代に及べるは、こゝに數十人に過ぎざるのみ。その餘、誰か爭うて綺繡を裂き、互に日月を攀ぢ、高く萬物の中に視て、雄を百代の下に峙つを欲せざらむや。率ね皆縱曳するも克たず、躑躅するも進まず、力蹙し勢窮り、志を呑て歿す。故に曰く、之を得ること難し、と。文をなすの容易ならざる、實にかくの如し。而してその極致は、內容外形の並行的調諧にあること、今更めかしくいふまでもなく、獨り內部の思想のみを以て評價をなすべからず。げにや太牢の美味も之を破膳に上ぼすときは、箸を下さむとする念慮を減殺すること、あるべく、又苟くも人と相見るもの、大賓に臨むか如き堂々たる風姿あるを以て、一段のことゝなすことも、あるべし。之を古代名家の遺著に觀るに、千歲の下、猶ほ且つ依然として儼存し、特にクラシックとして、その研究の勸奬をなすもの、孰れか卓越して他

の摸倣を容れざる一種優妙の文體あらざる者ぞ。嗟呼、經營をなさゞるもの、如何にして藝術上の評價を受くるに足るべき。余は今日の文をなす者に對して。その如何なる種類たるを問はず、この方面の注意と考察とを望まざるを得ず。科學者の文の如きもの、亦た然り。彼等は毫も文字を解知せず、唯だ裸體的に記述するを以て足れりとなす。是れ非を文るの言、何ぞ以て取るに足らむ。日東新進の國、文化の進捗の著しきを以て自負するもの、中に一個のハックスレーの出でたるを聞かず。かくの如くして自ら科學的思想の普及を論する如きは、斷じて非條理の事項に屬するものといふべし。

今夫れ文章の構成を案するに、その基礎はいふまでもなく、語字の選擇にあり。而して今日使用する文字の多くは、漢學の攷習をなして而かる後に、初めてその出處と意義の範圍とを確知すべきのみ。加ふるに之を一般にいふ時は語字の價値は、獨り之を文章上に使用するのみに非

ず、頭腦中に於て思索を凝らすとき、亦た自ら之を運用するにあり。世人の懵なる、絶えて語字の眞義を探究するを勉めず、どこまでも漫然として使用するを常とし。また他を踏襲して、毫もその根源を窮めず、かくて順次に轉用否な盜用しつゝある間に、遂に誤用となる。所謂少年文士中學に於て碌々に四角なる文字を讀みもせず、加ふるに作文の講習をなさゞる輩に於て、この弊殊に多しとなす。宜しく細密なる注意を加ふることを忘るべからず。且つ夫れ文字誤用の弊はひとり誤解せらるゝ文章を構成するに止まらずして、因襲の久しきや、觀念の空漠を以て何や、ら高尚と思惟するにいたり、延いて論理の正確を缺き、遂にかの希臘時代詭辯派の横行せし日を回憶せしめむとするにいたり、人間思想の開發を妨害することと少からざるべし。

頃ろ文部省に於ては、小學令の發布をなし亂暴極まれる假名遣の方法を定め又中學の國語漢文の教授を一人に兼ねしむることゝなし、漸

を以て漢文の講習を廢絶せむとする方針を取れりとか聞けり。而して他方に於ては、國語調査會あり、聊か多少の規畫をなさむとする由傳へられ、いつかは文章上に於て、大變動を見るの日あらむとす。余は今之に就いて批判を試むべき準備と餘地とを有せず。然れども思へ、大なる事業は朝夕を以て成るべきに非ず、這般の事、前途なほ遼遠なりといふも不可なからむ。甚だ事もなげなる言分なれとも、余輩が一棺猶ほ覆はざる間は、よしや政府の法令を以て如何なる事の脅迫的に押進められるゝありとするも、それがむかしむかし商君の立法の如く、明日皆令に趨くといふ譯に行かざるとは、鏡をかけて見るまでもなく今の時文は尚ほ幾許の生命を有すといはざるべからず。されば、余輩現時の世に於て爲すあらむとするものは、詰らなき取越苦勞はぬきとして、在來の方式を維持し、唯だどこまでも正確なる運用をなせば足らむのみ。之れを要するに、現時は簡潔洗鍊の文章なく、加ふるに文字の誤用、頻々として絶え

ず、かくて押し行かば、末は聊か案じらるゝふし無きにしもあらず、宜しく今少し藝術的趣味を以てすべしといふにあるなり。こゝに、又笑ふべきものは、己が文字を知らず、他が確然たる來歴ある者を使用せしを云々する職々者流あること、是れなり。今夫れ夜光の璧、車數十乘を照らすもの、天下の至寶なり。然れども暗中に投ずれば、匹夫劍を按じて之を視る。頗る相似たりと爲すべし。又同じく文字を知らぬ手合の中の、少しく氣の利きたる者は、言文一致と出掛けて、其足らざるところを掩藏せむを是れ勉め、清女が枕草紙、紫姫の源語が當時の俗語を使用したるが故に、かくの如くインモータルなりなどぬかす、誠に腹筋千萬のことなり。余輩は元より言文一致とはいふものから、苟くも文たるもの、口頭の語と同しからざる者あるを知る。又この體を以て善く精緻なる事象を寫し得べきを否定せず。然れども、かゝる狹隘なる模型中に自ら限るは、愚の極にして、區々十七字の短詩形を以て生命となすところ、俳人輩中に

この風の流行することの頗る至當なるを認むる者なり。

文章は內容と相待つべき者なるを以て之を一概するを得ずと雖も、カーライルの如き詰屈なる文調と、揚子雲が好んで奇字を用ひたるとは、余亦たその中庸に非ざるを言ふに於て、敢て人後に落ちず。たゞ文字豐富ならざる者は憐れむべきのみ。故に苟くも文學的作品と稱するものは、あらゆるものを調和し筆力の縱橫を以て至れりとなさむのみ。更に細說すれば、本邦の古語、從來襲用せし漢語などいふにも及ばず、俗語などにても取るべきものは盡く之を收め、打して一丸となし、而かも竹木相接するの醜をなすなきに在らむか。之を文章の變遷より考ふるも今日當さに然るべきもの、才人が力を揮ふべき餘地は猶ほ頗る濶きものあり、余輩の囑望するところ、亦之に外ならず。陳吳は聊か自ら任ずるところ、劉項願くは之を來者に待たむのみ。凡そ人はその不得意の者に就て益す饒舌するものと聞く、若し然らばこの一段の論はやがて自ら

戒しむものに過ぎざらむのみ。

少年讀書の趣味

讀書は精神の糧食なり。糧食を要せざる者は、その生命すでに終を告げし者に非ざるか。哀は心死より甚しきはなく、身死之に次ぐといはずや、余輩はかの讀書を爲し能はず、若くは之を要せざる蚩々たる氓の一群を見る毎に、此世ながらの墳墓に入りつゝ、而かも之を自覺せざるの痴愚を嗟せすむばあらず。蓋し糧食の肉體に於けるや新細胞を構成し以て補足の用をなし、讀書の精神に於けるや、また善く新知識を供給し以て希望を起し、前途に一點の光明を認めしむ。誰か人生字を識るを以て憂患の始とはいふ。げに或者は字を識りしが爲に、分外の思慮苦痛をなせしならむ。然れども余輩はグレーが悲歌の中に見えたる文字なきミルトンを以て人間第一の幸福者と爲すこと能はず。得失は兩者とも

に在らむ、唯だ讀書は快味を領せしめ、兼ねて人格をして高尚ならしむるに於て、未だかつて其功を見ざることあらず。字を識るの益なきをいふ者は、實に人生の眞趣を知らず、兼てまた讀書の何者を領得すべきかを解せざりしものゝみ。千古有數の神才たる東坡にして此語あり、憤慨の餘に覺えず迸出せし矯激の語に過ぎずとせば則ち止まむ、本氣の沙汰たるを失はざるに於ては、余輩は獨り意外の感を爲すに止まらず、皷を鳴して之を攻むるに躊躇せざらむとするなり。

甚いかな、現時社會の腐敗を極めたるや。物質的潮流はこの島帝國の全部に流溢し、人は唯だ肉體的快樂を求むるを知るのみ。飲酒、漁色、賭博の外、彼等は果して何者を求めむとしたるか。峨冠高帽、長安陌上に往來するものゝ心術の卑きや、却て椎理屠狗の人に及ばず、虛飾的社會は唯だ外貌の美醜を以て、階級の上下を別たむとするなり。今の所謂上流社會は、何の點に於て自ら高く標置し得べしと爲すか。余は言の醜なる

を以て、之を公言するに苦しむ。上下の兩社會、すでに腐敗を極めて、以てその中間にある者を夾擊せむとす。余輩は國民元氣の消喪を見て、聊か邦家前途の爲に、中宵枕を撫し長太息するを禁ずる能はず。一言以て之を蔽へば、今の社會は道念の高きを缺きたるなり。濁穢之を漉すに堪へずむば、寧ろ其表に蟬脫せむのみ。塵埃之を拂ふに堪へずむば、寧ろ其外に浮游せむのみ。余輩はこゝに桴に乘て海に浮ばむの想、その切なるを抑壓する能はざるなり。かくの如き現世的社會に於て價値ある文學の製作を要求するは、猶ほ木に緣て魚を求むるに似ざらむや。今の文士は自らその所長を以て衣食する能はず、脊に腹は換へられぬ苦しさは、折角の抱負を曲げて見す〳〵一段の器量を下げ、以て俗に媚ぶるの止むを得ざるに至らむとす。難いかな、今の文士たるや。然れども余輩は復た彼が天職の重んずべきを知らず、時間と空間との兩者に於て、始んど無限なるべき世界的大作品を試むるの識見なく、精力なきを憫笑せずむ

ばあらず。

おもはず筆を岐路に馳せて、余は聊か平生不滿の情の幾分を發洩せり。こゝに本題にたち戻りて、敢て親愛なる世上の少年子弟に問はむ。卿等が閑餘爲すところは、果して何事ぞ。さなきだに君子ならぬ者の常として、閑居すれば不善を爲し、易きに當代上下社會の腐敗の影響を受け、得々として游冶放縱の態を爲すもの多きは何の故ぞ。之を以て概括的もしくは抽象的にして、緊切ならざる誇張の言辭となす莫れ。事實は明かに之を示し、證左は現に余輩の手にあり。薄志弱行の奴輩、親のすね嚙ぢに嚙り、碌々にして何事も仕でかさず、頽然自放する者今や其多きに堪へず、高潔なる心情と熱烈の意氣あるものは殆んど求むべからず。而して其由るところを察すれば、全く精神的修養の不足に歸すべきに似たり。是に於てか、余輩は現時の少年子弟をして、眞正なる讀書の趣味を領知せしめむを望むの情、轉た切なるものあり。

ベーコンの論集の中に見えたる讀書に關する論議は、たとひ語て未だ精ならず、撰て未だ詳しからざる者ありと雖も、着實穩健の言、斷じて後生の憑據信奉すべき者たるを失はず。余輩は是に由て、讀書に種々の類別をなすべく、以て飯肉肴羹と相比すべき者あるを知れり。嚥むべきもの、吸むべきもの、味ふべきもの等、一一列擧するを要せず。今夫れ少年子弟が校課に讀むところは常食にして、即ち嚥むべきものと見るべく、專ら實質的なり。然れども余輩は他に味ふべきものを要するなり。こは必須といふ程の者にはあらざれとも、高尚なる人格の養成に關しては、殆んど他に望むべからざる者あり。遂に之を缺くべからず。且つや其中には、自ら精神的快樂を發見し得べく、因果互に聯關して常に絶大の効果を見る者なり。昔者佐久間象山は書の種類を問はず、稗史にあれ、小說にあれ、苟くも一萬冊の黃卷を讀破すれば、一かどの識見を確立し得べしといひしとか聞けり。さばれ、今日の如き紛閙なる社會に於て、かゝる

多勞の事を爲すべき餘暇あらむや。唯だ十分なる撰擇の餘に出で、勞少くして功多きを主眼とすべきのみ。その撰擇の標準に至りては、各人の性質、將來の企圖等、種々の關係を存して、固より之を一概すべからずと雖ども、多少の安心立命を個中に發見し、常に新らしき慰籍を享受すべきを以てその最上乘となすべし。曩者讀書法に就て、多少の論述を試みし者ありと雖も、未だ世上に普及するに及ばず。懇切篤實の學者は、之に就いて他に教訓を垂れ、指導を爲すべき責任と義務とを有せり。

少年男女に小說を讀ましむる可否はかつて一時の問題たりき。之に關する續密なる討究は、此に述ぶるを要せず。有體にいはしめば、余輩の不幸なるや、今日に於て讀むに足るべき小說に接せず。雨後の春草にも まして、絕えず續出せし者の中、批判を値するに足りしは果して幾許ぞ 是れ前にいひし流俗に媚付せし結果のみ。余輩はこゝに敢て少年諸君に告げむ。若しかの紛々たる非道義的駄小說を滿載する文藝倶樂部、新

小說など讀むの暇あらば、如かず去て史記を讀み、太平記、平家物語を誦し、もしくはプリユータークの英雄傳を繙きかの芳を千載に遺せし東西の偉人傑士をしのび、その風貌を髣髴の間に冥想し、之に由て不言の教に接せむには、若し夫れ淫を誨へ、色を勸むる底の書に至りては、秦皇を地下に起して、之を焚き盡さしむるに如かざるなり。

凡そ古來哲人名匠が發憤の餘に作爲して、不朽に傳へし者は、自ら宇宙樞機の一端に接觸する所なくむばあらず。余輩は多讀を以てペダントリーを爲すを欲せず、又學問は尻からぬける底の無意味なる爛讀を爲すを願はず、唯だ沈浸咀嚼、眼光善く紙背に徹し、一言一句、之を苟もせず、反覆丁寧以て活趣眞味を領知し、遂に之と默契するを得ば、自ら手の舞ひ足の踏むところを知らざらむとす。誠に一部の大學諺解は絕代の大儒物茂卿其人に學問の基礎を置きしといふに非ずや。而して事の成るや、漸ありその領得するところ、次第に深くして、昨非今是、自ら多少の

進境を認知するに至らば、その快、亦た匹儔を求め難きものあらむ。讀書の趣味は是のみ。

嗚呼、書中粟あり、萬鍾を値し、書中女あり、美、玉の如し。讀書は、少くとも高尚なる快樂の一源泉たるを失はず。理の深くして言の高きものは、姑らく之を措き、唯だ願くは二十世紀の新日本に於て、せめては文學ある家庭、文學ある生活、文學ある社會を現出せしめよ。

楠公意志論 (吉田賢龍氏に與ふ)

死者は善のみ。大塊我を載するに形を以てし、我を勞するに生を以てし、我を佚するに老を以てし、我を息ましむるに死を以てす。死はあらゆる事の終なり。達觀すれば、一棺すでに蓋ひたる後、豈に復た紛々たる是非善惡の別を爲すを要せむや。余輩の死者に對するや、恩讐兩ながら存せず、唯だ運命の犧牲となりしを偲び、依て一片の同情を寄せ、花寒篆瘦

墓門夕陽の前、グレーの悲歌にても微吟し、せめては酹するに一杯の桂酒を以てせむのみ。かの趙襄子が知伯の頭を以て飲器となしたる如き、伍子胥が平王の屍を鞭ちし如き、將た無謀なる往昔の英國政府が宗教改革の首唱たりしウヰツクリフの灰をテームスの河流に棄してめきといふが如き、余輩は慘の最も甚しき者となすを禁ずる能はず。葛嶺の頭、南宋の奸相秦檜の殘魂は、長しへに溺中に悲啼すと傳へられ、等持院裡、足利尊氏の碑碣、亦た當年の君平が醉餘の鞭を免る能はざりしと云ふ。爲にする所ありて然る者は姑らく之れを措くべしと雖も、余は故らに死者に凌辱を加ふるの一事を以て、大丈夫にあるまじき卑屈執拗なる行爲と思惟するなり。然れども前に述べし如きは、有形的凌辱のみ、無形的凌辱に至りては、更に甚しきものあり。事實の眞相を十分に探究せずして、死者の名譽を毀損、冒瀆し、惟に之を其口に擧ぐるのみならず、又之を其書に筆し、天下後世をしてその妄誕を樂ましめむとす。而して死

者に口なく其鬼饗くる能はざるに至るを奈何ともするなし。故にかくの如き事を爲せしものあらば、余は之を天資刻薄慘微恩少き人として務めて俱に齒せざらむとするなり。

炒豆を嚙て英雄を罵る、物茂卿にして或は可ならむ。然れども謹厚なる雨森芳洲は、聊か茂卿の人と爲りに慊らざる者ありしと云ふにあらずや。凡そ好て他を貶斥する者は、道義心の缺亡を證する外、一の得る所あるべからず。余輩は唯だ確然たる學藝上の根據を有する場合に限りて、他を論ずるを得べく、法官が判決を爲すとき、終始法律に依賴すると同じからざるべからず。ずでに學者としてのみ人を論じ得るとせば、愼重なる態度を取り、精確なる考査を遂げ、九原起すべく其人をして再生せしむるも必ず滿足すべき底の結論を提供するを期せざるべからず。然らざる者は寧ろ始より爲さゞるの勝れるに若かず。

屬者哲學專門の一學士吉田賢龍氏は、丁酉倫理會の席上に於て、我國

民性の一大缺點を詳論されたり。凡そ天下の至理は常に陳言套語のみ其論の斬新ならざるは、即ち不合理の點を發見せざる所以、唯だ訓を氓の蚩々たる者に垂るゝに於ては、むしろ取るべき者あるを認定するに憚らず。然れども例證として楠公を論ぜしに至りては、何人と雖も贊同を爲すに躊躇する者なくむはあらず。今丁酉倫理會講演集より左の一段を引抄せむ

正成は實に君を愛し、君の爲に忠を盡した所の精神は感すべきで、今日と雖も吾々に無上の教訓を與へて居ります。併しながら、正成が非常に意志の鞏固な人であつたと云ふことは思へないのであります。正成が湊川に赴く時には討死するといふことを豫想して居つた樣であります。それは死んで仕舞はうと云ふことを覺悟するだけの意志はあつたかも知れませぬが、併ながら死なうなんと云ふことさへも自分の腦髓の中に浮かべることをせずして、何處々々までも往て

倒れて後已むと云ふ鐵石の樣な意志は見られぬ樣に思はれます。公の偉大なる所は、寧ろ他の點にありて存するのでしよう。

帝國文學記者の一人登張信一郎氏は、同雜誌第六卷第九號に於て之に對する駁議を試みられたり。惜しいかな、其論たるや徒に長しと雖も、未だ精ならず、意餘あり筆隨はず、多少の熱誠ほの見ゆるは嬉しからぬにあらねど、麻姑を倩うて痒を搔くの快を缺くは遂に推稱するに足らず、人を射むとせば先づ馬を射よ、議論の第一義は、善く肯綮に中るにあり、且つやその要點に到達するまでは頭腦をして冷氷の如くならしむるを要す。余はすでに氏の駁論を以て滿足すること能はず、乃ちこゝに筆を走らせ、言はねば膨るゝ腹をすかし、兼て堂々たる哲學者先生の明訓に接する榮を荷ふを得む。

今を以て古を律するは、すべての點に於て其可なる所以を知らず。余輩が平生憑據するところ、人物批判の第一要諦は、其人と當時社會性全體との比を求むるに在り。其比は數學上に所謂 Constant にして、その比が大なれば大なる程、其人は以て偉たるを得るなり。蓋し社會は絶えず進捗する者なり、さなきだに、人は完全ならざる者といふなるに、進捗の後たる「今」を以て律するとき、誰か果して完人なるべき。唯だ之を一概して完人ならずといひ、莚と楹、厲と西施を判別せざるは斷して學問的ならざるなり。引力の論、地動の說、今日に於ては中學初級の生徒之を解知するに苦まず。然らばニユートンを以て愚となし、ガリレオを以て痴といふべきか。かくの如きは事物發展の徑路を解せざる者のことにして畢竟今を以て古を律するに出でし誤なるべし。なほ一例を擧げていはむか、賢龍の名にしおふ吉田氏は、今日、否、かの丁酉倫理會の席上に於て確かに一日の長を以て講演し得べき賢者に相違なかりしならむと雖も、五年十年乃至一世紀二世紀後の日本思想界に於て、さばかりの者たるとを保證し難し。然らば余輩は氏に向て豫め痴人愚物の稱を被らし

むべきか、而して氏も亦た甘して之を受くべきか。人物批判は、あくまで其人當時社會の圏内に於てすべし。故に今若し楠公を論せむとせば、元弘延元間の社會狀勢に比較して辯を爲すべきのみ。如上の言は固より耳新しき者に非ずと雖も、余が後論の前提として特に此に標擧せし者なり。

英雄豪傑の士、功績千載に彪炳し、多少の崇拜を受くる者は、必ず後人によりて施彩着色せらるゝを常とす。故に余は楠公に於ても、明かに二様の表現を爲せるを見る。

(一)國民的——普遍的楠公——楠正成

(日本外史若くは其根源たる太平記、更に下て楠廷尉秘鑑等の俗書に見えたる楠公)

(二)史家的——特殊的楠公——楠木正成

(櫻雲記、梅松論、南方紀傳より以下、學者の承認せる正確なる史料より考證さるべき楠公)

余は先づ吉田氏が例證として倩ひ來りし楠公の果して孰れに屬するかを尋ねざるべからず。若し後者にありとせば、氏は聽衆一般に然かく注意するを遺却せし點に於て、議論の周到を缺きし者といはざるべからず。余は賢龍の名にしおふ吉田氏を以て、かゝる平凡粗莽なる論客と思惟すること能はず。故に斷じて前者にあるべく、況んや當時出席せし聽衆と講演集の讀者との領知せし楠公も亦た然るに於てをや。余は普遍的楠公に關する氏が所論の誤謬を指摘するを得む。

普遍的楠公は、登張氏のいひし如く、終始劃一の行爲、至誠至忠、天を貫くもの、決して意志薄弱の人に非ざるなり。元弘の際に於ける公の勤王は早く既にその一斑を證せるものなり。

旋乾轉坤答値遇洒掃輦道迎鑾輅論功雖陽最有力漫稱李郭安天步出將入相位未班前狼後虎事復艱獻策帝閽不得達決志軍務豈生還といふ

山陽の詩句は、普遍的楠公の生涯を最も簡切に述べし者に非ずや。延元元年正月元日、尊氏の軍東國より來り、攻戰十日に亘り、宇治勢多山崎の諸要衝盡く守を失ひ、賊騎奔騰、京師に入り、九重の城闕、兇焔を免るゝ能はず、而かも楠公の奇策は、敗を轉じて勝となし、賊首をして西海千里に走らしめたり。惜しいかな、新田義貞の手ぬるきや、之を窮追することを爲さず、未だ半歲ならずして形勢早く一變し、尊氏の軍威再び揚り、海陸より並進し來り、義貞をして退て兵庫に逆ふるの止むを得ざるに至らしめき。この時に方り、楠公の獻策は不幸にも坊門清忠の爲に支へられ、僅々五百騎を以て義貞に赴援するとなれり。今夫れ寡は固より衆に敵すべからず、公が尊氏の軍に當るは猶ほ卵を以て石に向ふ如きのみ、其敗は智者を待て後に知らざるなり。楠公たるもの實に難し、己の獻策をして貫徹遂行せしめむとせば、勢自ら朝命に背かざるを得ず。然れども朝命に背くは、當時の道德の許容せざる所にして、又公の衷情に於て

斷して爲す能はざりしところ、而して彼の信陵君が魏王の命を矯め晉鄙の軍を奪ひ邯鄲を救して全からしめたる如き權變的行爲は、吾邦に於て到底望む可らざりし者なり。朝命は人を死地に置けり。而して之を奈何ともする能はず、當時道德の拘束的なりしは、遂に爭ふべからず。楠公は乃ち死を決せざるを得ざりしなりき。登張氏が公の位、其器に滿たず惜むらくは其才略を展ぶるに由なかりしなりしといへるは可なり。然れども言の足らざるところ、實に此處にあり。余は楠公の決死を以て、當時の道德に循從せし行爲といふことの遙かに學問的立言なるを信ず。而かも是れ確然たる理性判斷力の結果にして、秋毫意志の强弱に關せざるなり。敢て問ふ吉田氏は楠公の決死を以て不可なりと爲すか、ソクラテスはクリトーの言を斥け、獄を逃れ境を越ゆることを爲さゞりき、是も亦當時の道德に循從したるなり。楠公の決死を不可とする者は、兼ねてソクラテスの決死を不可とする者なり、更に進んで當時の道德に

循従すべきを知らざる者なり。若しかゝる人ありとせば余は之と其伍を同うせむを愧づるなり。賢龍の名にしおふ吉田氏は、大學者なり。故に善く一世紀二世紀後の道德標準を豫察し、之を實行しつゝあらむと雖も、わが楠公は元と一個の武將なりき、之に望むに當時一般より高き水準の上に在る道德を以てする能はざるなり。

余は楠公を以て、憤死したる者となすこと能はず、然れども世にかゝる謬見を抱く者少からず。是れ多くは己の心に引くらべ然かく思ふものにして楠公は實際かゝる小丈夫には非ざりき。古老咄に出でたりとして、德川實記附錄に引ける豐太閤の言に曰く。

正成は戰利なきを知りながら、一命を抛て湊川にて討死せしは忠臣といへども、己の諫の聽かれざりしを喞みて死をいそぎしに似たり

この言は、典據として幾何の價値を有するものぞ。太閤は豪雋の資、眼中人なく、加ふるに漫罵の癖あり。菅公を罵り「この小漢、吾か睾丸一點の垢

に中らず」といひ、佐野天德寺の膽を奪はむとて、甲越二公を罵り、二髭を撫し、亦た以て吾が儀衛を壯ならしむるに足るならむ」といひ、或は賴朝の木像を撫して大言したる如き、以て見るべし。況んや如上の言は、江戸の狸老爺を祭り上けむ爲にせし者にして、固より取るに足らず。吉田氏は學者なり、固より豪傑の無責任なる法螺の受賣をなすものにもあらざるべし。楠公にけちを付けたがる前人の言、概ね此類のみ。且つ夫れ櫻井の驛夜、遺訓丁寧、十一垂髫の愛子を鄉に還し、後年乃父の志を繼くべきを訓誡したる如き、その行動の從容として、用意の周匝なる、いよいよ之を證するに非ずや。

楠公は決死して帝闕を辭せり。決死とは他に非す、力戰奮鬪、吾にして彼の首を獲るに非ずむば、吾か元を以て彼に授けむと期したるなり。是に於てか、湊川の快戰は始まれり。むかし蘇子美の漢書を讀むや、張良が

秦政を狙擊するに至り、則ち曰く、惜哉い、擊の中らざりしや、と。因て一太白を滿引せり。史を讀むもの常に此の如き感の生ずることなくむばあらず。金聖嘆また曰く、古來缺陷不平の事、其事を反し以て之を補はむと欲する者あり。一に曰く鄧伯道父子團圓、一に曰く荀奉倩夫妻偕老、一に曰く屈大夫重ねて楚國を興す、一に曰く燕の太子克く秦の讎を復す、一に曰く王明妃再び漢關に入る、一に曰く侯夫人生きながら煬帝に逢ふ、一に曰く岳武穆秦檜を寸斬す、一に曰く南霽雲立どころに賀蘭進明を滅す、と。今余をして我邦の歷史中に、類似の事柄を求めしめむか、源爲朝夜高松殿を焚く、其一なり。源義經、梶原景時を斬る、其一なり。後鳥羽上皇北條義時を誅す其一なり。而して楠公湊川に直義の首を獲る、其最たるものなり。太平記第十六卷、正成兄弟討死の一段は、古今有數、悲壯の大文字、酒酣に耳熱するの際、之を讀めば人をして意氣激昂、秋水一條の光を拂ひ、地を斫て起舞するを禁ぜさらしむ。直義の頭、すでに得可らず、部卒

盡く死して、壯圖就すに由なし。此勢にても打破りて落つば落つべかりしけるを、といへるは、眞なるべしと雖も、余輩は楠公が十一創を被りしといふを記せざるべからず。是に於てか民家に入り、從容として引決す想ひ見る、大節堂々、身を殺すの時、天日爲に光なく、正氣斗牛を衝き、鬼神壯烈に泣きし者ありけむを。楠公は遂にろの決死の初志に背かざりき。余は是に於て再びその意志の强固なる證左を得たり。吉田氏は湊川に於ける楠公の死を以て、不可となすか、若し然らば、日本に固有なる武士の理想を知らざる者にして、兼て死の何者たるを解せざる者なりかくの如きは、氣の毒ながら、疊つきの駒下駄引かけ、緣日の夜の屋臺店に鰶の鮓甘味げにまるる腥坊主と一の擇ぶところなきを奈何む。

楠公の死は、堂々たる大丈夫の所爲なり。かの痴蝶的小動物の世を果敢なみし往生に比すれば、霄壤も啻ならず。而してその偉大なることは自殺の際、最後の一言に由て、猶ほ明かに證明されたり。太平記に曰く、

正成座上に居つゝ、舍弟の正季に向ひて、抑も最期の一念に依りて善惡の生を引くといへり九界の間に、何か御邊の願なると問ひければ正季から〳〵と打ち笑ひて七生まで只同じ人間に生れて朝敵を滅さばやとこそ存じ候へと申しければ、正成世に嬉しげなる氣色にて罪業深き惡念なれども我もかやうに思ふなり、いざさらば同じく生を替へて此本懷を達せむとて兄弟共に差し違ひて同じ枕に臥しにけり。

此に由て之を視れば、楠公は覺束なき區々たる冥福を欲求する者に非ずして、死後なほ忠義の鬼となり、天を極めて皇基を護らむとせし者なり。之を當時一般の人に比して高きこと一等といはざるべからず。然るに室鳩巣は之を斥論して曰く

正成かくのごとく絶倫の材をもて、聖賢の道を學びすして、孫吳の術をのみ崇びしは遺恨といふべし。湊川にて自殺するとて弟正季と最

後の一念を語ること甚だ陋し

名姝絶代談何易、道學評人論不公。儒家固執の言大抵是のみ。宜なり當年の高山彥九郎をして、憤慨の餘、一部の駿臺雜話を地に擲たしめしや。鳩巣の陋となすは、余輩の偶ま偉となすところ、嗚呼余は此に到りて終始劃一、寸毫の矛盾なき楠公を見たりき。要するに普遍的楠公は全く理想的なり。

普遍的楠公は智情の二方面に於て、特に間然する所なしと雖も、その人物の偉大なるは、主として意志の强盛にありといふも不可なし。何處々々までも倒れて後已むといふ鐵石の如き意志は、最も明白に見られたり。余は此に吉田氏が眼に微翳を帶びしを疑はざるを得ず。吉田氏が楠公の偉大なる所以他にありといふは何事なるか、願くは與かり聞くを得む。傳ふる者あり、曰く、吉田氏は登張氏の駁論の出でしを聞くや、見盜綸繩といふべき忽忙たる態度を以て、楠公の事跡を探究し、一矢を以

て酬ゐむことを期せりと。是に於てか知るべし、氏が例證として倩ひし來りしは全く普遍的楠公にして、今之れを特殊的楠公となし、唯だ誤りたる提言を確立せしめむ爲めに、狡猾にも前後議論の對象を變し、暗々の中に世人を瞞過欺罔せむとするものなるを。呂東萊曰く哀は心死より大なる莫く身死亦た之に次く。欺を受くるもの身は害さると雖も、心固より自若たり。彼の人を欺く者は、身志を得と雖も其心固より已に斷喪、餘なし。と。吉田氏たるもの、願くは此言に鑑みよ。夫れひねくれたる故事付け的議論は、現代の流行なり。余は聊か氏の顰に倣うて、之を我國學者の一大缺點と呼び、劈頭第一、氏がかゝる愚を爲さゞらむを希望して止む能はざるなり。

之を要するに吉田氏は事物の畛域差別を明にせず、楠公に二種の表現あるをさへ知らず、唯だ其論をして有力ならしめむ爲に學者にはあるまじき不慎重なる態度を取り、頗る淺薄粗陋なる見解を以て非條理

無責任の放言を逞くし、千古の忠臣に多少の汚點を着け、國民一般崇拜の念慮を賊するに想到せず、至大なる凌辱を死者に加へし者といはざるかゝらず。之を結果の上よりいふとき、其罪は髪を擢て續くとも、尙且つ足らず、固より輕々寛恕すべきに罪ず。詩の小雅巷伯第六章に曰く、彼譖人者、誰適與謀、取彼譖人、投畀豺虎、豺虎不食、投畀有北、有北不受、投畀有昊と。吉田氏は死者に對して之を爲せしが故に、遙かに過ぐる所ある者、大きくいへば四海の波を翻すも、其惡を洗ふに足らざるべきなり。若し又氏にして確然たる意義に於ていひし者に非ずといはゞ、天下至愚の人にして賢龍の名にしおはざる一個の屁鉾學者のみ。

わが普遍的楠公は、區々たる吉田氏の僻論を以て、角上の蒼蠅ほどにも感ぜざるけれど、余は唯だ人物批判の要諦を闡明し、且つ學者の態度、必ず愼重ならざるべからざるの戒として、かくは山鳥の尾の長々しき論究を試みしのみ。飜て思ふに、吉田氏は固より小六づかしき動機

より出でしに非ず、畢竟例證を引くに誤りし者にして、その他に想及する暇あらざりしならむ、カントの歴史に懵きや、往々にして引證を誤れりと聞くはまことか、吉田氏はまさかに大哲學者の缺點をのみ學ばむとする人にも非ざるべし。さばれ、智者も千慮に一失あり、過は必ずしも恥ならず、だゞ枉げてその非を文らむとせば、是れ小人の劣情のみ。氏にして、引證の誤たるを自白するに於ては、余乃ち君子が虚懐に推服せむかな。若し然らずむば余は「我且に大梁を屠らむ」の思に堪へざらむとするなり。語の矯激は情の剴切亦た復た然るのみ、請ふ恕焉。

* * * * *

余が吉田氏に對する駁論は、姑らく之に止め、更に一言する所あらしめよ、普遍的楠公は固より施彩着色を免れざる者にして、完全無缺の武將なり、然れども特殊的楠公は、未だ必ずしも然らざる者あるに似たり。南木の夢、天王寺の未來記、泣男の謀など、正確なる史的事實に非さるべ

しとの疑問は、今更いはずもあれ、正成と藤房との關係も、亦た一段の討査を要する問題たるべきか。坊門清忠は、戯曲作者の爲に惡人化せしと雖も、實はさばかりの者にも非ざるべし。神皇正統記に於ては、不幸にして正成の戰死を見出さず、親房は之を記する價値なしと爲せしにや。梅松論には

> 將軍下御所御兩所、兵庫より九州へ御下向のよし、京都へ聞えて、叡慮快かりしかば、諸卿一同に、こは何事か有べきとて悅申されける時正成奏聞して云、義貞を誅伐せられて尊氏卿を召かへされて君臣和睦候へかし、御使に於ては正成仕らむと申上たりければ

の記事あり。蓋し特殊的楠公は未決の問題に屬し、實は餘りに香しからざる者なりやも料られず。余は固より之に就いて知るところ多からざるもの、耕は之を奴に問ふべく、織は之を婢に問ふべし。余は之を國史の專門家より聞かむを望む、而して遂に哲學の一學士が門違の御苦勞千

萬なる似而非考證を出だすを願はざるなり。

虛僞的奇矯を叱す

かの綠雲の末を翔けるべき猛禽の、しばし翰を收めて從容迫らず、沈重自ら持する大國民的襟度は、不幸にして現時のわが同胞に於て求む可らず。あらゆる事象に對する判斷力は、餘りに輕卒にして確固ならず。定見なく主義なく、而かも雷同附和を是れ事とし、毀譽褒貶、談何ぞ容易なる變化の急劇なるは、誠に瞬時を以てする能はざる者あり。朝に一善を見れば之をして九天の上に昂揚せしめ、未だ夕ならざるに、一惡を見れば、亦た復た同じ人をして奈落の底に沈淪せしむ。その送迎に忙しき殆んど余輩をして適從する所を知るに苦しましむ。氣候の不順が生物の發育に害あると同しく、判斷の輕卒が事物の進歩に少からざる障礙を爲すこと、今復た贅せず。歐西思潮の疏導せられてより、年を經ること

已に三十、國民一般の心理狀態は猶ほ且つ懷疑の中に彷徨するか、抑も亦た他に避くべからざる理因ありて然るか。余は今こゝに探究するの必要なければ、姑らく之を措き、唯だ此の如き社會がしば〳〵他に欺かれて、世に食はせ物の頻々として輩出するを見るに堪へず。

品彙匹儔の少きは、即ち珍らかなるものと呼ばれて、實際の價値以上に持て囃やさるゝ者なり。人心の腐敗と大道の衰頽とは、延いて曲學阿世の論となり、害毒深く膏肓に入り、所謂藥瞑眩せずば其病癒えざるまでの有樣となりぬ。かくして社會は多少の反省を爲さゞるべからざるに至り、必要の上よりして、やがて奇矯の言に耳を貸すに吝ならず。時には斜ならず之を珍重し、其人を謳歌することをさへなせり。然れども吾が生の太行、屹として面前にあり。人心の好惡は、秦時の照臘鏡を以て鑒破せざる限り、固より料り知る可らず。雄猜陰狠、圖ぬけたる横着者も、亦た多しと爲す。こゝに於てか、便ち敢て奇矯の言を放ち、以て世人の視聽

を欺罔し、甘く遣付けて、一時の聲利を釣らむとする者あり。今は昔、覇府の初世に當り、忠臣の名譽を得、併せて後昆の利祿を謀らむが爲に、痛き腹忍んでかき切り、殉死と呼ばれて譽められむとせし者ありしを思へば、是れも亦た怪しむに足らず。近時外國に輸出する諸種の工藝品に於ても、二度目からは其質ずつと惡るく、爲に信用を落して、而かも悔ゐざる者、比々として皆是れなりといふを聞かば。所謂食はせ物は。この末長く島帝國の産物にして、他の目先を誤魔化さむとする卑劣なる根性は何處までも失せざるに似たり。而かも高潔なる心情を存し、卓々然として一代の木鐸となり、世の凡俗を指導訓化すべき天職を有する文士論客の中に、亦たこの種、食はせ物の少からざるを見ば、余輩呆然として言なきこを良久しからざるを得ざるなり。

百日の説法屁一つてふ哀れの末期は、多年の勤勞、名たゝる雜誌に謂々の筆を驅り、墨汁なほ淋漓たるに、長しへに布衣獨尊の涯境に力むの

操守なく、容易に膝を五斗米に屈し、しかも地震のゆり返へしに、むづくも跳ね飛ばされし某氏の身の上にあり、話は聊か違へども、おもへば是れも亦た食はせ物の一つなるべし。熊の膽の看板ならねども、題名から、して苦味十分なる言辭を吐くを善くし、遠目には殊にいみじく、さながら後凋の松柏とまで我も人も一時は多少欽慕の意を表せし一論客さへに、世間の噂の眞僞は保證せねど、燦爛たる錦繡、一たび其裏を醜へば、斷絲補綴醜見るに堪へずと聞くに至りては聊か情なき心地こそすれ。なほ他には、身自ら足を狹斜に入れ、醉を紅樓に買ひ、筆を執れば宛然別人の如く、青年氣風の革新など、いかめしき題を掲げ、知らぬが佛の、いぢらしき滿天下の少年輩が眷顧を得たる面皮千枚張の男もあり、とか聞けり。凡そこの類の事、算し來れば僕を易ゆるも盡きざるべく、故らに奇矯を眞似る似而非文士の世に澤なるを證し得て餘ありと謂ゆべきのみ。

學問は學問にして、實行は實行なり、故に倫理學者は、必ずしも道德家たるべき要あらずといへるは、余輩しば〳〵之を耳にせり。さばれ、倫理學者の即ち道德家たるべきは、誰しも理想として翹望するところなり。凡そ言行の相反するは、客觀的に好個の滑稽劇なり。更に之を主觀的にいふとき、余輩は彼等が自ら中に二面を存して、心靈を截斷し得たる至極便利なる精神組織を見たるのみ、唯だ驚嘆の外あらず、若し夫れ、本性は包み切れず、幾微の間に於て、化の皮の追々と顯はれ、地金のそろ〳〵出かゝりし狀態に至りては、よその見る目も氣の毒なるばかりなり、然れども羞惡の心の缺亡に至りては、宜しく皷を鳴して之を攻むべく、決して寛恕すべきに非ず、而して社會も亦た欺かれたる自己の愚を知覺して、戒むところなかるべからず。堤塘の固からざるを謂はずして洪水の懷襄を論ずるは、抑も末なり。余輩は現時の社會があらゆる方面に於て、今少し沈重森嚴の態度を取らむことを切望せざるを得ず。

近ごろ名前だけは一寸しほらしき青柳有美といふ一論客あり。だいなき題目を捉へてきてれつの文字を列ね所謂奇矯の一手販賣を爲さむと試むる者の如し。余輩は實際其人を知らざれば、此に截然たる言辭を放つを敢てせざれども、好ましからぬ節々の存在を斷定するに怯ならず。有美が曩に某田舍新聞に掲げし藝者と語るの一篇に至りては文庫とやら、そんじよそころの若い者が腕まくりの罵辭の寧ろ取るべきを認定せしめき、頃ろ亦た中央公論に見えたる藝者敬重論、藝者の研究の諸篇の如き、假りに一歩を讓りて、論旨の歸着に於て、さのみ批難するところなしとするも、記述方法のいかにも野卑を極め、氣障を以て養つめしられし觀あるに至りては、決して前者に遜らず。明星に轉載せし彼れ有美が門前冷落、鞍馬日に稀なる江東の一賤妓に與へし手書に至りては、直に唾して棄つべきのみ。かくて有美は厚顏にも此種の文字を蒐集し、戀愛文學と題して世に賣らむとし先づ廣告を掲げて曰く、此書

は魔書なり、不健全なり、不道德なり、世を騷がさむとする青柳有美の處女作なりと。嗚呼是れ何等矛盾非理の言ぞ、戀愛文學、未だ記者の机上に横はらず、その內容をも細檢するに由なけれど、若し、果して、不健全にして、不道德ならば、社會に少からぬ害毒を流すものにして、寧ろ始めより上木せず、秦火に付して、人間に止めざるの勝れるに若かず、飜て亦たさばかりの者たらずむは眞個世を騷がせむが爲に、暴言を放ちし者にして、故らに奇矯を爲すの野心は、歴然として知らるべし。後藤宙外がその卷頭に書せし一篇の長文は、近刊の新小說時文欄に於て先ず一讀するを得たり。特に最後の一段、

君が如きは稀有の大才にして、余が如きもの實は到底品隲の任にあらず。其の立論に矛盾あるも可、統一を缺くも可、其の文章に破格の點あるも咎むるに足らず。君が眼には靈火あり、君が筆には神彩あり、其の膽大にして剛毅、王侯の前に立つも信ずる所は必ず言ひ、海立ち山

飜へるの境に處するも思ふ所は敢て行ふの勇氣と自信と、貧に安じて道を行ひ篤學にして售ることを願はざる克己と精勵とは君が文才の偉なるよりも更に偉なりとす。

といふに至りては、一個の有美をして九鼎大呂の重きを爲さしむ。文中言ふところにして事實ならむには、彼れ有美は、末世の今に聊か過ぎたる奇特至極のうい奴にして、孔子、ソクラテスなどの大聖と相去ること遠からず。余輩も亦た之が爲に鞭を執ると雖も、忻慕するを禁ぜざるなり。さばれ宙外は由來濫賞の弊あり、加ふるに愛憎の念を擺脫する能はず、如上の言も折角ながら、未だ余輩の信用を博する能はざりき。余輩が單に文章によりて彷彿の間に見たる所の有美其人は居然として奇矯を眞似る食はせ物的論客に、高が疋をかけし者にして、文壇の鼠輩のみ他日のぼろを廣げすむば幸甚しきなり。唯だ夫れ、貌を以て取る、猶ほ失ふところあり、況んや文を取て人を取らむとするに於てをやかへすが

へすも余輩は前言の誤なきを斷言せず。若し彼が眞正の奇矯兒、逆流の不平家にして、而かも當年のスペクテーターを凌駕する程の大諷刺家ならむには蓋し千古の珍たるべしと雖も、頗る覺束なし。何がさて、余輩は一言、有美に告げていはむと欲す、世に誤解せらるゝは、毫も賞譽を値すべき事項にあらず。丈夫の本領は、さながら皦日の如く、八極に融透して明々白々なるにあり。汝が議論の立脚地を明示し、少しく收斂するところありて、事象の純化的紀述に力めよと。

千斤の弩は鼷鼠の爲に發せず、九石の弓は狡兎の爲に開かず、余は眇たる斗筲の一文士に對して、呶々の辯を費すことの、頗る大人氣なきを知ると雖も、議論の進程上より止むなくこゝに及び、乗ねて豎子或は敎ゆべき者あらむに想到し、かくは書き立てゝ、呉れしのみに、豈に他あらむや、他あらむや。

現代の和歌

むかし臣朔飢欲死といひし世さへもありけるを、塚中の朽骨ともいひたげなる半死の禿顱を起して、衣食の資をさへ缺かず、慕風繼塵の閑事業に悠々殘年を送らしむる昇平の餘澤は、實に有難きとの限なり。かしこみて歌申し上ぐるばかりが取處なれば、脊椎動物の初級に列するだけありて、水に住む蛙こそなか〳〵にしぼらしけれ。歌屑は鉋屑にも及ばずのどけき夢を千年の昔に馳せ、依然として貫之躬恆が口眞似をやらかし、葫蘆依樣千篇一律、その醜殆んど看るに堪へざる腰折なんど、縱ひ其量に於て五車に餘りたりとするも、昭代の盛德を頌謳し、宮庭の文雅を粧飾するが爲に、幾何の重をかなすべき。桂の園の蘖ともいふべき高崎正風一輩の舊派歌人、その技倆に於て、稱引するに足る者なきは、今更取り出でゝ論らふだけが野暮なるべし。

物窮まれば復た通し、變ずれば常に反る。その昔、歐西の文化に心醉したる時期はすでに去り、國民の自覺はやがて國文學の復興となり、此頃に至りて、多少毛色の異なりたるが上に、生ひ先の長かるべき青年歌人の輩出を促したりき。鐵幹子規の諸人は、各自ら一方の雄鎮として、旗幟頗る鮮明その新派と標榜する所以の者は疑もなく構想の刷新を謀り、形式の拘束を寛にせむとするに在るならむのみ。此の如きは當然の事項にして規畫するところ固より惡しからず。然れども飜て彼の諸輩の手に成りし作品を檢するに、未ださばかりの者たる能はざるに似たり。生硬を以て奇拔と誤り、怪詭を以て斬新と爲せるは一般の通弊にして時に取るべき者あるは事實なれども、おしなべて渾成圓熟の妙に乏しく、刻劃斧鑿の痕の際立てる見苦しさに堪へず。これ言ふは易くして行ふは難きに由るか。抑も又た時未だ到らず、努力するところ、舊派の破壞に專にして、新體の確立に暇あらざるに由るかげに羅馬は一日に建て

られず、和歌新派の前途、尙ほ遼遠なりといふべきのみ。

此時に方り、忽然として新派の內訌ともいふべき奇怪なる現象を見たるは、余輩の頗る意外とする所、而もその論議の對象纖微毛髮の比の如き瑣事に過ぎざるに至りては、其中狹隘にして他を苞容する能はざるさもしき島國的根性の表彰とも見えて、誠に一笑を値するに過ぎず。加ふに、現時思想界の風潮は、いさゝか神經質にして、矢鱈に小ぜり合を爲したがる小竪を譽めて、奇矯と呼び、熱誠と稱し、尊重措かざるの觀あり、非理また極まれりといふべし。苟くも七尺の軀を有するもの、陳同甫の所謂天空海濶の氣象を缺くべからざる一要素にして、吾曹平時自ら警しむべ夫が乾剛の性に缺くべからず、隋玉は雀子を射らず、自重は丈き所なり。藝術上の論戰は大に推奬すべきも、役にも立たぬ問題に就て呶々するは、雙方の爲にならぬのみならず、亦た復た傍人の迷惑なりと知らずや。

凡そ藝術の眞精神は、區々筆舌の外にあり、故に知る者は默す、屁理窟をのみ述べたがる似而非藝術家に秀妙なる作品を出したる前例なきを想へば、彼の徒の修業はまだ青くして、進捗の見込ある所のみは聊か賀すべく、日暮れて路遠きの歎を發することなく、唯非今是の感を爲すべき日を期せざるべからず。こゝに自ら新派の首唱を以て任する人の爲に謀るに、かゝる兒戲に貴重の時間を費すことを罷め、想を錬り思を凝らし、標型となすに足るべき作品を出して、曰くら千人の疑惑を鎮定するに若かず。藝術の論は多くの場合に於て、das Wie よりも das Was に因て決定さるべく、言に訥にして行に敏なるを以て君子と爲すも、亦た之に外ならざるべければなり。

與謝野鐵幹の和歌に於けるや、天才の缺片めきし所ありと雖も、徒らに骯髒不平を爲ねて、僞壯士的態度をなせるは、大に宜しからず。その所作の中、最も下れる者に至りては、狂歌と相去ること遠からず、暴露に過

ぎて、含蓄に乏しく、氣品の高からざるは明白にして、爭ふべからず。エオリヤの玉琴の音はかくの如くして鳴らず、葛城の襲津彦が眞弓の響はかくの如くして得られず。凡そ雄壯に貴ぶところは、內部に存する勢力の蓄積にあり。外部に出かゝりしものは、やがて衰滅の傾向あり、最早言ふに足るものなきなり。少しく收斂する所ありて、洗錬の工を經ば、更に可なるものあるを得む。正岡子規に至りては、一代の才人、多能の藝士たるに愧ちず。さばれ、一事に秀でたるが故に萬事に秀でたりと思惟すといふは、希臘の大哲の看破したる古今世上の通弊にして、渠も亦た免れざるか。子規の本領はどこまでも俳句にあるべく、明治俳壇革新の大功は確かに不朽なるべしと雖も、更に餘勇を皷して、和歌壇上の牛耳を握り、同一の盛名を博せむとする野心を起すに至りては、隴を得て又蜀を望むの情とはいひながら、病人にはちと過ぎたる慾望なり。但し氣力の邁往は殊勝の極と稱すべく、その所作また取るべきものなきに非ず。桂

月は和歌に存する禪味を論じて子規やゝ庶幾き乎といへり。余は彼の如く談を容易にするを好まざれども子規が俳句多年の修錬は、之を爲し得べき準備を完成せし者たるべきを否定せず。

世人の注視を値する二子にして、猶ほ且つ此の如し。その尻馬に乘りて得々たる門下の諸輩末社連に至りては、取り出でゝいふべき者あるを、なく、兎角に弟子は師匠の悪い癖にのみかぶれ易く、病まずして他の呻吟を學ぶもの比々として是なり。鐵幹の弟子は一寸したとなれど、最後の七字を人名にて塡めて見たがるを以て一斑を知るに足るべく、子規門下の作る所は、俳句の引き延ばしと見ゆるもの少からず。二子たるもの指敎誘導その宜きを得ざれば人の子を賊する誚を免れず。世の中の危險はぱつと出の屁ッ鋒學士が私立中學に敎鞭を揮ふ一事に止まらず。余はこゝに深酷過激なる一文人が當年の袁隨園に加へし訴罵の言を引用するを得む。曰く、人の子弟を誘ふて飲博の門に入る者、その

罪小人の子弟を誘ふて詩文の邪路に入る者、その罪當に上刑に服すべしと。人の爲に文字の益を謀る者、この言に鑑みて、幸に過つ所なくむば可なり。而して是れ單に二子の爲に言ふ者ならむや。

今日和歌壇の狀勢は、畧ぼ此の如く、一言以て之を掩へば、紛糾の時代なり。世に英雄なく、終に豎子をして名を爲さしむ。廣武の嘆は、宜しく此處に發せらるべく、少年才子いさゝか野心あるもの、爭ふて之に趨くも亦た其故なきに非ざるなり。されど最も忌憚なく言はしめば、余輩は初より和歌其者に對して至大の價値を認識せず。詩が長ければ好いと思ふは、勿論謬見なれども短ければ好いと思ふに至りては、更に甚しき謬見たり。今夫れ何等の理想もなく、結構もなく、唯だ數多き文字を臚列し律語の形式を備へて、無難に出來上りたるもの、詩として價値なきは言ふを俟たず。余輩が長篇大作を以て貴ぶべしと爲すは、その內容の外形と相伴ふて深遠なる者あり、若くは有り得べきが爲のみ。區々たる三十

一字の間に於て大なる理想を包含し結構を確立すべき餘地あらむや異常の天才が異常の時機に於て稀れに是あるのみ以て古今の和歌に収るべき者少きの理因を解知すべし俳句とても亦た同し和歌俳句のみを解して他を知らざる者は猶ほ線香花火を知りて仕掛花火を知らざると一般の痴者のみ但し余は絶對的にかゝる短詩形の保存を否定せず。そは獨り尚古の觀念よりのみならず第一實際に於て時に必要もあるべければなり換言すれば十七字もしくは三十一字に適當する詩想の偶然天外より落ち來ることなきを保せざればなり和歌と俳句と時に之を製作する毫も搆なし卑近なる暗喩を許せ猶ほ是れ垢ぬけたる料理屋の酌婦時に酒の相手とするも不可なきか如きのみ但し之を如何にするも共に心中すべきまでの名妹にはあらざるなり。

然れども此の如きは寧ろ稀有の事に屬すといはざる可らず第二は最も普遍的性質を有する者にして詩想の修錬に少からぬ便宜を有す

ること是れなり。即ち身體活力の修錬として柔軟體操あり思索推理力の修錬として初等數學あると同じ。されど體操がいくら上手になりたりとて、それのみにては餘りに使ひ道なく、三角法、解析幾何學の一端まで位の初等數學にては測量さへ碌々出來ず、凡そ修錬に用ふるものは僅に階梯たるに過きず、之に頼て命となすべき性質の者に非ざること は言ふまでもなし。和歌俳句などは廣義に於ける作詩の手引として僅に益ありといふべきのみ。一度はやるべく、又時に之をやるも、惡しからざれども、自ら之に限らむとするは、愚の極なり。且つ夫れ水産業に從事する者は鯨など捕獲してこそ興味もあれ、利益もあれ、無人島に航し、蝶蛤を拾ふこと幾千萬頓、縱ひ中に若干個の眞珠の混するありとするも、何程の事かあらむ。彼の不思議にも三十一字もしくは十七字に適合する詩想のみ湧き來る所謂短詩形の天才者に對しては、余輩固より勸告を試むべき權利を有せすといへども、之を一般にいふときは、和歌俳句

の如きものに對してさばかりの重を置かざらむを切望す。苟くも詩美の靈界に遊はむとする者は、長篇大作を試むるの勇氣を缺くべからずかへす〳〵七ぐとき樣なれど、あたら一生を擧げて、淺香山の山の井を汲み、芭蕉葉の陰にやすろふを以て足れりとする如きは、余の贊同する能はざる所にして、詩人たるべき價値の有無を疑ふに至ることもあるべからむ歟。

更に一歩を進めていはしめば、余輩は常に日本に於ける律語の不完全なるを認むる者なり。その初、聊か望あるらしく思はれし新體詩も、五七、七五の舊調の外、目ざましき形式の創出あるべきやうもなく、泣菫一輩の徒、多少の工夫を凝らしつゝあるらしけれど、猶ほ未だしのみ。是に於てか吾曹は、曩に散文詩の成立を論じ、又鄙才を顧みず、自ら述作をなし、大方の注意を惹かむを試みたりき。聰明なる讀者は、未熟なる吾曹の作品を以て、累を散文詩其者に及ぼすことなかるべし。而して、この廣漠の野、願くは天下の英才と共に開拓する計を爲さむ。平生の素願即ち此に外ならざるなり。

兒童唱歌

玉しき都の大路、天さがる鄙の山里、朱門と白屋とを問はず、垂髫の子が笑うて手を拍ち、路を攔ぎつて異口同音、爭ひ唱ふる者は白銅鞮のそれならで、彼の大和田なにがしが鐵道唱歌といふ者に非ずや。獨り學校通ひの兒童のみならず、母の背につかまれ居れる三ッ四ッ五ッの稚き赤兒までが、廻らぬ口にて之を囀り、よき歳したる職人風情の男ども、譯知らず、前後をこんぐらかして、之れを浮世風呂の中に呻る。其もぢくりし結果は、やがて「汽笛一聲死んだもの……そこでぢゝいが怒り出す。するとばゞあが暴れ出す……愛宕の山からおッこッて……山はかほちやかどうなすか……」といへるに到りて、誠に腹筋千萬の極な

れども、これも亦た大流行を表示する好證左たるべし。利の在るところ、はいづれも蚤取眼にして、一人走れば萬人驅け出すが浮世の常なれば、にや、之と同趣の者、羽衣の東京唱歌、鐵幹の地理唱歌をはじめとして、その刊行に係るものずでに二十種を算すべしと聞けり。從來卑陋耳を傾くるに堪へざる俗謠の外、一も兒童の趣味情操を涵養するに足るべき詩歌を有せざりし現時のわが社會に於て、之を要求するの急なる、かくの如きや、其理なきに非ずと雖も、余輩は不幸にして、個中に取るべき者の一をだに發見し得ざりき。他なし、多くの作者は未だ兒童唱歌の何者たるかを解知せず、唯だ平易に、暢達に、もう一つ御まけに通俗的にさへやれば好しと思へるのみ、ましして音樂の素養なきもの爭かで曲律の微妙を知らむずでに兒童教育の原理と法則とを度外視したるが上に、その辭章的技工に於ても絶えて趣致なく、風韻なきもの、無理に之を暗記諷誦せしむるとき、兒童の審美的情操を發達せしむるに對して、秋毫利

益なきのみならず、時にはいみじき弊害の、暗々の裡に醞釀されむかを危ぶむに至らしむる者さへあるなり。

そも兒童教育に於けるあらゆる教授材料は、多樣に分劃せられざるべからず。若し之を連續的もしくは集納的になす時は、到底幼稚なる頭腦に明晰なる印象を與へ確固なる領解なさしむると能はず。新らしき智識は、兒童の思索畛域の中に入り、他と緊密なる結合をなし、依て絶えず回顧をなさしむる如くせざるべからず。此の如き訓化的方法の下にありてこそ、先づ自ら求め、次に發問をなすの機會を與ふるを得へけれ。心性の修錬をなし、智識の領得をなさしめむとする者、縱ひ如何なる事情ありとするも、決してこの圈外に逸出すべからず。今夫れ、唱歌を以て、學校家庭を通じたる教科の一となさむとするは、固より惡しからざるのみならず、また大に推奬をなすべき事なり。さばれ、歌中に存する材料の充實は、毫も必須の條件に非ず。現時の唱歌作者は先づ第一、此點に於

て根本的謬見を有するに非ざるか。東海道の滊車の旅、東京市中の巡覽を叙するに方りては、其中に存する名勝故蹟、地理歴史と關係を有する者を暗記せしむるの便あらむ。然れども之を以て主要たる目的となすに至りては、事象複雜にして局面大に過ぎ、その結果としては、散漫にして統率し難き智識を授くるに過ぎざらむ。その内容すでにかくの如くなる以上は、辭章も自ら平板に流れやすく、中心絶頂を存せず、兒童をして詩歌その者に對する觀念を誤らしむる虞なきこと能はずかくて形式上に於ても遂に缺點の存在を免れざるなり。是に於てか、余輩は今より後に出でつべき兒童唱歌の作者に對して、更に他の方面に清新なる材料を取らむことを切望せずむばあらず。而して余輩はすでに如上の注文をなせし上に、その標型となるべき者を擧げ兒童唱歌の何者たるべきかに就いて言ふところなかるべからず。ガイベルが「春の歌」の如き、クルチルが「最富貴の侯爵」の如きは未だ必ずしも至れる者に非ずとす

るも容易に他に匹傳を見出し難き絶品にして、あらゆる兒童唱歌の中標型の極致となすべき者なり。「春の歌」の一節に曰く、

Der Mai ist gekommen, die Bäume schlagenaus;
"Da bleibe, wer Lust hat, mit Sorgem zu Haus;
Wie die Wolken dort wandern am himmlischen Zelt,
So steht auch mir der Sinn in die weite, weite Welt.

詩中の語字はすべて巧妙なる運用より出で自然の節奏は諧婉和暢を極め、正に春その者と調諧する所あり。加ふるに命意の自然的なるは言ふまでもなく殊に結末の兩句「浮きたつ心はさながら雲のちぎれが大空に漂ふ如く覺えず知らず遥なる世界にあくがれしめき」といふあたり、その暗喩の的當にして頗る姿趣あるは最も兒童に適したる者にして、之を一誦したる者は容易に自己の用語を以てその内容の表彰をなすことを得べし。八九歳の兒童に在りては、特に此種の者を授くべく、他

のケルヲルの詩篇は、やゝ進みて鄉土的智識を有する十一二歳の兒童に向て敎へらるべきなり。

「最富貴の侯爵」の內容は今はむかし、ウォームスの帝宮に於て、獨逸各地の列侯參集せし時、ザクセン王はその鑛山に就いて誇り、ライン公爵は紫實珠を連ねたる葡萄園を擧げ、バイエルン王は莊嚴なる宮觀寺觀を以て言となせしが獨りウルテンベルクの侯爵エベルハルトのみは口を緘して物言はず、人々强いて問へば、「吾は善行を以て至寶となすのみ」と答へて、絕えて虛傲の氣色なかりければ、滿坐の列侯あつと感じて「それこそ最富貴の者よ」と褒めたゝへて坐を讓れりといふ筋なり。この種の事柄は、東洋にも少からず。この一詩に於て、二樣の運用あるは、少しく思慮ある者の直に認め得るところなるべし。その第一は、詩中に存する事象とその相互關係とを詳明し、既得の知識を喚起して、之を完成擴張すべく、第二は全體着想の基礎に就いて、確實なる理解をなしかくて

諷誦百回の後、詩中の諸點をして一層截利ならしむること是なり。更に之を知識領得の方面より詳說すれば、そも當時獨逸の版圖と區劃とは如何なりしか、君主はすべて今の如き爵位を有せしか、帝都は何地にして何人が此に住ひしかすでにウォームスといへば、その位置を尋ねて之を求めざるべからず。ニーベルンゲンがすでに領知されしならむには、之を回憶すべく、その他ライン、ハルツ、ウユルテンブルグ、バイエルン、ザクゼンの如き、苟くも詩中に存する地理的固有名詞は、皆指示さるべく、なほ幾分の鄉土的智識を有する者にありては、千百七十四年オットーの爲に初めて王國の班に上りしかの山市たるフライベルグは容易に知らるべく、寺院に就いて推及をなさむとするに自ら其所なきに非ず。扨て如上の諸邦は、一語之を何と言ふべきか。豐饒なる土地、鑛山地、繁華なる都府など、自らその概念を構成すべく、而してこの土に君たる者、果して幸福と呼ぶべかりしか。苟くも地利の人和に及ばざるを悟らば、

平和と戰爭と、其時を異にしたる、國家狀態の他の實例が胸中に描かるべく、古傳說はルードウッヒ侯の城壁よりチューリンゲンに及び、またラドボットよりハブスブルグに及び、やがて人和は他に其類を見ざるほど重大なる國家性にして、君主の善行は、全く其基礎なりと結論を生ずべし。かく論し來れば、頗る紛糾錯雜せるに似たりと雖も、其間自ら次序あり、絕えて紊亂せず、結局的着想に隨伴してすべて領會せられ、道德的なる內容は形式の美と相伴ひやがて智識の上に射映し來るなり。かくの如くして、敎育上に於ける歌曲の能事畢れりといふべし。

之を要するに、兒童唱歌は詩的要素として至純なる想像の運用を存し、形式はどこまでも平易流暢なるべくその根底に於ては幾ばくかの道德的概念を含藏し、體系的知識の之に聯關して自ら領知さるゝ者あるを上乘とす。されば其材を撰ぶこと、自ら細心愼重ならざるべからず。かの不德なる書肆どもに煽てられ、高が一節一圓ばかりの原稿料を貪り、愚にもつかぬ者を作り出し、而かも自ら其工の早きを誇る手合に對しては、余輩唯だ彼の劣性を認識せし外、言ふところ無かるべきのみ。

狆、隘なる寫實小說

羊頭を懸けて狗肉を賣る陋しむべき故智は、現時の社會に在りてすら、ゆる者に適用せられざるは無く、かの雜誌店頭に堆く積み上げたる新刊の書籍盡く然り。而して小說と呼ばる種類に至りては、殊に甚しく、裝黃勿體なきまで美々しく仕立て、表紙を飜せば一葉の口繪に、聊か人の好奇心を動かし、時ありてか、むごくも少年輩が紙墨費の餘錢、寂寞たる財布を敲かしめむとするは、余輩が數ば實視せしところなり。今夫れ摘菜にせむとして扱ても少きを、卿つべきもの、獨り武藏野の草のみかは、今日作家の手に成りし小說の中、縝重なる批判を値するに足る者、果して幾何ありしか。余輩は今や正に忽忙なる行路の中に在り、日暮れて

途遠きの感を爲さゝらむを期する外、他の志望あらず。故を以て甚だ失敬にして且つ大膽なる言分ながら、雨後の筍の如く續出する紛々たる駄小說を一々忠實に閲讀し得べきほど無用なる閑暇を有せず、又かゝる者を以て多少の快味を搏せむとするほど鑑賞力の低き者に非ざるを確信するなり。

屈指すれば、早や幾星霜の昔なり、嘗て五城の學窓に在るや、外國語に對する不十分なる讀書解知力を以て、初めてプラトンが書きし「フェードン」の英譯をほゞ讀せしとき、かの希臘の大哲が其罪に非ざるに、一杯の毒酒を仰いで仙遊龍化し、千金の骨、空しく黃土に委したる大悲劇的最後に於て、道義の大なる實例を人間に提出せしを見て、流石に自ら奮起するところ無き能はず。又クロムウェルの傳を讀みしとき、その眼中唯だ國あるのみ、萬乘の帝王を死に置くにさへ怯ならず、是非の說、長しへに決せず、而かも、その强盛なる意志は、懦夫をして起たしめ、頑夫を

して廉ならしむる者あるを嗟嘆しき。かくの如き類、一にして足らず。余輩は多少の慰籍を求め且つ心性を向上せしめむ爲に、自ら數多の書籍を有せり。何を苦んでか、たゞ濫讀をなし、却つて不快を求むるを要せむや。さばれ、余輩は固より小說その者を排斥するに非ず、また文學を以て道德に隷屬せしめむとする者に非ず。その性質と畛域とは、固より之を知る。その現時の小說に慊らざる所以の者は、他の故あるに非ず。狹隘なる寫實を主とし、常に同一の類型を以て成り、おしなべて淸新なる詩材を缺くを以てのみ。

極端なる觀念小說が、その構成上、頗る不自然の跡ありしは、何人も認むるところにして、又實に推奬を値すべき者に非ざりき。是に於てか、寫實的傾向は、一二年前より殊に彰著となりぬ。風葉天外の如き、自ら之を標榜する者は、更にも言はず、嘗て幽渺奇奧なる一種の詩趣を發揮せむと力めし鏡花すら、近ごろは、知らず識らず、之にかぶれ、照葉狂言に於て

其跡の明かに尋ぬべきものあり。余輩はこゝに寫實主義その者に關して、特に論究するところなかるべし。唯だその描寫の精緻なるべく、印象の明瞭なるべく、依て少くとも現時のわが讀者社會に於て、多數の渦仰者を有すべきを一言せば足れり。然れども淺薄なる寫實はあらゆる小説の中最も下れる者たるを疑はず。何となれば、現實に於ける境地の變化を極盡し、經驗に緊着すれば、ずる程いよ〳〵不健全若くは不合理に流れ易く、遂に詩美を掩ひ盡し、爲に小説の眞精神として必ず結局的着想たるべき人生の意義及び宇宙の樞機に對して、益す遠ざかるを免れざればなり。

紅葉露伴の久しく筆を絶ちしは、何人も之を知る。蓋し彼等は元より、さばかりの者にも非ず、唯だ社會が誤て推稱し、實際以上に持ち上げしに過ぎざるべし。今歳の文壇に於て、最も世人の注意を惹きしは、蘆花が不如歸の一篇なりき。よし筆路の熟達せざる痕跡は終に掩ふべからすとするも、其材を取るの自ら他と異りて、清新純潔の趣味を帶びたるは確かに鐵中の錚々たるを失はず。風葉の戀慕ながし、天外の初姿、幽芳の己が罪の如き、その或者は引眉毛、二度のつとめに出でしなれども、尚ほ聊か傑出したる今年度の產物として、一の不可を見ず。而してこの三者が一同に申し合せたる如く、揃ひも揃ふて淺薄なる寫實に出で、而かも所謂同一の類型を以て成りしは、辭目か知らず、余の正しく認めたるところにして、乃ち聊か論する所なきを得ざるなり。

戀慕ながしは風葉の作中に在りて、疑もなく、多少の經營を以て成れる者なるべし。その描寫の善く微細を穿ち、隨分こまかに立ち廻はりしが上に、外圍景象の配置に、やがて幾分の詩趣を帶びたる如き、見るべきものの尠しとせず。然れども他に大なる缺點は、依然として取捨疎密の其當を失せるにあり。五十栖葉子があらゆる苦痛煩悶を味ひ盡したる最後の雉經は、確かに讀者の情を動かすに足るべしと雖も、余輩は遂に純

化さるゝ能はざりしを憾む。特にろの中間に紛糾錯綜する事象發展の徑路は縱ひ不自然ならずとするも、餘りに技工的なるは、遂に爭ふべからず。作者が結果を豫定して、多變なる境地を作らむと試みしは、何人も直に推測し得べく、而かも爲に醜陋を極めたるを喜ぶは、知らず是れ何等の愚ぞ。かの狂風一陣吹き荒れて、花房の窘蝶泣いて聲なき處など、さすがに作者は省筆を以て之を行らむとせしなれども、事象の醜は却て爲に明截なる者あり、到底之を神聖なる詩神の前に捧ぐるに堪へずかくの如きもの、余また之を天外が初姿の中にも認めき。待合に於ける笠田の非行は、最後に於けるお俊が心機一轉に對して階段的原因の幾分を供せしつもりなるべけれども、未だ以て必須なる事態の一となすを得ず。惟ふに唯だ下劣なる讀者の悅喜を求め得べきのみにして、他に毫も利する所あらざるべきなり。之を要するに兩者ともに淺薄なる寫實小說たるとは斷じて否定すべからず。余輩は之を一讀して、唯だ不快を

覺えし外絕えて心性上に射映せし結果あらざりしなり。更に進んで、以上の兩篇に於て共通なる類型の果して何者たるかを檢せむか。一個の女子を以て正色となし、之をして生命にも易へがたき貞操を破るの止むを得ざる暗黑の深淵に陷落せしめ、ろの煩悶の極點に於て心理狀態の激變を起さしめ、以て結となすこと、是れのみ。

幽芳の己が罪、多少異りたる者なきにあらずと雖も、ろは圍繞せる狀勢のみにして、環が一身に於ては、亦た決して此の圈外に逸出せし者あらず。特に此編の如きは、高が新聞小說のみ、由來新聞小說は、下劣なる作家、例せば桃水、弦齋、松葉、諸輩の書くべきものにして、讀者は唯だ明日を翹望し、ろの續載せらるゝ間は、決して全體に對する批判を爲すべき暇なく、彼が自ら所謂大喝采を以て局を終るを常と爲す、かくて一部に敲き上げて見れば、さばかりの代物ならぬことは、知れた事のみ。加ふるに、幽芳の此作に於ては、敘述の方法、餘りに平板にして、且つ機制的拘束を

超脱する能はず、事象の因果的關係をして力めて合理的ならしめむと期したる結果は絶えて自由なる空想の發揚を許さゞりし觀あり、大阪毎日新聞の讀者に非ざる限りは、決していみじと推奬せざらむなり、

如上類型の起原に關する縝密なる討究は、余今こゝに叙記すべき餘白を有せず。而してこの類型は、確かに作者の豫期せし如く、同情を惹起するに最も便益の者なるべし。現時の讀者は、世態の不合理にして推移變遷の常なきを知れり。故を以て、必ずしも目出度し〳〵の大團圓を以て滿足せず、終局の悲慘なるも決して爲に堪へざるに至ることなく、能く事象の經過を回顧一番し滿幅の痛涙を濺ぐに吝ならず。加ふるにあらゆる方面を於て弱劣なる能力を有する女子を擧げて、之と干渉せしむるに於てをや。類型其者は、決して狹隘なるに非ずと雖も、作家が之を借らむ爲に使用する材料は如何ずでに彼等が描破し得たる人格は、其數に於て頗る多からず。特に代數學上の定理を以てせざるも、之を推算

することさばかり難事に非ず。ろの狹隘なるは、作家自身好むで若しくは止むを得ず之を爲せしのみ。且つや世態の醜惡を摘發するを避けず、單に事象のみを寫し、心理的原因を以てひたすら讀者の模索に任せむとするに至りては、頗る危險なる者あるのみならず、詩美の發揮に對して、斷じて成功すること無かるべきなり。之を呼んで淫を誨へ色を勸むる書となすも何の辯疏かあらむ。

今夫れ、自ら純化せずして他を純化せむとするは、難きのみ。なにがし雜誌記者の所謂神樂坂に三十錢の西洋料理を食ひ、麥酒に醉ひしまぎれに新宿にねり込み、時には車夫と喧嘩する程のしれ者ども、品性の賤しきや、言を俟たず。何に由てか小説の眞義を解せむ、まことに憫笑すべきに非ずやかくの如くして、余輩は現時小説の言ふに足る者少き理由を歸納し得たりき。

試に思へ、小説の結局的着想たるべき人生の秘密と宇宙の隱微とは、

固より經驗以上にして必ず現實の外にあるべき故を以て之を實現せむと欲せば幽奥なる思索を凝らし高尚なる理想を着せざるべからず

沙翁の如き大戯曲家はいふにも及ばず、近時に於けるトルストイ然り。イプセン然り。その他歐西名家の神品たるもの、孰れか果して此の如くならざるべきかの長しへに區々たる現實の畛域に跼蹐し、客觀の蝸牛殼裡を出でず、未だ向内的思索の何者たるを解せず、材料となる人物は決して花柳境外に於ける高潔なる女子に及ぶこと能はず、覺束なき經驗をろの儘に小運命と小波瀾とに顛轉する小性格を作るもいかで永遠無窮に亘れる理法に接觸するを得む。余輩は此に至りて彼の狹隘なる寫實主義を排斥せむと欲するなり。

凡そ小説の種類をいふも、何ぞ必ずしも戀愛の失敗のみならむや。其内容上の議論は姑らく之を措き、單に結果に就て言ふとき、ウエークフヰルド副教師の一篇、善く洛陽の紙價をして高からしめしを思はゝ、家

庭小説の推奬すべきを見るべく、ロビンソン、クルソーが洋中寶珠の名を以て亞刺比亞語にさへ飜譯せられ、その國人の好賞を得たりきといふを聞かば、冒險小説も亦た中々馬鹿にした者に非ざるを知了すべし。

他の滑稽小説といひ、歴史小説といひ、名も付け樣によりては、僕を易ふるも盡きざる程にして、小説の範圍は蓋し無限なるべし。此點に於て余輩は不知菴が嘗て社會小説、宗教小説を論じ、亦た自ら筆を着けしを多とす。よしや、手は口ほどになしとするも、別徑を開拓せむと試みたる才識と、精力とは頗る嘉すべし。

長繩は日を維き難く、流光人を待たず。今年も漸く暮に近く、二十世紀の新舞臺は余輩の眼前に開展せむとす。而して是れ奮つて、あらゆる方面の刷新を謀るべき好時機に非ずや。

現代の學風

讀書は衒學の爲にする者に非ず。之を一般にいへば、自己が思索の端緒を求むるに必要なるが故のみ。今夫れ自己の生活中に爲すところ、經驗と學習とは、各自一方に對立すと雖も、ろの紡き出す所の絲は、末端に於て交錯せざることあらず。今夫れ耳目が特殊の方法もなく、秩序もなくして、日々心靈に齎らし來るところ、瑣細なる尋常の經驗と雖も、自我を主として、その發展の徑路を尋究すれば、根底に於て必ず不變の眞理あり、縝密なる學者は、必ず之を間却すること無かるべし。余輩は常に吾が大和民族の思索力に乏しきを疑ふを禁ぜず。學習を重んじて、經驗を蔑視し、唯だ前人の說を傳へて搬思特見を出すことを謀らずかくの如くして、果して一種の特色ある人文を發揮し得べきか。思ふて此に至れば、聊か心細きことなき能はず。さばれ、我邦が歐西の新潮を疎導せしは、僅々三十年來の事のみ。あらゆる事物に多少の準備の避け難き者あるを知らば、今日の狀態を爲せるもの、甚だ怪しむに足らず。但し爲學の工

夫の果して何者たるべきかきを意識せざる間は、決して好氣運に轉向すること能はざるべし。余輩をして憚なく言はしめば、現今學界の趨勢は、唯だ形式的の講習を爲すを以て足れりとし、絕えて自己の思索を重んぜざる如く見ゆるなり。かの「西洋の腐儒」一輩の閑頭顱累々として何ぞ其れ多きや。

歐洲中古時代に於て、復た之と相似たる傾向ありき。當時の學者は、唯だ古書の講習に依りてのみ、正確なる智識を領得すべしと誤想し、未だ自己が經驗より出づべき思索の價値を認知せざりき。之を巴里大學の歷史に徵するに、「如何にして油は凍るか」といふ問題の起り來りし場合に於ては、直に去て、アリストテレス、プリアニスの遺書を繙閱し、その中に見えたる者を擧げて答となしたるに過ぎず。而して實際に於て一たび嚴冬の候に方り、一盞の油を窓外に置き、自ら之を試むることを爲さざりき。

自然科學の進歩と、清新なる文學の興起とは、講習と實驗との間に存する限界の障壁を破壞するに與て力ある者なりき、蓋し前者は日常普通の變化中にも擴充的法則の實際に儼存し、依て研究せらるべきを證し、後者は精神的畛域の中に、日常の實驗と觀念とを連結せしめ、新聞所載の雜報中にも悲劇の種子あり、一指を以て之を彈破するとき、人間生活の中より容易に藝術の對象を發見すべきを敎へたればなり。レッシングは、この精神的行動の深遠なる表示を道破して曰へらく、唯だ確實あり、依て各事實の中に普通なるべき根本的眞理を發見し得べく、唯だこの眞理なる者、道義上の英傑なると科學藝術の偉人とに論なく、以て大なる精神を樹立せしむべし」と

現時の我邦の狀勢を以て之に對比して、沈思一番せむか。科學界の事は余輩固より門外漢の位置にあるを以て、正當なる判斷をなし得ずと雖も、多少見るべき者あるは事實なり。然れども、文學に至りては固より

道ふに足る者あらずかくの如くして、獨立思想の發展は、前途なほ悠遠なりと言はざるべからざるか、

敎育と家庭

むかし、ウエリントン侯は、イートンの小學校に臨で、參觀をなし、慨然として嘆じて曰く、ウオタールー戰勝の素因は、其れ此に在るか。と。この有名なる一話は、初等敎育の効果、絶大の價値あると、その國民元氣の振興に與て力あるとを證示したる者にあらずや。今夫れ兒童は大人の父のみ。初等敎育の決して忽にすべからざるは、今更贅する迄もなきこと にして、獨り之を學校にのみ委托すべきに非ず、家庭にて更に大に盡すべき所なかるべからず、之を我邦に見るに、古昔覇府時代に在りては、家庭の訓化却て大に見るべきものありしと雖も、維新以後學校制度の整備をなせる後、いつしか衰頽せし傾向あるは何人も直に認め得たる所なる

べし。

ルーソーがエミールの教育を論するに方り、秋毫其父母に說き及ばず、あらゆる教育上の勢力を以て、その教師に歸せしは、固より謬見たるを免れず。何となれば、家庭と學校との相判れて對立する爲に、必ず或者を生ずべきに就いて、全く度外視したればなり。故にその委棄せし問題は、更に後人を起し、特殊の教育學を分出して、探究の氣運を促したりき。

ペスタロッチエは以爲へらく、訓化と教授とは、必ず家母の手に於て爲さるべき者なり、と。而して余輩は、個中に復た斬新なる確見の存在するを知る。之を詳論すれば、家庭教育は人格養成の基礎にして、家庭に特有なる秩序習慣の如きは、甚た著しく兒童の心靈上に影響を及ぼすべく、畢竟家族的關係は、他の裝置の容易に代ふる能はざる深遠なる結果を生ずべき者なれば、かくの如くして、學校は決して教育の繼續者といふを得ず、むしろ共同的勞働者といふべきのみ。兩者が聯關合一に關

し、は、多、樣、に、攷、察、す、る、を、要、す、れ、ど、も、而、か、も、家、庭、に、於、け、る、印、象、の、整、理、照視は、兒童期に於ける最始の課程と稱すべき者なり。故に要求すると、ころは、主として家庭に在りとふも、何の不可かあらむ。蓋し家庭は、温を與へ、學校は、光を與へ、家庭は理解と欲求とに最始の發動を促進し、學校は知識と基礎とに對して準備せしめむとするなり。此に由て家庭はその行動を輔助せむが爲に學校の與ふる者に接近して、絕えず兒童心靈の開發に心懸くべく、任意適當の材料を以て學校に望むべき結果をして、一層廓大に且つ强盛ならしむべき者なり。

今夫れ家庭たるもの、一方に嚴存し、學校が爲すところ、知識の行動、意志の擴張に對して共力し、因て學校の印象をして再現するを得せしめ、學校たるもの他方に確立し、その教授と刺衡とをして、生徒が家庭に得たる直觀範圍の中に潛入する如くならしめなば、兩者相待つこと、宛として鳥の兩翼、車の兩翼の如きものあり。その結合的効果は、たやすく心

靈の奥底に到達し、因てその心情を成熟せしめ、個人的特癖を靜定するを得べからむ。

家庭教育の重要なるこ、かくの如し。獨り怪しむ、現代の我邦、あらゆる家庭の主人たる者は、かつて之に想及せしことなきを。其故たるや、他なし、彼等はすべての方面に於て、猶ほ未だ全く開明化せず、見量の爲に面倒を見るを以て、その威嚴を損ふと誤信すればの故のみ。その觀念の淺薄非理なる、むしろ憫笑すべきのみ。是に於てか、余輩は家庭と學校とを一して互に相知らしむるを目的とする一裝置、強いて名づけなば、學校會といふべき者の創設、もしくは改良に就いて、言ふ所なくむばあらず。こは父母と教師との間に、協議を凝らすべき機會を附與す者にして、指定されたる學校を以て、中心點と爲すことは、自ら避け得べきに非ず、その對象も亦た必然的に學校の小生活に關することとなるべし。今夫れ小さき者の世界に在りては、小者即ち大者にして、單獨尋常の者、却て彰著有

値の者たるべきを知らばかゝる場合に於ける教育問題處理方法の協議は、細緻縝密を主とし、その件數の如きまた決して多きに過ぐべからず、宜しく傍觀の妙着、外より視察し得たる者に就いて、遠慮なくその胸臆に存する者を發言せしめ、更に進んで、一般に關する改善の方法に就て討査せしむべく、要は父母をして學校其者に就いて興味を有する如くなさしめざるべかず。凡そすべての事に於て、言ふは易くして行ふは難し。余はこの裝置の利便を認むると共に、その完成をなすべき方法の決して容易ならざるを知る。然れども之を以て辭となし、擧行を爲さざるが如きに至りては、決して教育に忠なる者に非ざるべし。余は教育に從事する人の、之に就いて、考慮を爲さむことを切望せずむばあらざるなり、

家庭の父母たるもの、兒童の教育に就て興味を失はざるに於ては、余をして更に他の一事件を望ましむるに至らむとす。便ち永續して行ふ

べき訓化の特殊なる精髄的資料として國民的童話の如き、諸種の古傳說の如き、健全なる思想を發露せる歌謠の如き、將た國民性を表彰せる神話中の事項の如き者に就いて、應分の價値を認識し、之を應用施行すること、是なり。詩人はかつて巧に其眞を歌ふて、實に下の如き辭句ありき、

„Nur durch der Jugend frisches Auge mag Das langst Bekannte neu belebt uns rühen, Wenn das Erstaunen, das wir längst verschmaht, Von Kindesmunde hold uns wiederklingt.„

「唯だ幼者の鮮かなる眼を透射して來るとき、昔より知了されたる者どもは新らしく覺えて余を感ぜしめ、また已に慣れたる畸異の事ぐさも、兒童の口よりして涼しげに反響し來るべし」この興味の勢力と永續とに對しては、余輩決して些少の効果を以て歸せざらむとするなり。唯だ夫れ、余輩は自國に於て、グリムを有せず、ニイバルンゲンリードを有せず、ホーマーを有せず、ビイブルを有せざれば、今の場合に於ては、零碎せる斷片を拾ひ蒐め、自ら取捨する所なかるべからず。是に於てか、余輩は數ば少年文學の述作に就いて、聊か注文をなし、その極致の標型を論ぜしことも、あり。滿天下垂髫子弟の爲に、一個の小波山人を謳歌するに吝らざることすらありき。

家庭の趣味を高むるの一事は、國民性の進歩に關し、必須にして十分なる要件なること、言までもなけれども、余は如上の理因により、特に其然るを主張せずむばあらざるなり。

想像の缺乏

萬般の事象に就いて、多少の領得を爲さむとするもの、之を經驗と學習との兩方法に歸するは、何人も直に想到すべきことにして、又決して誤りたる者に非ず。兩者は截然として相異なる所あり、依て見解に富み、價

値に滿ちたる組合をなさしむ。カール、フォン、ラウメルは頗る巧妙なる實例を以て、その間自ら逕庭を存する性質を闡明して曰く、汝は地圖・摸型・記述等、すべて前人の觀察より出でし多樣の表顯を以て、巴里に就いて知る所あるを得べけれど、また或時は自ら巴里の或家にありて、殘なく之を實視するを得、便ち窓牖に倚りて外邊に囂々たる雕輪寶馬の聲を聽き、小さき部分の觀察を擴張し、結合して、仍て此市を知ることをも爲し得べきなり、と。而してウ井ルマンは、更に第三方法の存するを論じ、一條の說を爲して曰く、ろは全く心靈上の作用にして、絕えて現實の分子を交へず。即ち他の市に在りて、巍然たる大建築を見るや、バラセンもしくは、セント、マテレインを想起すると同じく、すべて大なる現實に就いては、一の寫象を爲さゞる者にして、かの紀述等より學び得たる知識とは大に異なる者なきこと能はず。こは全く心靈的直觀より出でし者にして、時に孰れか斷片的もしくは比較的對象たるに過ぎざれど、その

運用の修錬は、人間生活の上に偉大なる効果を及ぼすべき者にして、精神界の產出、一に之を以て根底となすべきなり、と。

げにや想像力の正當なる功用は、感官の作用によりて到底知覺し得ざる者を心上に躍出せしむるにあるべく、かの過去の歷史を溯り、之を現存の者として、眼前に見る如き感覺を起さしむる如き、將た吾人の未來に屬する者、若しくは現在にありて吾人と相隔たり、まのあたり聞見し得ざる者を、感觸的に吾人の觀に供せしむる如き、即ち是なり。故にフンボルトはコスモスの中に記して、南洋の珊瑚島上に產すと稱する龍王樹は、伯林の植物園に移植せられたるが、亭々として雲を拂ふ其姿の一瞥は、遠き旅に熱望の核子を與へしめ、其地の風光を有無の中に彷彿せしむべしといひ、また之と相似たる無數の類例が、心靈的印像の高き効力を有することを表示せり。かくして想像の運用は、直觀の發揚をなし、現實以外に他の形像を與ふる者にして、その結果の往々にして超越

する所あるは、多くの實例の示すところ、バイロンは幼時に於て、エッダとシモエイスとを一讀し、その故國の山川洋海を想像の中に古代的狀態に形化せしが、後年現實の一瞥は、決してこの鄉土的色彩を施して成りし形像に若かざるを見て、嘆嗟を爲すを禁ぜざりしと云ふに非ずや知るべし、想像の運用は、經驗學習等、現實外に一歩を踏過し能はざる者に比して更に事象を美化したる結果を形成すべきを。

今夫れ詩歌は、想像力の觀察なりといひし者、必ずしも言を河漢する者に非ず。試に思へ、經驗により、若くは學習によりて、詩歌を作らむとする者その結果應さに如何なるべきかを加ふるに、詩歌は自我を發揮する者、學習を以て之を爲むとせば、唯だ摸倣の工を競ふのみにして、同一類型を出づること能はざるべし。おもふに現時に在りて、淺薄なる寫實小説の流行を來たし、而も類似の事象を描寫する如きは、所謂作家たるもの想像力の修錬足らざるが故に非ざるか。之を呼んで枯燥せる頭腦といふ、何の不可かあらむ。

余はかつて、レッシングの譬喩談を讀み、中に就いて面白き一條を記憶せり。巨大なる駝鳥、曠茫たる沙原の上にあり、大叫して曰く、吾今將に飛ばむとす、と。無數の群禽、其傍に集るもの雲の如く、今や遲しと見物せり。吾今將に飛ばむとすと再叫するや否や、駝鳥はその稀有なる勁翼を皷し、滿帆風を含む勢を以て疾馳せり。而かも脚は一寸も、地を離るゝこと能はざりき。枯燥せる頭腦より出でし詩文は、縱ひその初行に於て、珍らかにして且つ力あらむとも、遂に一笑を値するに過ぎざるのみ、と。余輩はしば〳〵雜誌の上に於て、現時の作家が訪問者に對し、オホンと澄まし、他日の大作を出すべきを公言するを見たり。而かも彼等が出せしところの作品は、一も之を證するものなかりきげにや、駝鳥は唯だ走るべきかりき、彼等作家は唯だ流行を趁ひ際物を出すべかりき。その天分を知らずして、自己以上の事を爲さむとす、難いかな、難いかな。

陋劣なる國民氣風

東洋の花彩島裡山温水軟の自然的景象が民人の氣風に影響せし結果は知るべき耳。温醇雍雅或は之あらむ平和愉逸或は之あらむ獨り熱誠の氣と峻嚴の概とに至りては終に求めむべかからず。故を以て、その一轉するや、容易に淫靡妖冶の陋習を醞釀するに至り、其例また史上に少からず。嗟乎、花間の蝴蝶、珠蕋玉葩を穿ち、酣夢を貪るもの、何ぞ其れ、風雨一朝にして嘖りやかて彩翅粉靨の厄あるを知らむ。唯だ眼前の小康に滿足し、遠大の思慮なきもの、豈に之に似ずと謂はむや。咋、遼東半壁の江山、恨を呑で擲ち還せし時に當りては憤念流石に抑遏すべからざるものあり、臥薪嘗膽以て他日必ず爲すあるべき誓ひしもの、今や果して如何。年を隔つる未だ十に及ばず、すでに全く忘却し了りしが如く、上下唯だ歡樂を事とし、安逸を求むるに汲々たり。而して「國讐未報身先老、篋

中寶劍夜有聲」を歌はむ者、その人遂に見るを得ざらむとす。未だ知らず、是れ昇平の澤か、飽腹の幸か、抑も又健忘の症か。さきに赤新聞種々の題目を設けて、當世似而非紳士の秘惡をさらけ出し、聊か現世社會の混濁を公然表白せしと雖も、未た之を以て盡せりとは思れず。而して此輩の徒は、多少の位置を社會に得て、比較的上級にあるもの、頽風惡俗、この間に發生し、遂に一世を擧げて、物質的、否な極言すれば實感的快樂の盤渦中に陷るに至らしむ。その後生少年に影響するに至りては、啻に厭ふべく且つ憂ふべきのみならず。寧ろ塞心すべきを覺えずむばあらず。太平の宰相、上に在り、好色の艶名を流して頗る得意の模樣あり。下には「焦がる何とせよう」の國民を以て充滿す。あはれ前途多幸の島帝國、二十世紀の國是を擧げて、此等狂痴輩の手中に托するさながら泰山の安きに似たる者あらむか、汝の多幸また極まれるかな。

然れども、其由て來るところ深く且つ久しきのみ。國民の缺點にして

改善されざる間は、縱ひ諸種の理因によりて、しばらく截然相異りたる外觀を呈することありと雖も、その潛勢力は長しへに失せず、暗々の中に、潮流の起伏をなし、時に顯著の狀態をなして發現せむとす。今夫れ下里巴人の調は、唱ふるもの多くして、陽春白雪の曲は、和する幾もあらず。卑俗淫猥なる俚謠の常に流布するは、怪しむに足らずと雖も、近時のストライキ節に至りては殊に甚しといふべきなり。一たび神港狹斜の巷に其源を發して、地北天南、直にろの遍布を見る、ろの速なるや、郵を置くに過ぎたり。「汽笛一聲」たち聞えずなりて、垂髫の兒童、また之を歌ふ。世にかほどまで普及したる者、殆と其例を見ざらむとす。然れとも、悲しむべし、鄭聲の淫は、昔よりわが國民の喜悅して措かざるところなりき。試に、おもへよさこい節は、實に元祿時代に出でし者にして、昇平日久しく、兎角に奢移淫逸に流れたる當時の人心を迎合せむが爲に、肉慾的歡樂の絕頂を寫したるに外ならず。而して卑陋なる詞調は、容易にその廢滅を

見ず、弘化の頃にいたるもなほ且つ行はれ、今に僻陋の地にその遺音を存するに非ずや。余輩は必ずしも單に一個の實例を擧げて、盡く他を律するを敢てせずと雖も、民風の趨向するところ、太だ卑きにあるを斷言するに憚らず。隆達節の雅調は、寬政の初まで木伐歌として伊豆大島に殘れりしと雖も、上國の船舶來往、漸く頻繁なるに及ひて、神崎ぶしよさふ節の俗音がいつしか之に代りしといふこと、七島志に見えたるが、唯だ漫然として新を喜び俗を迎ふる淺間しき見地は、今却つて古より甚しきものあり、豈に以て言を爲すに足らむや。

人或は鐵道唱歌の廢絕を以て、批評家が之に對して些少の同情を有せず、冷嘲慢罵を以て之に加へたるに本づくとなす。一應は尤らしけれど、唯だ事象の表面のみを見て、從來の國民性開展の跡を審かにせざる者、その淺見寧ろ笑ふべし。現に批評家にして、かばかりの勢力あらば、大し、た者ならむのみ。わが同胞は、未だマルセーユの曲を有せず、祖國の歌

を有せず、容易に卑俗の音の跋扈を許すに至る。誠に致方なき次第なれども、既往は姑らく問はず、余輩は國民的大詩人の出現を待つや、轉た其切なるを禁ずる能はざるなり。

更に一歩を進めて言へば、前記の理由よりして、余輩は今古に亘りて、健全なる文學を有すると、亦た多からず。道念の確固ならざる痕跡は、歴々として覩るべく、而かも一貫して剩すところなきなり。之に加ふるに摸擬踏襲を以て特徴とするもの、如何にして偉大清新の文學を樹立するを得む。之をすべての方面よりいふも、現時の急務は、國民思想の刷新にあるべきなり。既往三十年間は日新文化の域に進まむとする準備なりしは、疑ふべからず。今夫れ、材を積むもの、久しく之を用ひざれば、終に朽腐を免れず。將來の國民は、進んで自己の特色を發揮し、大に爲すところあるべきなり。唯だ輕佻の風を脱せざるを以て、未だ起つこと能はず。こゝに宗教と教育とは、殆んど根柢よりして、一國の民心を轉向し得べ

く、その効果は亦た他に比して頗る速かなる者あり。精神的訓化に從事するもの、區々たる瑣事に頓着せず、その天職を自覺し、よろしく祖生の鞭を着けて、努力する所なかるべからず。

先覺の訃音

逝く者歸らず、遂にかくの如し。臨江の嘆、吾、これを二十世紀の劈頭に發するを禁ぜず。蓋し新陳代謝は、自然の數にして、人生固より蜉蝣の身、朝にして夕を料らず、さばかりの事、今更驚くを要せざる如しと雖も、時は轉じ年は遷りこの新舞臺の幕漸く開きしばかりにして、坤輿の上に一代の聲名を震ひたる巨人偉傑の凋謝するもの、相踵いて絶えざるに至りては、特に心細さのいや増すも、無理ならぬ事なり。之を海の外にすれば、大英女皇ヴィクトリアの崩御あり、露國の陸軍大將ゴールクスの長逝あり、伊國の作家ウァーヂの永眠あり、前世紀の末に於て正義の聲

高く張り上げたる杜國の統領クルーゲル、將に起たざらむとする由聞き及べり。凡そ此等の諸輩、その存亡、世界大勢の上に多少の變化を及ぼすべきは、疑を挾むを須ゐずと雖も、そはこの誌上に於て論ずべき限にあらず。而して吾等が不幸にも自國に於て二個の先覺者宿を失ひしは頗る嘆惋の情を禁ずる能はざる次第にして、やゝ後ればせの感なきに非ざれど、義理にも、一片の悼辭を捧げざるを得ず。

高壽百に滿たざる僅に一歳にして、溘然世を謝せし博士伊藤圭介翁は、實に福分の厚き人と云ふべかりき。その一生は前世紀を通貫し、幕府の盛時より明治の聖代に及び、而かも紛々たる世上榮枯の跡、一も其心を攪亂する無く、長しへに學問に忠なりしもの、何人か果して儔侶たるを得べき。科學界の事項に關して、吾等は言ふ迄も無く門外漢の位地に在り、敢て之を論議する能はずと雖も、假りに推測するところ、現代日新の學界に於ける翁の位地は、さばかり高き者にはあらざりしならむ。植

物新種の發見の如き、斯學の未だ開けざりし當時にありて、易々の事たらむのみ。そも分類の研究は、二世紀以前、瑞典の博物學者リンチウスに至りて其盛を極めしが、後の學者は價値なき者として、既に拋ち棄てゝ顧みざりしところ。あらゆる生物に關する輓今の觀念は、頗る顯著なる發達をなし、動植兩界の區別など、鹿爪らしく述べ立つる馬鹿もなく、細胞學の進歩は、一轉して他の黴菌學をも確立せしめむとし、精緻の研究は、着々として歩武を進め、必ず微を究め細を穿たざれば、歇まず。日本植物の品彙を叙述せし若干種の翁の著述は本草綱目に比して一歩を踏過せしものありとするも、やがて鄴侯架上の珍に過ぎずなり行くべき日あらむとするに非ずや。翁が壯歳の日、長崎に游び、獨逸人シーボルトを驚倒せしめしといふも、その頃、萬里飄泊の外人に碌な者ありし例なく、星巖が江芸閣に於けるに似たる者なくむば幸のみ。かく述べ來れば、さしもの翁も、三文の價値なきが如しと雖も、吾等はあらゆる事象に發

展の徑路あるを忘却する者に非ず。わが邦の科學界が比較的に長足の進歩をなせしは、翁の力を借りし者なしといはむや。十丈の銀濤空を排して日星を摩盪する大海の觀を爲しつゝ、深山巖罅の水一滴、その本を爲すに想到せざるもの、其愚や及ぶべからず。之を一言すれば、翁は誠に本邦科學界の開發者にして先導者たり。加ふるに老いて益す倦まず、學者にふさはしかるべき眞摯の態度は、稀に見るところ、高風清節、その人と爲りを想見せしむるに至りては、誰か欽尚の念を起さゞるものあらむや。令孫篤太郎氏、家學を受けて、曩に博士の學位を授けられ、一門の慶澤永く盡きず、朝廷特に破格の叙勳を爲し、男爵を授けられ、その功績を表せられしが如き、頗る其當を得たりといふべし。

福澤翁に至りては、世人遺德を追頌して、萬口一異辭あるを見ず。桃源洞裡鎖國の頑夢に耽りし懶惰の民を喚起し、人心內部の根本的刷新をなし、歐西思潮を疏導し、民權自由の思想を注入し、東海の君子國をして、

蹶然一起、僅々たる三十年間、駸々として文明の域に入り、今や列强と相並んで下らざるに至らしめしもの、四千餘萬の同胞、誰か翁に負ふ所なしといはむや。維新の前後、國事に奔走し、一廉の功を以て、今や衣冠の身、廟堂の上に翺翔するもの、盡く是れ一代の俊傑たるべきか。驥騏の馳するや、蠅蚋も千里を行き、蛟龍の躍るや、魚鼈も天に昇ることなきに非ず。少年血氣の壯なるにまかせて、譯もなく暴れめぐり、僥倖の極、こゝに至りし手合にありては、その本性見たらむこそ口惜かるべけれ。翁の如きは、少くとも一個の定見を以て、他を訓化せむとしたる者にして、西洋事情・世界國盡・學問のすゝめ・童蒙教草より以下、福澤全集に收めし書籍ども、今日に在りて鼻紙にすら値せずと雖も、當時民衆の之を歡迎せし狀は、飢渴の飲食に於ける如き者ありしや必せり。翁は或る意味に於ては、世に稀に見る文豪なりき。平易流暢、瑕瑾少く、婉曲にして善く人耳に入るは、益軒に比してなほ勝れるものあり。後生固より及ぶ者あらず。その

文章の如き今後いづくまでも中學下級程度の少年輩に授けられて確に不朽たるべし。

さばれ翁は固より學者に非ず唯だ大なる常識家なりき善く事象の大體を領會して玲瓏透徹その眞相を觀破せざるとあらず一部の福翁百話所論頗る淺薄深遠なる哲學的考察はその痕跡をだに存せず雖も盡く實際の經驗より出でし者にして天下凡庸の衆を敎化するに於ては却て他に勝るものあり。かく世渡りの方法を設示せしだけありて、その御本尊は流石に一片の仙骨を帶びす實に大俗の凝固體たりき學商の稱呼は確かにその一面を穿ちし者たるべし感化の大慶應義塾出す所の人物一としてその臭味を帶びざるは無く唯だ事務の爲にかけ廻はるべき所謂紳士輩に過ぎざるのみ獨立自尊の爲に錢神を卑まざるの風はやがて拜金宗の名號を稱するに至らしめ末輩の中には銅臭紛々として近づき難き者ありとさへいへり。かくの如き縱ひ翁の眞志

に非ずとするも、なほ五十歩にして百歩を論ずるに似ざらむや。翁は蓋し社界低級の實地的生活を爲すべき者を育成したりしのみ高遠なる理想を抱き峻潔なる道念を藏し社會の究極と人生の眞相とを闡明せむとする如きはその夢視せざりしところにして、その人格大はあり而して終に高き者あらざりし所以また此に外ならず。吾等は翁が布衣の尊を以て自ら居り軒冕の何者たるを知らざる如きは之を嘉すと雖も決してその人格を敬するを欲せず唯だその事業を錄せば足らむのみ。之を刻下の社會に見るに物質的潮流は大八洲の全部に流溢し民心の腐敗日に甚しきものあり是れ現世主義の餘弊を極めし者にして翁にして存するもさばかり物の役に立つべしとも覺えず。社會改良の爲に多少の規畫をなさむとせし傾向ありしは事實なりとするもその根本主義は性質上唯だ誤解を招くべき者にして愈よ濁波を揚ぐるに過ぎずいかで根柢よりして一國の民心を轉向せしむるを得む。知らずや藥、

瞑眩せずんば其病癒えざるを。翁の如き最も有躰にいへば功成り名遂げ、その逝去や恰も時を得たりし者、これも亦た多幸の人なり。

顧みれば吾等は今や人生的大旅行を爲さむとて初めて鹿島立せしもの、太行の山越えざるべからず、巫峽の水渡らざるべからず、まことに、これ等二翁にあやかりて行く末は多幸に且つ圓滿にありたき者なり。

古代史の解釋

あらゆる事象に摸倣の巧を得しを誇り顏なる吾が大和民族は、根本的に自己の手を以て、世界の文化に貢献するに足るべき一物を作らず。形而上方面に關する事項は、猶更言ふ迄もなく、かの宗教の本領、果して何者なるかをだに認知せず。古代史上に存する游離的事實、盡く是れ崑山の片玉にして、その解釋の如何は、多少の効果を收むるを得べく、少くとも、その宗教的分子の存在は、心靈的訓化の先天的もしくは摸型的形

像を與ふべき者なるに想到せざりしか如し。覇府時代所謂國學の氣運勃興せし時に方り幾分の研究を着けしものありと雖もそは唯だ事實上に關する者のみにして、高遠深邃なる抽象的議論は遂に之を見ること能はざりしなり。

古代史の解釋にして彰著なる効果を奏すべしといふは、他に非ず。余はヘルデルの言を記臆す、曰く、其處に存する礎石は、他の方法を以て爲し能はざる如くに据え付けられ、世紀なる者は相繼いで其上に建てられ、浮世の暴風雨は時に其上を摩掃することありと雖も、かの砂地荒寂の中に沈落せる三角塔の基礎と相似て、決して搖動することなく仍て猶ほ儼存し、すべての物は其上に穩坐する如く見らるゝ程、安泰なり、と。而してこの基礎に關しては、今日すでに細心精緻の研究を爲せる者の、殆んど滿足すべき斷定を與へし者あり。ロッチェは即ち其人にして、有名なる傑著「ミクロコスモス」の第三篇に於て、實に下の言を爲せるを見

るべし。曰く、舊約全書に誌るすところ、族長の事蹟の中には、確然たる一個の概念あり、以て耶教的國民に美なる風習を形成せしむ。かくの如きは、過去の理想化されたる勢力と、光彩自ら燦々然なる詩的表彰との、由て以て闡明するところにして、一定平易の生活形像として、無限永刧その後昆の回顧を促すもの是のみ。蓋し太古の茫邈は、この場合に於て寧ろ親しむべきものあり、依然として世界を包圍しつゝ、而かも人間生活に關する經營規畫は、容易に統率して概觀さるべく、その發展の徑路は、明かに之を尋踪すべく、以て人間の價値を領知せしむ」と。余は此に云々せし舊約全書に載するもの、果して何を指すかを尋ね、以て如上の言を玩味せさるべからず。

アラヽットの峻嶺高さ千仞、一水滔々として下り、やがてユーフラートの河を爲し、其流帶の如く、繚繞するところ、メソポタミアの高地あり、到る處芳草氈の如く、綠波を搖かし、獸畜放たれて群をなし、炊烟縷々として布帳相連れるもの、これアブラハムの故土に非ずや、其初長老輩が相謀りて群衆を導かむとするや、先づユーフラートの長流に沿ひ、西南に向ふて新居を求めむとし、ベテルの頌歌に見えしが如く、一旦遠く去つて、ナイル河の天惠をなすところ、地味の膏腹を以て誇るべき埃及の地に赴きしが、更にマムレを屈從せしめ、神園の稱あるヨルダンの牧地に社稷を定め、以てその同胞に授けしなり。而して廣莫の野に奪掠を事としたる一群は、やがて忠實なる僕隷となり、導かれて故土に達したる後、其見は大に父老に容れられて、婦を娶るを許され、東洋的生活の集合地といふべき清泉の源頭に上り、その新婦を艶裝誇耀せり。此の如きは純乎たる深遠の効果を常に新にすべきものにして、ゲーデか自記の中に、その童年の際、かゝる話說を聞いて、常に感動をなすを禁せず、直に邁往直前、乾剛の心を發揮し、勉學に進みたるを追懷し、「當初游牧の民の中に於てこそ、最大の幽寂と最大の社會とは存せしなれ」といふ一片の

佳句を寫せしもの、便ち其證となすべきに非ずや。

人、往々にして歐西の大文學者が熱心なる聖書學者なりしを說き、之を以て現時わが邦の文士に望まむとする者あり。吾等は、必ずしも文身斷髮の越人を以て自ら屈するものに非ざれども、洋の東西に隔離し、自ら國家性發達の歷史を異にしたるものに在りては、假りて數歩を讓り、章甫の冠たとひ美なりといふと雖も、なほ以て用ふるに足る者あらざるなり。余は自國の古代史中に於て、略ぼ之と對比すべき事象の存在を探究し、その意義を解釋し、以て社會的敎育の基礎を作らむことを囑望するのみ。

自負心は國民の通有性にして、不偏不黨、公平の判斷は、望むに易からずと雖も、余は復た我邦に傳存する神話を以て、さばかり價値なき者と斷定せず。試におもへ、久方の天鈿女が高天原の八百萬神と笑ひに笑ふて、歌舞歡樂の聲、天地を震盪したりといふ如き素盞嗚尊が青山を枯山

の如く泣きからし、河海を悉く泣き乾せしといふが如き、一は快活にして、一は鬱憂なり。その間、變化曲折の妙、全く之なしといふを得ず。純然たる悲劇的方面は、下照姫の哭聲と天津國玉の愁嘆とに見るべく、消長二大動力の衝突を具躰的に表象せし善惡二神の爭は、「射惡神之矢」に在り。伊弉冊尊が軻遇突智を生み玉ひしとき、灼かれて神さりましきといふは、四大の一たる火神の猛烈を畏れたるものと爲すべく、他に最も美しきは名さへ床しき木花開耶姫の戀愛の物語をさへ傳へたることなり。國家的性情の發展は、是に於て見るべく、社會的心象の表示は、劃然として自ら明かなる者なしと言はず。更に下りて口碑（トラヂション）の時代に入るも、神武の建國より武尊の東征に及び、やがて正確なる歷史の起始となすべしと思はるゝ神后征韓の頃に至るまで、今に傳ふる幾條の史的事實斷片は、頗る活動的精神に滿ちたる國民の氣風を示すに非ずや。その特色を認知して、その移植と納受とに全力を注がむもの、吾、之を尋常一樣、重箱

の隅々楊子にてほじくる如き似而非考證を爲して得々たる所謂歴史家に望む能はず宜しく燃犀の眼光善く紙背を穿ち明截にして巧妙なる論理的頭腦を以て歸納的に論究すべきなり。

文士品性問題

名を聞くだに頗るおどろくしき「文壇照魔鏡」の第一卷「與謝野鐵幹」といふ世に奇怪極まれる刊行物の價値は、姑く言はず。唯だ之を文士品性問題に關する早晨の雞聲となすは、亦た可ならずと爲さず。而かも、この問題に就いては、世上の評論家、案外にも雲烟過眼視し、絶えて諤々の言を爲せしものあるを見ず。豈に他に憚る所あるか、抑も亦た自ら心に疚しきものあるが爲か。こゝに於てか、余は同學の先輩畔柳芥舟氏が帝國文學第四號に於て其說を述べられしを喜ぶ。その言たるや、周匝細密、頗る觀るべきものありと雖も、獨り書きぶりの一點に至りては、如何にも蕪雜澁晦を極め、その切れ味の惡るきこと、譬へば刄のつぶれし小刀にて、鰹節をけづるに髣髴たるものあり。かくの如くして、折角の議論も、世人の視聽を聳動するに足らざるを懼る。そは兎まれ角まれ、余をして之に對する私見を述ぶるを許さしめば、乃ち敢て言はむ。該博なる學識を傾注せし氏が所論は、縱ひ理の眞を得たるものなるにもせよ、之を現時の吾が文壇に捧げ來り毫も忌憚する所なきに至りては、或は背社會的評論に失するの弊なきか、と。

「われ素よりノルダウの過激なる斷論を贊するものに非ずと雖も、リヴォオの第一學說として揭げたる、作物の美的優秀は、作家が心身の不健全と相俟つにあらずやと想はしむること數々なり。詩文界に於て、最終階段とも謂ふべき人間が游戲衝動の滿足を買ひ得なば、個人として詩人文士が陷り易き或種の道德には、世人は或る程度まで之を堪忍すべき理因なからずや」といへる氏の言、謹て之を領す。なる程、詩人文士た

るもの、社會に對して多少の貢獻をなせし以上、功罪相贖ふに足るべく、且つや行爲と作物との間に根本的必至的關係なしといはば、夫れ迄の事なれど、こは消極的辯護の辭にして、積極的勸奬の言に非ざると、贅するを要せず。善と美とは、固より畛域を異にし、道德は必ずしも詩文界を管轄支配すべきに非ざること、余亦た之を知る。然れども、詩人文士の天職ほ、人生宇宙の奧底に潛藏するところの秘密隱微を闡明し、一片の福音を垂るゝものたる以上は、縱ひ人を以て言を廢せず、狂夫の言、聖人は猶ほ擇ぶと雖も、彼にして非常の失德ならむには、坊主乃ち累を袈裟に及ぼし、さしもの黃絹幼婦、猶ほ且つ頗る人意に慊焉たるものあらしめむとす。失德の詩人は、世にも不幸の者といふべきのみ、是に於てか、行爲圓滿なる詩人は、少くとも余輩の理想たり、苟くも失德の詩人ならでは、優秀の作品を出だす能はずといふ理窟の先づ〳〵無かるべき如く推察せらるゝ以上は、この理想亦た必ずしも實現され難しと言ふを得ず。

加ふるに余は一個の私見を以てして、行爲と作品との間に、根本的必至的關係の絕無を斷言するを欲せず。歐西の屁ッ鉾美學者の手合は何といひしか、余未だ之を知らず。余はすべて藝術的製作と名づくべきものゝ上に、所謂氣韻てふ者の存在せるを確信す。而して氣韻はその人の性格行爲に對し、幾微の間に於て、緊密の關係存する如く思はるゝなり。蓋し氣韻の他に對するや、唯だ直覺的作用を爲すものにして、愼密周到なる美學的批判の前に來るを常とするが如し。故に必ずしも技工的手腕の巧拙と相關せず、最も早い話が、陶淵明の詩の如き、今存するもの百餘首にして、佳句は僅に指を屈すべき程なれど、その善く百代の後に儼存し、一誦三嘆、人をして六塵を隔離し、七情を洗滌するの感あらしむもの、誰か之を氣韻の爲ならずといはむや。凡そ氣韻なる者は、神解すべくして言解すべからずと雖も、從來支那の美論家（詩話畫論の著者を併稱す）頗る解說するところあり、而かも歐西學者の甚だ知悉せざるところ、こ

れが科學的論究を完成するは固より易事に非すと雖も余は之を閑却するを欲せず。艶たる花必ず其憑るところ朽木たるか生木たるか」を檢すべし作り物ならば香氣なからむ。美たる詩文」その憑るところ敗德詩人たると高德詩人たるとを論ずべし氣韻自ら異なるものあるを疑はず。故に文學の研究をなすもの必ず作家の行爲を檢覈し、これより進んで歸納的に內部的攷察をなし、豫めその作品の氣韻の如何を豫察し、而かる後に美學的方面の評價を下すを以て便宜となさむのみ。こゝに於て文學者の傳記調査は文學の研究に缺くべからざる材料を供給するを疑はず、若し然らざるに於ては、かの文學史中に作家の傳を附記する如き、誠に蛇足に過ぎざるべく、また古より蓄積したる詩人文士の傳記の如き、さばかりの効果なき無用の著述に過きずなり行き、爲に一半の價値を減却せむ。何は兎もあれ、詩人なりとて、失行あらば、皷を鳴して攻むるを可とせむ。如上の言、或は居然として頑迷なる漢學者の僻見なるかも知らず、詩文學系統をさへ組織し玉はむとする芥舟氏は、必ずや余が蒙を啓くに足るべき卓論妙說あらむ、願くは與かり聞くを得て、更に愼密なる研究を爲さむ。

飜て想ふ、現時の道德に違反する者は、すべて失行なり。詩人文士に失行の少からざりしは、特にゲーテ、バイロン、シェレーを引くに及ばず。從來多くの場合に、然るものあり。但し詩人文士は、どこまでも美の靈界に遊ぶ者なれば、その失行たるや、固より道德の規矩に合はずと雖も、なほ美的分子を包含するを常とし、その多くは無意識に出で、熱したる極の戀愛の餘波なり。故に、詩人の失行、假りに一歩を讓りて、その寬恕を爲すべきに際しても、十分にその性質を吟味せざるべからず。芥舟氏が「個人として詩人文士が陷り易き或種の道德」といはれしもの、如上の意義ならば、特に云々すべきまでもなけれど、或種とは餘りに空漠なり。之を現時の吾邦に見るに、詩人文士の失行は、常に銅臭を帶び、往々にして奸

策陰謀をめぐらすに至る者さへあり、かくの如きは到底寛恕すべき者に非ず。今の時に方りて超絶的評論を爲し、社會國家の何者たるを念頭に置かざる如きは、余遂にその可なる所以を知らず。さなきだに、民風日に輕佻浮薄に流れ、人に信仰なく、元氣の消耗、殆んど免れざるが上に、列强爪牙を磨して邊を窺ふものあり。二十世紀の劈頭、國威を海外に宣揚せむと欲せば、根本的刷新を爲さざるべからず。百の沙翁、千のゲーテよりも、半個のルーテル、一人のペスタロッチーの出でむことを欲する今日、詩人の失行だけは先づ大日に見ろなど言はば、理窟は兎に角、それこそ大變、結果に於て寒心すべきものなきを保せず。先づ餘りひどく無き處で、色生白き東家の青年文士、放蕩して、親父に叱かられ、忽ち「家を去る歌」を作り、髪コスメチックにて堅めし西家の似而非詩人、藝者に肱鐵砲を食らひ、失戀を三十一字に列らべ、赤インキにてハンケチに書くなどの珍事頻々として起りなば、決して國家の吉兆には非ざるべし。君子の

一言、愼むべきは言ふまでもなけれど、社會の思潮、猶ほ確然たる趨向を取らず、搖蕩沸涌、姑らくも歇まざる時に方りては、評論家たる者、少しく自ら屈し、萬事に相對的にして事運の轉向する所に着目し、十分の注意を以て、言論の責を負ふべく、縱ひ眞理なりとも、途轍もなき背社會的評論は、周廟の金人を學び、口を緘するこそ宜けれ。世の常の青年雜誌に筆を執る者は、この注意殊に肝要と爲すべし。

文壇に於ける制裁

かの敎訓的旨意を標榜し、人倫を厚くし、風俗を移すを以て、文學の本領と爲せしは、三千年前、東洋思想の舊夢に過ぎざると、事新しく述ぶるを要せず。そも文學は自ら絶對的價値を存する故を以て、固より他の道德に隷屬すべきに非ず、兩者の畛域、自ら異なる者あるは、理の當に然るべきところ、さばれ、到底人と相離れざる以上は、文學が廣義の道德に循

從すべきは、亦た自ら明なるべし。故に詩人は之を如何にするも、道念を缺くべからず、四海の波を翻すも其惡を瀚ふに足らざる大罪を犯せし者、未だ詩人の中より出でしを聞かず、否、聞くべからざる筈なり。加ふるに、文筆の練達は多少「自我の沒却」を爲し得るならむと雖も、個性の片影は、必ず楮墨の間に隱見するを免れず。彼の最も單純なる素人考へを持し、Art for art's sake として、詩人を評量せむとするもの、吾未だ其可なる所以を知らず、心理學方面よりして人格を攷察するの一事、美學的方面より論究したる作品の批判と必ず相待つべきもの、便ち亦た此故のみ現時のわが社會に在りては、新舊兩思潮の調和、未だ十分に成らざる故を以て、缺陷弊竇、僕を易ふるも盡きず。而して痛哭流涕長太息すべきは、一代の文柄、細人纖豎の掌握に歸せしこと是のみ。今の文士は、なほ昔時戲作者の氣質を剩し存したるが上に、更に過ぎたるものあり。多くは是れ、羽織ごろの一種のみ、彼輩のなす所、虛名を成し易き、幼稚なる現時の

文壇に、多少の聲譽を博し得たるが、抑もの初にて、無禮にも傲然、早く自ら標置し、鄙俗野卑の文字を弄して、無智の世俗に媚び、識者をして眉をひそめ、嘔吐一斛ならしめむとするを厭はず。そのやゝ高しとする者に在りても、主義なく、操守なく、黃白の爲には容易にその持說をすら變じ、銅臭紛々、人をして覺えず辟易せしむ。而かも怨牛黨、李、翻雲覆雨、妬忌構陷、これ事とする如きは、誠に文壇の神聖を如何むと絕叫するに至らしめむとす。かくの如きは姑らく之を措き、最も笑ふべく、最も惡むべきは、天才を以て自任する一輩に在り。古よりの大天才、動もすれば尋常規矩の外に逸出し、時に多少の失行ありしも猶ほ且つ後世に寬恕せらるゝを見、之を口實として、ありとある不道德の行爲をなすに怯ならず、御話にもなり兼ぬるとは、即ち此事にして、その非理無法は言ふまでもなく他をうまゝ瞞過せむとするづうゝしき賊心に至りては、車裂城旦の刑を加ふるも、何ぞ足れりとなさむ。今夫れ、涇は渭を以て猶ほ濁る、こ

の輩のしれ者にして、跳梁跋扈しつゝある間、文士の氣品、見るに足る者あるべき謂なく、偉大穩健、清新娟秀の文字を求めむとする、鬼々しき刺ある蒺藜の枝に縁りて、葡萄の紫の珠を求めむるに似るなくむば幸のみ。嗚呼、亦た何ぞ言を爲すに足らむや。

側面的、もしくは裏面的觀察を爲し、社會の醜惡を暴露するは、現時の流行なり、蓋し人心は常に僻める者にして、人の美をなすよりも他の惡を聞くを樂しむに因るが故ならむと雖も、現時の社會、正に腐敗の極點に達し、刷新を要するもの頗る多きと、その主要なる原因たらずむばあらず。世に所謂赤新聞が、勉めて這般の消息を傳へしは、今更いはず。近ごろ「文壇照魔鏡」「新聞社の裏面」等の諸書、刊行せられし者、亦たこの氣運に乘せし者ならむ。人は謂ふ、從來この種の方面に筆墨を弄する者の中には、唯だ他の秘事を發き、誇張敷衍、針小棒大と出かけ、以て己の利を謀らむとする者、亦た少からず、と。或は然らむ。さばれ、實際憤世の念、抑遏すべ

からず、之を假りて規戒を垂れむとする誠衷より出でしものならむには、毫も累と爲すに足らず、亦た大に推奬すべきなり。見よや、革命は必ず鮮血を以て買はれしことを。二十世紀の島帝國に新文學を樹立せしめむとするに際し、區々たる似而非文士の二三人、縱ひまかり眞違て敵きつぶした所で、爲に一道生新の氣を增し、文士の品格を高むるを得ば、乘除の結果、さしたる損失もなかるべく、況んや制裁は社會の秩序を維持すべき唯一の大勢力たるに於てをや。余はかの廓清會と稱する一團體が、如上の精神を以て、飽くまで獻身的に從事されむことを切望せざるを得ず。若し不幸にして、或人の疑惑その儘の者なりせば、暴を以て暴に代へ、其非を知らざるもの、嗟乎我安かに適歸せむ。

鐵幹に與ふ

一、犬虛に吠えて萬犬之に和す、滔々たる世上の陋習、今更言ふを待た

ず。加ふるに、他人の事としいへとば、善を彰はすよりも、惡をさらけ出すを以て、常とする者多きなれば、文壇照魔鏡の一書、上木の後、詩人鐵幹攻撃の聲、ゆくりなくも到る處に聞えしもの固より其所なり。然れども、その大多數は、漫然かの書を信じ、雷同附和を爲せしに過ぎず。余は、尋常操觚者の見地頗る淺薄にして、最も忌はしき人身攻撃をもさばかりとは覺えず、譯も知らずに、面白がりて、騷ぎ立て、神聖なる文壇をして一種の惡聲を反響せしめしを浩嘆せずむばあらず。凡そ今の世に缺く所は、沈重謹愼の態度にして、この弊、特に文筆を弄する手合の中に盛なるは、殆んど言を爲すに堪へざる者あり。かくの如くして、常に評家の任務を忘却したるの極、唯だ他を斥罵するを以て能事となす、其愚や實に及ぶべからず。

今夫れ、盡く書を信ずれば、書なきに若かず。況んや照魔鏡の如き者にありては、その性質上、如何に確實穩健なる宣言を冠したりとするも、最

も普通の場合、片言獄を斷ずる能はざる以上、直に信を推く能はざると、贅するを要せず。曩日の余は、所謂廓清會なる者が、實際憂世の志を存して之を爲したらむには、文壇の生氣を增す爲の一方便たるべき由を述べたりき。然れども、悲しむべし、余が囑望は、どうやら將に空しからむとするに似たる者あるを奈何む。道路傳ふ者あり、曰く、廓清會は、現實に於て存在せざる團體の空名にして、かの卷頭に署名せし數子も、亦た烏有子虛、亡是公の流に過ぎず、それはまだしもの事として、卷末にしるせし發行所の所在地なんどまで、全く假設的なりと。男兒の事を爲すや、日月照臨、上に在り、俯仰天地に愧ぢざるを能事とすべし。何を苦んでか、形を匿し、影を滅し、蹤跡を茫昧の中に葬り了らむとはしつる。若し如上の言にして、僞ならずとせば、廓清會なる者は、自ら欺く者にして、心術卑劣極まれる奴輩の寄合に外ならざるべく、文壇照魔鏡の一書も唯だつまらぬ何かの私怨に報ゐむ爲めに、御苦勞にも、結撰せし者に過きざるべく、

こゝに秋毫の價値を認むる能はずと云ふも、何の不可かあらむ。

世人皆欲殺吾意獨憐才といひ、文章憎命達、魑魅喜人過といふ、少陵の詩聖が李青蓮に與へし句、區々の鐵幹に比當せむは、蓋し頗る過ぎたる者あり、唯だ夫れ多少獨絶の才ある者、毀譽紛々、之に伴ふは世の常態のみ、古人曰ふ、文字一たび世に出でゝ、毀譽褒貶、喧々たるを得るは、これ大に福分ある人なり、と。鐵幹の如き、その文字より一轉して更に行爲に就いて、事々しき批難を蒙りたるもの、或は以て自ら福分ある人となすならむか。さばれ、烟の起るや、其下必ず火の燃ゆるあり、鐵幹にして、かばかり激烈なる批難を受けしを見れば、その十分の一を眞とするも、決して完人に非ざることは、容易に推測さるべきなり。余は鐵幹の才を認むるものゝ、その素行の缺點を聞くに及んでは、聊か爲に惜しむ意なき能はず加ふるに現時の和歌壇に於ける彼の存否が、幾許かの經重を爲すべきと思はるゝに於ては、猶ほ更の事なり。聞く鐵幹さきに某社を相手取り

て告訴しけるが、やがて、黑白を法廷に決したる後、更に一篇辯妄の言を世に發表せむとすと。これ、彼に取りて唯一の策なるべし。然れども、余は必ずしも之を聞くを願はず、何となれば、曾參人を殺すといひし如き根も葉もなきほんの一時の眞違と爲さむには、彼の失行、敗德餘りに條項の多ければなり。唯だ余が鐵幹の爲に謀る者、他に非ず、悔はあらゆる事の終にして、誠心より出でたる懺悔は、善く罪の幾分を消するに足るべし。前途なほ春秋に富める鐵幹の一身、絶望して放縱自ら恣にする小丈夫の行爲を學ぶことなく、翻然改悟の後、飽くまで清廉の生活をなし、自ら詩神の壇前に淨化し、更に幾許の蘊蓄を積み、和歌の革新にその後半生を委ぬるの大勇猛心を起し、之を成就することあらむには、獨り其身の爲のみならず、亦た以て文壇の慶となすに足らずといはむや。

鐵幹對新聲社

新聲第五卷第五號載するところ誹譏事件顚末と、明星第十二號掲くるところ鐵幹が魔書文壇照魔鏡に就ての一篇とを對照精讀し、言外の意義を推及するの勞を取らば、裏面の眞相、少なくもその一半を默會し得たる心地せずむばあらず。

鐵幹の文、頂天立地、清白無垢なる大丈夫が辯解の言としては、餘りに氣焔なかりき。滔々數千言、その歸着するところ、唯だ吾を知れる某々諸氏に問へば、余が性行、自ら領解さるべかりしをといふに過ぎざるに至りては、誰か啞然たらざるものぞ。三尺の童子、至て無智なり、而かも恐らくはかゝる無意義なる言を爲すこと無かるべし。余は鐵幹が多少血迷ひしに似たる者あるを悲む。

新聲社の一記者が文壇照魔鏡を讀て江湖に愬ふの一文は實にこの事件の張本となりし者なり。聞くところに因れば、この記者の如き、鐵幹と淺からざる關係ありしもの、由。若し然らむには、照魔鏡に記するところ全く事實にして鐵幹たるもの、さばかりの大惡人たりとするも、かくまで義人面我は顏に澄まし、窮鳥を彈射して快と稱すべからざる筈なり。古しへ謂はずや「士の交を絶つや、惡聲を出さず」と。彼れ記者の如きは、斷じて有道の君子に非す、陋なるかな。

鐵幹が新聲社を告訴せし理由、單に「近時の似而非文士を警戒する爲めならば、唯だ御苦勞と云ふの外なし。本を惜いて末を論ず、何ぞ謬れるの甚しき。新聲社の連中、だとひ法廷に勝を制せしにもせよ、俄に大得意となり、その顚末を陽錄にまで仕立て、世に賣らむとするに至りては、また何ぞ利を重んずるの甚しき。

之を要するに、兩者ともに非。文壇の德義、日に廢弛し、群醜跳梁す。廓清刷新、河清の日を待つに似たるもの無くむば、蓋し幸のみ。

品致ある罵倒

かの太陽を見ずや、雲狀をなして光線を回射する所謂光團なるものは、外部の薄層にして、中團は直徑三分の二の範圍を占め、混沌の氣體を以て充たさるゝなり。外に光明あり、內暗黑なるは、地上見るところ萬種事物共通の狀態なり、美は飽まで發揮すべく、醜は或る程度まで掩蔽すべし。眞い物に蓋するとは、蓋し此謂なり。

探偵的態度を取り、社會內部の缺點弊竇をさらけ出し、勉めて人の好奇心を刺衝せむとするは、最も厭ふべき刻下の風潮なり。さばれ、缺點弊竇長しへに全く掩蔽したらむには、世に改善進步なからむ。故に之を汎言すれば、確固たる志操と、超邁なる識力とを有する人にして、初めて這種の論議をなすを得るなり。之を呼んで社會の警醒者といふ。

その非を責めて、急聲疾呼、且つ毫も假借する所なきもの、之を罵倒といふ。警醒者を以て自ら任ずるもの、憤激の餘、時に之を爲す、自ら避くる能はざるところ、何ぞ累となすに足らむ。唯た人の過を改むや、叱からるゝ時よりも、煽てらるゝ時に方りて、却つて見るべきものあり。さしもの罵倒にして、實際上あまり効果なきは、是故のみ。

均しく罵倒と雖も、宜しく品致あるべし、正面よりせずして側面より、內の剛を裝ふに、外の婉を以てす。之を上乘と爲す。むかし周滑平が妙々奇談に於ける諷罵の筆は、大に見るべき者ありき。近時の文壇照魔鏡の如く、いたづらに直截快利を旨とするに比して、品致高きこと、一等なるを疑はず。而してその摸擬の名殘は、風雲集に收めし青々園が「立川焉馬、依田學海を叱す」外一篇に於て、見るべきのみ。余はこゝに「何事もふるき世のみぞ慕はしき」の感に堪へざるを奈かむ。

怒罵と嘲笑

自ら下りて他の相手となる時に方りて、怒罵あり。眼中人なき時に於て、初めて嘲笑あり。嘲笑は對他的態度の最高威嚴を極盡せるものなり。

怒罵の爲に過を改むるは、畏れて然るのみ。嘲笑の爲に非を悔ゆるは愧ちて然るなり。之を結果の上より見るとき、怒罵の及ぼすものは尙ほ外面的なり嘲笑の爲すところは內部的なり。

怒罵は、同等の者にして之を能くせむ。嘲笑は、一層すぐれたる能力を有する者に非されば能はず。要は人を威服せしむるにあれはなり。

かつて清客章枚叔と語りしとあり、枚叔曰く、老子は莊子に比して、幾分奸譎の處あり、と。余はじめ之を疑ひしも、今にして其眞に近きを悟りぬ。蓋し莊子は、縱論橫議、毫も假借するところ無しと雖も、腹心の底は、却つて洒然として餘滓を存せず。老子は、言簡なりと雖も、仔細に觀來れば、冷辣人を刺さむとする者なきに非ず。鄙語にいふ、怒る者は處し易く、笑ふ者は測られず、と。莊子は怒罵、老子は嘲笑、後者の前者より高きは、當さに其所といふべきのみ。

怒罵は何人も之を能くす、そんじよそこらの青年雜誌を見ても知るべし。嘲笑は學び難し、之を眞似せば、その醜、鄰女の顰に比して、更に甚しと爲す。勝海舟の如き、時に之を爲せしが、未ださばかりの者たる能はず而かも、此人今や亡し。

眞個嘲笑を能くする資格ある者にして、社會百年の計を爲すに意あり、慈眼衆生を視るの仁あらば、渾然玲瓏、溫として春の如く、肅として秋の如く、能く六氣の辨に乘じて、その動くや、天地爲に震はむ、之を聖者といふ。

わが島帝國殆んど三千年の歷史を有し、未だ一人の聖者ありしを聞かず、嘆すべきかな。

乙羽を悼む

滿園の新綠影暗き窓に雨絲たそがれつゝ杜鵑一聲、腸將に斷たむとする夕、忽ち乙羽氏の訃者を傳ふるものあり、悵恨之に久うして、自ら禁

せず。

余が君と相識りしは、二年前の事にして、其後數回の面晤を爲せしのみ、交未だ深からず、猶ほ記す、今茲二月旬二の夜、事を以て余が居を訪はれ、偶ま外に出でゝ在らざりし故を以て、明日の會見を囑して去らる。その翌早天、使を馳せて余に告げて曰く、昨宵歸來、疾を得、臥して蓐にあり、癒ゆるを待つて、君と相見む、と。思ひきや、これ君が不起の疾の發兆にして、やがて三月の後、幽明すでに界を異にし、再び連榻快談の興を得るに由なくなりにけむとは。

樗牛・桂月の二氏、太平洋紙上に於て、すでに言ふ所あり、何ぞ復た余が蛇足を添へて、君が人物の價値を輕重するを要せむ。然れども試に一言すれば、君は今後事業の人として一世に雄飛すべかりしなり。西游一年、眼に歐西文物の盛を觀て歸來せし日、胸中規畫するところ、乃ち成竹ありしは、之を推知すること難しと爲さず。何事ぞ、皇天壽を假すに吝、未だ之を實施するに及はず、忽然として道山に歸る、悲しいかな。

多面的才子が短生涯、文筆の名殘は、人間一部の乙羽十種あるのみ。必ずしも君が本領に非ざりしならむと雖も、輕妙の筆致、なほ時に推稱を値する者あるを疑はず。すでに面を謀る能はずせめては之を以て世に在りし昔、瀟洒なりし君が風貌の俤をしのばむかな。

蘆花の近業

凡そ事を爲すや、その種類を問はず、黽勉之に從ひ、拮据經營、かつて怠らず、日に月に年に、駸々として幾段の進境を見るを要す。而かも是れ、區々の名を得て、小成に安んじ、夜郎自大の風を吹かし、傲然高く標置する者の、能くすべき所に非ざるなり。士別れて三日ならば、即ち當さに刮目して相待つべし、呉下の阿蒙にして、此言を爲す。知らずや、自ら大とするものは、是れ小とするの極なることを。余輩は、現時の文壇、濟々たる多士

克く終あるもの鮮きを嘆せずむはあらず。おもふに、儼然永續、長しへに聲名を墜さゞる者、必ずや、紛々たる毀譽褒貶の外に超然獨立し、絶えざる修養を積んで、自ら守るや確固たらざるべからず。紅葉露伴の如き、頃ろ、自ら社會に遠ざかり行く觀あり、活潑潑地なりし當年意氣、すでに全く沮喪せしを疑はしむる者なきに非ず。牛門の諸秀才、時に馱作を出すあり、以て僅にその健在を知るのみ。嗟乎、豎子遂に謀るに足らず。二十世紀わが新日本の文壇は、かくの如くして、將來の好氣運をトするに足るべき作品の一をだに出す能はず、依然として、蕭疎凄寂、冬枯の景色、その儘の中に在ること、誠に慨嘆に堪へざらむとするなり。

この間に在りて、德富蘆花の如き、確かに文壇に忠なる者の一人として推稱するに足らむか。コブデン、ブイトの傳紀を著はせし頃の彼は固より、さばかりの代物とも見えず、未だ世人の注視を惹くに及ばざりしが、後に清新瀟洒なる小品に筆に着くるに及び、漸く觀るべき者あり。自

然と人生の一書の如き、彼が一家獨特の美文として、觀察の細緻と叙述の周匝とは、到底、尋常操觚者の摸倣を許さゞる者あり。就中水國の秋の一篇の如きは、傑然として重きを今日に爲すに足るの筆致を認めしめき。而して蘆花の才藻筆力は、更に大なる局面に於て開展し、遂に不如歸を結撰するに及び、小說家としての令名、一朝にして高かりき。措辭の未熟は言ふに足らず、全體を貫通したる事象の起伏は、能く常套の類型以外に一歩を踏過し、悲劇的なる結局的構想は、極めて自然なる描寫と相待て、善く人をして一幅の痛涙を濺がしむるに足るものあり。之を呼んで、能事殆んど畢れりといふも、何の不可かあらむ。之に次いで、思出の記國民新聞紙上に連載されしが、頃ろ裝績美々しく成り、今や吾が机上に横はれり、請ふ之に就いて、多少の言を爲すを得むか。

落魄せる富家の一人息子、菊池愼太郎と呼ぶもの、伯父の厄介になり幼時鄕里の私立學校に通學しけるが、將に東京に游學せむとするに際

し、ゆくりなくも、伯父と衝突して、無謀にも家を飛び出し、樣々の憂目を忍び、或は金貸の小使となり、或は夜學會の英語敎師となり、程なく神戸の關西學院に入學し、なほも自活を續け居たりしが、後また或る事情の爲に出奔して東京に上り、新聞配達となり、幸にも舊師に解近し、その眷顧保護を受け、遂に大學に入り、やがて三年の業を卒へて文學士となり、鸞鳳の佳耦を得て、共棲の樂を成すに至る、大體の趣向は、かくの如くして、特に奇拔斬新の個所を認めずと雖も、ろの間に錯綜交絡したる種種の事象は、波瀾曲折の妙を極め、平板庸熟に陷るの弊を避けしめ、その主人公が師友に對する厚情の如き、確かに道義の精神を發揮したる者といふべく、漸く結末に近づくに及んで、可憐の淑女お敏に對する戀愛を描きたるところなど、至醇至粹、決して世にありふれたる汚穢の情事と相似ず、無限の情趣、風神絶えむと欲するを疑ふものあり。之を文體の上より見るに、圓熟平滑なる言文一致を以てし、時に敷張に過ぎたる處

なきに非ざるも特に秀句警語を着けて、一掉その勢を振起せしめむとしたる、流石に文に老いたりと思はるゝ所もあり。未だ絶品と稱するに足らざるも、現時の文壇に在りては、多少の光彩を發越したる者といはざるべからず。

思出の記一卷、蓋し著者が試に、理想の書生を寫し上ぼせし者と見るべし。或は、惡風頽俗、日に甚しからむとする書生社會の現狀に憤激する所ありて、然る者に非ざる無きを保せず。そも敎訓的旨意の有無は、固より文學の價値を輕重するに足らずと雖も、好んで暗黑醜惡なる社會の裏面にのみ注意し、事象の經過に出來る丈の細工を加へ、讀者の心想を刺衝するを勉むる如き、亦た決して褒めた話に非ず、此篇の如き進歩したる讀書眼を有する者に對しては、或は時にさばかりの鑑賞贊嘆を得ざるべしと雖も、花の如き少年男女が家庭の讀物としては、誠に屈强の者にして、從來この方面に於て多くの者を有せざりしわが文界は、宜しく

之を歡迎すべきなり。之を要するに、蘆花が想と筆と、次第に圓熟の境に至らむとするは誠に喜ぶべく、馬に倚りて待つべきもの、唯だ伊人の在るのみ。更に奮勵一番、不朽の大作を出さむこと、私かに囑望の至に堪へず。蘆花たるもの、幸に自愛して、願くは旃を勉めよ。

名を好むの愚

虛飾を好むは、一般人間に共通なる弱點なり。借金しても美服をきらびかして見度く、むづかしき鎗繰算段して避暑と出掛くる、世にありふれたる僞紳士輩は、之を呶々するを要せず、凡そ必ずしも其實なくして、唯だ巧に見せ懸け、一時を瞞着せむとする風は、愚劣の心情、畢竟名を好むより出づ。古しへ三十にして立つといふもの、その間に多少の閱歷を爲し、人生の辛酸を解知し、遂に一廉の見地を確立し、起居動作漸く節度あり、過不及なきに至るが爲なるべし。今夫れ少年時代は人生の花なり

然かも、牡丹許の如く大なりと雖も、一事を成さずして唯だ空枝たるに過ぎず、桑葉蠶をして絲を吐かしめ、棗花至小、實を結ぶに若かざる者あるを懼る。要するに、少年時代は人生修養の期にして、現實の世界に接觸し、不屈不撓の勇氣を皷舞し、生涯一日も離るべからざる現世の戰鬪を準備すべきなり。長繩は固より日を繫き難く、年華乍ち相促す、夙に起き夜に寢ね、黽勉之に從事し、なほ且つ其足らざるを憂ふべき筈なり。何の暇ありてか浮世の務すでに終りし樂隱居を眞似て、無用の閑事に貴重の時間を消費するの愚を爲すを得む。

さばれ、少年時代は又空想の時代なり。山の高きも一跳して登るべく、海の廣きも一擧して跨き得べしと誤信せるなり。萬事皆吾意の如くなる者と思惟せる極動もすれば、空拳を以て起たむとする突飛無謀の事をも成し兼ねざるなりこはあらゆる方面に於て固より然る者ありと雖も、文藝に於ては殊に甚しきものなり。蓋し普通に修學の次序を追ふ

者にありて、その學校行事の外、手を延ばすべきもの、唯だこの一途に限られしこと、固より主要の原因たるべしと雖も、文學者の聲名、比較的に世に流布し易きを見て、天分の有無に關せず、吾も一番と乘り出せしがやがて誤の本となるべき抑もの動機たること、殆んど疑ふべからざるなり。

その初、朝に桂園一枝の數頁を飜へし、夕に蕪村句集の一卷を讀み散らし、覺束なき口眞似でも出來れば、早くも歌人俳仙と成り澄ましたる心地し、三文雜誌の理草となりしを絶大の榮譽と心得、遂に必修の學藝を拋棄して顧みず。然れども憐むべし、小技なほ且つ神に通ずるを悟らず、その修習の方法正しきを得ざるを以ての故に、得るところ瓦礫ならざるは無く、いくら年數がかゝつても遂に物にならず。かくの如くして蚍蜉取らずの能なし猿となり、一生を埋木の花咲くことなくて過さずむばまだしもの幸のみ。凡そ事を易しとなす者は、その成功を見ること

稀なり、而して名を好むの鄙心劣情、之に加ふるあり。少年子弟、生半熟の才氣あるは、最も危險なる者の一にして、爲に終身の方向を誤るもの、その例世に尠からざるが如し、嘆すべきかな。

娯樂としての文藝

名を好むの愚は、知らず識らずの間に、其人を小ならしむ。實を修めずして名を唯だ求む、本末終始を誤るもの、いかで完全の發達を爲すを得むだとひ將來に於て、文學者たらむといふ確固たる志望あるものにもせよ、早く自ら標置して人にえらがるゝを欲すべからず、懼るゝところ苗にして秀でざるに在ればなり。況んや其他をや、最も普通に之を謂ふとき、世上の少年子弟は、娯樂の一として、文學を鑑賞すれば足れり。

今夫れ高尚なる精神的快樂を享受するに及はず、遂に走つて卑穢なる肉慾的快樂を追求するものは、不幸の人といふべきのみ。こゝに文學

は普遍的性質を有する者にして、精神の滿足を起さしめ、その樂や、至醇至粹、他に匹儔を認めず。哲學を以て唯一最高の學問となす勿れ。論理の形式に依據し智力活動の結果として得られたる者のみが世に眞理といふには非ず。靈妙なる直覺の作用は、しば〳〵同一の結果を生ぜしむることあり。沙翁の如き、ゲーテの如き、大詩人が得意の名句はかいなでの哲學者が數百頁の議論に比して、更に高遠の域に突入したる者あるに非ずや。是に於てか知るべし、身如何なる職業にあるにもせよ、文學を鑑賞し得べき趣味と解知力とを有するものは、常に無限の慰藉をこゝに求めて、心性の向上を爲さしむべく、かの氓の蚩々たるものに比して、確に多幸の人たるべきを。

悲しいかな、刹下の時代は、實に思想惑亂の世なり。東西の兩思潮は、未だ融和するに至らず、人は信仰に渴して、唯だ淺薄なる現世主義の爲に動くのみ。加ふるに上層社會に在るもの、本を洗へば、昔に於てすら無教育の野蠻人、所謂成り上り者の團體に外ならず。こゝに於てか淫靡の惡風、上より吹きやがて大八洲の全土を擧げて、醉生夢死の民たらしめむとす。この問、精神的生活を爲す者の多きを望むべけむや。國民趣味の向上は、現時の急務にして、今日の少年は反省相覺をなし、決して如上の害毒に感染すること無きを要す。人は快樂の爲に活く、唯だ精神的快樂を求めよ。而して諸種藝術の中に在りて、特に之を文學に求めよ。

少年雜誌の弊

人は文學熱の旺盛を稱すれども、實は猶ほ未だしきのみ。今日の新刊書籍の發賣部數四五千を越ゆる者、幾もあらず、最も廣く世に流布したる雜誌にして三四萬に上る者殆んど絶無なりといふを聞かば、四千餘萬の同胞中、文藝の趣味を解し、若くは解せむとするもの、頗る稀少にして、まことに九牛の一毛といふも不可なきを知らむ。文學熱や、固より旺

盛といふべからず。然れども漸く旺盛ならむとする傾向あるは、事實にして、一概して之を云へば、喜ぶべき現象たるを失はず。

一利あれば一害あり、あらゆる事物、然らざる者無しと雖も、弊のあるところは、飽くまで注意して討査をなし、之を矯正するを期せざるべからず。今日雨後の筍の如く簇生する雜誌の中に在りて下らなき少年雜誌が非常の景氣を以て迎へられ、利の在る所、何れも之に着目し、前後踵を接して增し行かむとする趨勢あるは、一寸考へ物たるに似たる者あり。他なし、不德と惡弊と、其中に潛藏して、一たび蓋を刎ぬれば人をして鼻を撮まゝしむる者無きを保せざればなり。

一口に少年雜誌といへど、自ら等級あり、さすがに知名の文士が監督の下にありて、材料を精撰し、年未だ志學に及ばざる垂髫の少年をして、毎日見飽きたる教科用書の外に目新らしき事柄を習ふを得せしめ、多少の新智識を領得せしむるを主眼とする者に在りては、特に其弊を認

めざるのみならず、一段の改善進歩を爲さむことを囑望せしむ。然れども、利をのみ射むと欲する無知の商賢が計畫に成れる者にありては、唯だ之を賣り付けて、己が財囊を肥さむと欲するのみ。故を以て、內容の如何なるべきかを問はず、唯だ名を好むの心を迎合せむを力む。中學文壇といへる雜誌の如き、その好適例にして、滿紙たゝ少年の手に成れる未熟の惡文を以て埋むるのみ、讀んだ處が、一の得るところあるべき筈なし。發行者は、一文の原稿料を拂ふを要せず、而かも隱然勢力を占め、賣行頗る善しと聞くに及んでは、殆んど言を爲すに堪へず。この種の雜誌、更に景氣を善くせむとして、あらゆる手段を盡くすを常とす。懸賞の如き、蓋し其一なり。

そも懸賞の事たるや、元と投稿者の勞に酬ゆるが爲にして、必ずしも批難すべき者に非ずと雖も、故らに高價なる物品もしくは多額の金圓を懸け、他の競爭心を喚起せしめ、むごくも少年輩が腦漿を耗せしめ、氣

根を勞せしむるに至りては、其弊また慘を極むといふべし。それも實際に於て賞品を贈與すればまだしも怨すべきなれども、中には種々の計策を廻らし、全く有名無實に終らしむるものあり。現に某社が當選者に對して賞品を贈らざりしとの怨言は、余かつて之れを耳にせしことあり。また當選者を自己が社中の人に定め、一錢も失ふところ無く、結局唯だ讀者の數を增すの一手段として、數は之を爲すもの、其例世に尠からずと聞けり。此他には、寄稿者の寫眞を石版摺として卷頭に掲ぐる者あり、一介無名の少年田舍書生をして、堂々たる大文豪となりし感を起さしめ、以て其心を眩惑する仕掛、隨分巧に出來たりといふべし。かくの如くして、現時世に流布する少年の雜誌中の或者は、全く益なくして害あるもの、余はその廢滅に歸せむことを翹望して止む能はざるなり。

上に述べしところは、之を發刊者の方面に限りたるものなれども、更に購讀者の方面に就いて、觀るところあらむか。さなきだに、名を好むの

愚を去る能はず、之に乘ぬるに、賞品に有り付かむとするさもしき慾を以てす。少年子弟當選の榮を得むと欲するに急なるもの、自己の思慮を苦しむも煩はしく、また碌なる者出來じとてやがてその天分を自覺するに至れば、他人の文章をぬすみ、或は古人の遺詠を引抜き、生呑活剝、一時選者の眼を瞞過すれば足れりと爲す。天下何ぞ馬鹿者多きや。こゝに又己が當選せざりしを怨りて、兎角他人の者にけちを付けたるが一群あり、御苦勞にも蚤取眼にて尋ね廻はり、その剽竊なることを確め、之を世に公布せむとす。兩者ともに非就中前者が賊心を包藏するに至りては、到底寛恕すべからざるなり。

他人の占有權を迫害するもの、すべて是れ盜なり。國家法律ありて、之を罰す。今夫れ物品を盜むも、金錢を盜むも、詩歌を盜むも、その動機と形跡とに至りては、秋毫の差異を認めず。純潔白紙の如く、飄動春色の如くなれる少年の頭腦をして、忌まはしき汚穢の暗翳を生ぜしむるに至り

ては、誰か寒心せざる者あらむ。少年雑誌弊の極まるところ、道義心を腐敗せしむるに在り、恐るべきかな。

わが論を以て酷と爲す勿れ。これ實際に於て、數ば見るところ、固より誇張敷衍その驗あるを欲する者に非ず。而かもかくの如き趨勢、今後愈よ盛なるべきを思ひ、一片憂懼の意なき能はず、知らずや、弊害は常に瑣細の處より起り、忽にして大となるべき者なるを、余が此言を爲す、固より徒爾ならざるなり。

赤門派の文士を評す

自家頭上の蠅を追ひ得ずして、好んで他を批議するもの、固より高人達士の事にあらざるべし。推奬贊嘆の言を爲せば諛ふに近く、排去擯斥の語を爲せば妬むに似たり。細人纖豎、乃ち口を此に藉り、或は朋黨比周と呼び、或は傲慢無禮と叱し、紛々たる聚訟の矢鏃、一身に蝟集し來るを

免れず。今の世に在りては、家を爲すもの、多くは局量狹小、規度卑劣、毫も他を容るゝ能はず、又己の位地を守るに專らなるを以て、乃ち然り。その愚や、實に憫笑すべきのみ。嗟乎、人皆以て自ら聖なりと爲す、誰か烏の雌雄を知らむ。苟くも物議を恐るゝものは、緘默を守りて、絶えて筆舌を動かさゞるに若かず。唯だ頑鈍機を知らざる、余の如き者にありては、妄念火の如く、自己一身に及ぼすべき累の如何を顧慮するに暇あらず、故に敢て他を罵倒することを爲す。才未だ足らず、識未だ高からざる爲に然るか。吾自ら之を知らず。知るところはずでに批判といひ、評論といふ情實問ふべきに非ず、利害關すべきに非ず、一人の私言より進んで天下の公論を定めむとするや、必ずかの自由境に逍遙すべきに在るの一事、是のみ。

熙朝奎運の盛、一藝に名あるもの、庸ひられざる無く、文筆を以て一時の令譽を得しもの、その數、何ぞ限らむ。就中赤門文士の一派、隱然として

一大勢力を有するは、事實の明かに證するところ、今必ずしも贅せず。そも大學は帝國最高の學府、此より出でしもの、固より文筆その者を以て本領と爲すに非ざれども、他に比して頗る重視され、是非褒貶、必ず之に係る所以の者、何ぞ理なしと爲さむ。余は今遍ねく現代の文士を評せむとするに際し、先づ筆をこゝに着くるの至當なるを知る。而して、その多くは、余と親交ある人、聊か憚る所なきに非ずと雖も、野性改むる能はず、直筆曲ぐる能はず。諸氏すでに重名あり、余にして如何なる論を爲すも、蚍蜉大樹を搖かすに過きざらむ。願くは余が狂を恕し、忌憚なき言を爲すを得せしめよ。而かも妙着の境、常に傍觀にあり、頗を以てせず規を以てするに際し、談言微中、若し幸に取るべきものあらば、天空海濶の雅量之を採納するに吝なる勿れ。

高山樗牛の太陽紙上に評論の筆を揮ふや、逍遙鷗外と對峙して、まことに一時の偉觀たりき。就中その最も題とすべきは、好個の題目を撰び

沈睡に陷り易き無氣力の文壇を警醒したるに在り。その論旨は、必ずしも掬思特見の存するに非ずと雖も、歐西學者の新說を捃摭して、之を現時の日本に適合せしめ、常に生新の思潮を弘布せむとしたるは、決して他の及ぶ能はざるところ、その功、決して沒すべからず。而して其文また頗る暢達、步武整々として紊れず、さしも勃窣理窟を極めし六つかしき議論も、一たび其筆を以てすれば多少の色澤を添へて、大に人耳に入り易きものあり、誠に才人の文たるに愧ちず。たとへば樂廣の清言、自然理に入るが如し。唯だ微に衒氣あるを嫌ふのみ。さばれ又時に散漫粗雜の弊、自ら免れ難き者あり、近時作るところ、殊に甚しく、絕えて精彩なし。知らず、是れ病苦の餘に出でたる爲か。前月の太陽載するところ姉崎嘲風に與ふる書の如き、曩に晩翠に與へしものにの比して、氣魄風骨、遠く相及ばず。かつて我袖の記一篇の神品を出したる餘技の詩筆も、今や强弩の餘勢を清見潟日記、清見寺の鐘聲に留めて、黃絹幼婦、遂に之を再びす

る能はず。かくの如くして、往年の生氣を回復するは、將に何の日に在らむとするか、まことに、心細きことの限といふべし。

健筆家を以て稱すべきもの。大町桂月あり。嗟乎天下の英雄、使君と操のみ。桂月雲州より還つて、すでに一年、依然として種々の方面に筆を着け、當代の文壇を賑はすと雖も、彼はもと美文家を以て推すべき者にして、到底評論家たるに適せず。その言ふところ、決して常識の外に出でず學淺くして、情に熱す、淺率平凡、固より其所といふべく、太陽載するところ敎育時評の如き、殊に然りと爲す。其文たるや、多少曲折廻旋の趣なきに非ざれど、概して快利、唯だ意の達するを主とする故に、格を取る未だ高からず、時に野卑の語を交ゆ、莊重典雅の品致は、彼の學んで能はさるところなり。然れども、その美文に至りては、善く雅俗を折衷し、和漢を混用し、一家の風調、自ら新奇なるものあり。唯だその手腕、割合に大ならざるを以て、長篇巨作に至りては、博漏未だ全く補苴するに及はず。黄菊白菊載するところ月譜、雨奇錄の如き小品文に於て、尤も其長を見る。だとへば、鯨肉一臠、能く萬人を飽かしむるが如し。鹽井雨江、武島羽衣の二人に至りては、其初桂月と相並んで、一時を風靡せしと雖も、氣魄夐かに下り、遂に相比するに及はず。二氏の文、擬古を主として、冗語紛々、その多きに堪へず。就中雨江最も甚しと爲す、蓋し漢語を驅使するの力なきに起因するならむか。譬へば、山村豪家の客に供する、連鼎の豐を極むと雖も、古樣の鹽鹹、時に入らざる如きのみ。

四五年前の反省雜誌に時評をものせし畔柳芥舟の筆は、猶ほ時に見るべき者あり。近時帝國文學の雜報に至りては、何ぞ下れるの甚しき。譬へば醉漢の爛語いたづらに呶々するが如く、老婆の絮言、ひとり煩々たる如く、人をして要領を得るに苦しましむ。苟くも明晰を缺くもの、すでに言を爲すに足らず。彼は正しく文章の第一義を誤りしものなり。久しく筆を執らざりしが爲に耋せるか、未だ文章の何者たるべきかを知

らずして此に至るものか。彼にして、筆その學に副はしめむと欲せば、今少し錬熟の工夫を積まざるべからず。――スペンサーの文體論、陳を以て棄てず、反覆熟讀、幸に餘師あるを得む。

笹川臨風の文、亦た其人の如く、たとへば、夏月の鱸魚、爽氣人を襲ふに似たり。然かく洒脫輕妙はあれども、重厚醇雅は未だし。之を以て論文に向へば、餘りに貫目なく、之を以て美文に向へば、また粗笨を免れず。元祿時世粧の如き、最も彼に適したる題目なり。然れども、猶ほ周匝細緻ならざるを病む。止むなくむば雨絲風片に收めし潮來十六島、臨水亭の如き僅々數千字の小品か。蓋し彼の筆を運ぶや、絶えて經營を爲さず、故を以て、仔細に檢點すれば、文脈支離ならざるもの少し。唯だ如上の小品に在りては、未だこの缺點を暴露するの餘地を存せざればなり。劍峰嶺雲鯉洋の諸人は、臨風とともに、往年の江湖文學紙上、氣焰を吐き立てし一連なり。劍峰の文、たとへば、劍俠の道に入りて、なほ殺機を餘すに似たる者

ありと雖も、觀來れば僅に老熟を以て勝を制するもの、時に村學究の氣風あるを免れず。嶺雲の文、大聲疾呼、壯士の騷くに似たり。唯だ意を用ひしは、ところの短文に至りては、終に復た往日の氣焰を見ず。一代の奇矯兒、すでに老い去れるか。鯉洋の如きは、吾、未だその言ふに足るべき巨篇に接せず。その器、また小なるに似たり。

名舖の乾菓、五色粲爛、咀嚼すれば味なし。之に似たるものを、上田敏の文と爲す。その美文たるや、案外に古臭きところあり、主として王朝時代の文脈を傳ふる者の如く、之を以て歐西近代の名篇を譯す、骫骳の病、終に之を去る能はず。その論文に至りては、婉曲の美なきに非ざれども、縱横歷落の活趣を缺けり。要するに、鷗外が當初の筆と相似て、且つ惡るく固まりしものに過ぎず。之を呼びて、神品といひ、名文と爲すは、吾が解せざるところ。恐らくは、表面上幽玄らしき處あるに眩せられて、雷同附加

無暗に擔き上ぐるに外ならざるべし。而して之を通天の神狐と爲さむには、才力未だ足らざるを覺ゆ。

土井晩翠の新體詩に於けるや、獨創の格調、優に一世を睥睨するに足る。然れども、その着想の大半は、歐詩より轉化し來りしものにして、自己の搆思に成りしもの、幾もあらず。彼は理の人にして、情の人に非ず。苟くも、絶大の文學は腦より出づるに非ずして、直に血より涌くものたるを知らば、彼の詩は、未だ至れる者と爲すを得ず。漢語を驅使するの力、彼の特長を推すべしと雖も、其源に溯り其本を窮めずして、踏用これ事とするが故に、時に誤あるを免れず。その內容に至りても、漸くに千篇一律に終らむとし、變化百出の境、到底望むべからざるに似たり。神秘無象五城樓下等の文字を除けば、剩すところ果して幾何ぞ。五花八陣の奇、局面の大はあらむ。細草幽花、猶ほ春を爲す。瑣細隱微の間、醇美を極むるもの、彼の筆を以て、遂に描彼する能はざるなり。

獨逸の輓近文學を論ずるもの、登張竹風あり。惜いかな、是も亦た、其筆未だ、其學に副はず。こゝに所謂輓近文學、即ち自然主義の旗幟は、滔々として歐洲の文壇を震撼しぬ」といへる如きは、現代名文の標本の爲すに足るべき價値あるを疑はず、近時は多少錬熟せるに似たりと雖も、なほ未だし。亂頭粗服、敢て大饗に臨むは、斷して禮を知る者の事に非ず。竹風たるもの、その專攻せる獨逸文學の如、意棒を揮り廻はし、現時の評論壇上に立たむと欲せば、今少し文章の力を養ひ、窮通開閉の機變を解知するを要す。

戸澤姑射、淺野馮虛の二氏の美文、均しく英文學の趣味に得たる者にして、文品また伯仲の間にあり。老錬の妙に於ては、馮虛遂に姑射に一籌を輸すべきも、貼張の工に於ては、姑射却つて馮虛に及ばず。姑射の文は、久早の名山、尙ほ空翠を流すが如く、馮虛の文は、半濁の溪流、飛沫僅かに白きが如し。二氏の文に病むところは、警句なく、一掉その勢を振起する

底の靈想巧思を缺くにあり。故を以て、動もすれば、平板淺庸の弊あり、近日見るところ、殊に然りと爲す。かくの如くして、往年の盛名を保つべしと爲すか。二子願くは旃を勉めよ。

はじめに藤村を擬し、後また時に晩翠を學び、共に未だ達せず、苗にして秀でざりしもの、大伴豐川あり。二三年前の帝國文學、殆んど毎號其作を載す、勉めたりと謂ふべし。然れども、悲しいかな、其勞を多とするものだに無かりき。その後、何處の隅にかくれけむ、近時杳として消息を聽かず、永く世俗と疎濶なるもの、果して修養に日を送りつゝ在りや、否や、聞かまほし。

余はこゝに、ゆくりなくも、評すに足るべき一人を忘れしに想及せり。國府犀東、これなり。犀東、文科の出に非ずと雖も、かつて籍を法科大學に置きしもの、これを赤門派に屬するものと爲すも、必ずしも不當の事に非ず。犀東の文、歩趨堂堂、手腕の大はあり、然れども好んで奇字險語を用ゆ。

内藤湖南、龍吹鶴語の首に題して「蜀棧を渉るが如く、楚峽を溯る如し」といひしが、世に重寶なるは御世辭なりと知るべし。東坡かつて揚子雲の文を稱して「艱深の詞を以て淺易の說を文る」といへり。この語、移して犀東の文を評すべし。然れども、鑿險追幽の餘、時に異境に逢ふ如きもの無きに非ず。その詩を作るや亦た然り。他に法科出身の文士として余は桐生悠々のありしを記憶す。未だ多く其文に接せざるの故を以て、こゝに論ぜず。唯だ一語、さばかりの者に非ずと爲すも、また大早計に非ざるべきを思ふのみ。

飯田龍泉の文、かつてその二三を見る。支那文學に關したる論文の如き、筆致未だ振はず。だとへば、長孺戇直、老に至りて益す堅きが如し。近時和文の調を交へしものに在りては、却つて卑淺の弊あるに似たり。

中内蝶二が文藝倶樂部紙上の時文、何ぞ見るに足らざるの甚しき。時に氣焰を吐いて見た處で、譬へば病馬の鬣を振うて、不平を鳴らす如き

のみ。ろの美文の如き、一應無難に言ひおほせたりと謂ふのみにて、未だ特色を發揮するに及ばず。精彩なく、氣魄なし。もう一つ譬を以てすれば、畫幅を臨摹する如く、遂に眞を失ふを免れず。

小日向是因・沼波瓊音・藤澤古雪の諸輩、近來諸方に書き散らすと雖も、未だ是れぞといふべき者を出す能はず。こゝに腹心を布いて、諸氏に詔ぐるところあらむか。曰く、愼重なれ、自ら許すなかれ、之に加ふるに語不驚人死不休底の努力を爲せ。赤門の奎星、近來日に寥落に赴き、尾して出づるもの、光芒漸く短からむとす。諸子何ぞ其れ奮はざると。

松村潮音、雋才愛すべし。而かも新體詩よりも、美文を佳とす。但し新文藝に載するところ、巖上のわれは、わが袖の記を學で、遠く及ばざるもの、未だ言ふに足らず。倚馬以て待つべきもの、唯だ吾子在るのみ。願くは、刻苦洗鍊を事とせよ。

或は、余に問ふ、君の文は如何、と。自家の妍醜、吾之を知る能はざる程の愚に非ず。飛流一たび決し、地を擇ばずして流るゝは、吾が文の長。老鶴庭に下り、擧止生硬なるは、吾が文の短。すでにこの中、書君に托して、以て命と爲す。今後いよ〳〵勉めて進境を見るを期せむかな。

我が所謂「美的生活」

性、それ疎懶なるか、身、ろれ疲倦せるか。いづれにしても、無氣力の誚を免れ難き刻下の文界は、正しく沈睡の中にあり。その生氣を回復し、再び爲すあるは、將に何の日にあらむとするか。創作や、評論や、必ずしも跡を絶ちしに非ず。葫蘆依樣、觀るに足るもの、幾もあらざるを如何む。不純粹なる諸種の瓦斯は、連りに蒸騰して、大氣中に充滿し、外界の景象、頗る暗濛を極め、氣壓の度、日に高からむとす。この時に方り、一大旋風を起し、滿天の積氛を驅り盡し、清涼一脈の滋味、余輩を蘇息せしむるもの、幸に其人ありや、否や。

太陽第七卷第九號載するところ、高山氏が美的生活を論ずの一篇は余輩が如上の囑望に對し、その幾分を滿たすに足るべきものなり。所謂大文字は、徒らに字數の多きと篇輻の長きとに關せずして、その內容の價値如何に在るべきは、何人も已に知了するところ、今復た贅せず。高山氏の文、僅に萬餘言に過ぎずと雖も、識見といひ、筆力といひ、自ら凡庸者流の所作と其撰を異にするものあり。況んや、議論の對象、人間生活の歸趣に在るに於てをや。時節柄、まことに大旱の雲霓といふべく、固より輕々看過すべきに非ず、苟くも評家を以て自任するものは、愼重なる學者的態度を以て、之に臨むべきなり。

試に吾と天地とを對比せむか、眇々たる五尺を以て、納々たる乾坤の間に介在す。滄海一粟の感、何人も之を去る能はず。この生は須臾にして、長江萬古盡きず。一たび轉じて、その終極たる死に想ひ到るとき、彭祖なほ且つ壽といふべく、有限を以て無窮を羨む、是に於てか、心膽自ら慄し

いつしか茫昧の裡に陷り、身邊白雲湧く。嗚呼この吾、果して何物ぞ、何處より來り、何處に去らむとするぞ。如何に淺薄なる學者と雖も、少しく思索を試むるに際しては、この疑問は必ず提起すべく、その解釋は、やがて萬種學問の考察に動機を與へずむばあらず。されば人生の研究は當に人間思想の第一義となすべく、認識之に由て成り、哲學之に由て立ち、天地も、宇宙も、之に由て幾許の意義を附與さるべきなり。希臘の昔、タレスより以後、こゝに幾千年、哲學者の輩出、屈指するに堪へず、種々相異なれる議論と體系とを提供せしと雖も、如上の問題に對し、常に多少接觸する所ありしは、明白なる事實にして、兼て必須なる要件たりしが故なるを疑はず。

現實的なる國民は、深奧なる思索反省を缺き、無意義に其生を送過するを常とする者なり。現時の、我が同胞は、不幸にして頗る之と似たるものあり。是に於てか、余は厭世となるべきまで、眞摯に社會を觀察したる

人の、匱少を嗟嘆したりき。高山氏の文は、即ち人生研究の一部、否、その主要なる極處に接觸したるものにして、頗る推重を値せり。余は此種の研究を奬勵し、更に延いて一般國民の氣風を刷新し、輕佻浮薄の俗を去り、眞摯誠實に向はしめむを望む心轉た切なるもの無くむばあらず。

余は高山氏の文に對し數回の精讀を爲すの時と力とを惜まざりき。氏の所論、之を概括すれば、全く左の數條に歸着するが如し。

(一)道德と知識とは、其の物自らに於て多く獨立の價値を有するに非ず。其の用は、吾人の本能の發動を調攝し、其の滿足を助成する所に存す。

(二)幸福とは本能の滿足、即ち是のみ。本能は、人性本然の要求にして、人性本然の要求を滿足せしむるもの茲に是を美的生活といふ。

(三)かゝる美的生活は、その價値や、既に絶對なり。イントリンシックなり。依る所なく、拘はる所なく渾然として理義の境を超脱す。是れ安心の宿る所、平和の居る所、生生存續の勢力を有して、宇宙發達の元氣の藏する所、人生至樂の境地、是れを外にして何處にか求むべき人は謂ふ、是れニイチェの學說より分出して、多少の潤色を加へしものなりと、而して余は、二千餘年前の支那に於て逸早く之と甚だ異ならざる學說を立てしものあるを記憶せり。莊子は、實に其人なりき。

駢拇に曰く、

夫屬其性乎仁義者、雖通如曾史、非吾所謂臧也。屬其性於五味、雖通如俞兒、非吾所謂臧也。屬其性乎五聲、雖通如師曠、非吾所謂聰也。屬其性乎五色、雖通如離朱、非吾所謂明也。吾所謂臧、非仁義之謂也、臧於其德而已矣。吾所謂臧者、非所謂仁義之謂也、任其性命之情而已矣。

在宥に曰く、

自三代以下者匈匈然、終以賞罰爲事、彼何暇安其性命之情哉。而且說明邪、是淫於色也。說聰邪、是淫於聲也。說仁邪、是亂於德也。說義邪、是悖於理

也。說禮邪、是相於技也。說樂邪、是相於淫也。說聖邪、是相於藝也。說知邪、是相於疵也。天下將安其性命之情、之八者、存可也、亡可也。天下將不安其性命之情、之八者乃始鬻卷愴囊而亂天下也、而天下乃始尊之惜之、甚矣天下之惑也。

繕性に曰く、

古之所謂得志者、非軒冕之謂也、謂其無以益其樂而已矣。今之所謂得志者、軒冕之謂也。軒冕在身、非性命也。物之儻來、寄也。寄之其來不可圉、其去不可止。故不爲軒冕肆志、不爲窮約趨俗。其樂彼與此同。由是觀之、雖樂未嘗不荒也。故曰、喪己於物、失性於俗者、謂之倒置之民。

かくの如き類、一部の莊子を貫通して、到る處に之を見るを得べく、余が鄙見を以てすれば、高山氏の所論は、決して斬新を以て許すに足らざるなり。それは兎まれ角まれ、高山氏、がその中心の所信を告白したる者たるや、疑なく、余は之を否定せざるのみならず、之を讀んで、聊か冥契する所

ありしを喜ぶなり。

然れども、余が僻性を恕し、試に妄言するを許さしめなば、乃ち敢て曰はむ。高山氏は、蓋し不完の論を爲せし者に非ざる無きか、と。是に於てか余が聊か禿筆を馳せ、高山氏が未だ論及せざりし方面に於て、自己の說を述べ、高敎に接し蒙を啓くを得むと欲す。余は可憐の痴者ならむのみ。山行一日、漸く將に夕ならむとして、某の村落に宿らむとしたる時、人は炊烟の上るを指して、彼處こそと敎へたり。而して余は更にいづれの路を取るべきかを問はむとする者に外ならず。我が所謂美的生活といへる揭題は、近刊哲學雜誌載するところ、井上(圓了)博士が宗敎上の大論文に倣ひたるものにして、必ずしも適合せず、自僭の誚、また甘んじて、之を受けむ。唯だ借りて、以て自己の眞面目なるを表示せむとしたるのみ。加ふるに、余は哲學的用語を知ること少きを以て、妄當を缺ける文字の續出するなきを保せず。讀者、辭を以て意を害せざれは可なり。

人生の目的、本能性の満足にあること、余すでに之を領せり。さばれ、かゝる満足は、如何にして求め得べきか。打出の小槌は、唯だ福神の手中にあるのみ、疑もなく、余輩は或種の勞力を費すを惜むべからず、余輩は何物を以て基礎となし、その進程を趁ふべきか。而して是れ、高山氏の閑却せしところに非ずや。聊か重複の嫌あれども、再び譬喩を以てせむか。富士登山の快を説くは可なり、而かも之を推奬せむとならば、少くとも、道の由るところを敎へざるべからず。

高山氏が美的生活を論じて、敢て是を推奬すと告白しながら、如何にして此に到達すべきかを説かざりしは、大に委曲周匝を缺きしのみならず、斷じて不親切を以て呼ぶべきなり。なほ例を數學に取らむか。二項式定理の第二證明法は、單にその正確なるを證して頗る簡明なれども余輩はこの公式を以て天上より落ち來りし者と思惟する能はざる以上、如何にして得られたりしか。換言すれば、その發明者たるニュートン

は、如何なる基礎的原理に本づきて、構成したるかを知らむと欲す。余はDas Was と共に Das Wie を究めずむは止むこと能はず、かくの如くして余が此に論ぜむとする疑問は、美的生活を遂げむが爲に、必要にして且つ十分なる基礎は、那邊に在りやといふに歸着すべきなり。

これを建築の上より觀て、埃及の三角塔は、まことに牢固其比を見ざるもの、さしもの炎風烈日を嘲りて、幾千年後の今日、依然として儼存しつゝあり。然れども、そは沙底に深く沈落して、据え付けられし一層牢固なる礎石の上に立つが爲のみ。所謂美的生活を指して、安心の宿る所、平和の居る所、人生至樂の境地是れを外にして何處にか求むべきと謂へる固より謬見に非さるべしと雖も、余はかゝる美的生活を遂げ得べき基礎の、早く已にかゝる性質を保有したるを信ずるを禁せず。否かゝる基礎ありてこそ、始めて生々存續の勢力を有して、宇宙發達の元氣の藏せらるゝ所と呼ぶを得べきなれ。

かゝる基礎は、果して何物ぞ。苟くも人性本然の要求を滿足せしめむとす、而して是れ種族的習慣なりといふ。然らば本然の要求は余輩が祖先の盡瘁を經て、必ず滿足せらるべき者たるを要す。何となれば若し到底不可能の性質を帶ぶる者ならむか、煩悶苦惱、遂に之を去る能はず、平和と安心と怡樂とを得るに由なければなり。今の時に方り、生きながら天に登るを企つる痴者あらむや、是に於てか余は斷言す、本然の要求は能力の範圍中に在るものに限るべく、個人が最大能力の自覺はやがて美的生活の端緒を開くものなりと。

能力は、人間活動の根本なり、余輩は、幸に後代に生れたるを以て、祖先が修錬して發達せしめたる能力を一般に傳へたると同時に、神より特に附與されたる個人的能力を有せり。故を以て個人的能力換言すれば、すべての能力の中、個性を成立するに足るべき、最大の者を自覺し、意識せざるべからず。かの天職を悟るといふも、畢じ來れば此に外ならず、而

して是は全く理義の境を脱出したるものにして、主として神秘的作用に本づく、余はかゝる作用を爲すべき主體に附するに靈慧の稱を以てせむ。かの知識より出でたる反省といひ向内的思索と呼ぶものは、要するに靈慧の發動を促進し、助成するに過ぎず。まことに靈慧は知識以上の者なり。かの偉人の傳記に有り勝ちなる奇異の事蹟は、主として此の靈慧發動の跡を具象化したるに過ぎざるべきなり。

これを東西の史乘に徵するに、かりそめにも俊傑を以て目せらるゝ人にして、自己の最大能力を意識せざる者は稀なり。クライブ然り、ワーレンスタイン然り、この二人一たびは始んど自殺せむとせしが、やがて自己の價値を覺り、蹶然手に唾して起てりき。ソクラテスは、デルフハイの神託を聞いて、その天職を悟了し、一生を擧げて雅典市民の腐敗を救濟せむを力め、慘禍身を喪ふを悔るざりき。釋迦は天上天下唯我獨尊といひ、孔子は天德を予に生すといひ、項羽の始皇帝を見るや、彼れ取て代

るべきなりといひ、諸葛亮は管仲樂毅を以て自ら任じ、李白は天生我材必有用といひ、區々の蘇老泉すら、天の與ふるもの、豈に偶然ならむやといひ、補木正成は後醍醐帝に對へて、陛下苟くも正成未だ死せずと聞かば、復た宸慮を勞する莫れといへり。かくの如き類一々擧ぐるに堪へず。

讀者は、かつて數ば史乘に於て、同一事例に逢着せしを記憶するならむ。他に、天才が多少矜尙の態度を帶ぶるを常としたるは、全くかゝる意識の表現に外ならず。

丹釀千斛、樽中に空しからず、金を炊き玉を饌し、高樓の上、醉うて佳妓を擁す、快は即ち快なり、而して余輩が、此種快樂の誘惑を拒斥する所以の者、ひとり道德に違背せむを恐れて然るに非ず、强盛なる意志の現存を意識して、別種の怡樂を享受すべければなり、すべての場合に於て、能力の意識は、すでに快樂を付與するもの、況んや、最大能力の意識に於てをや、そは獨り、人間が到達し得べき生活の基礎たるのみならず、安心立

命の存するところ、それ自らの中に於て廣濶なる樂地を拓くを得、人の恃むべく賴るべきもの之を惜いて何の求むべきあらむ。彼のすぐれたる劍客が虎穴龍潭に入るも、毫も恐怖せざるが如き、その好適例となすべきに非ずや。

野の鳥の好く舞ひ好く歌ふ所以のもの、飛ぶといふ能力の恃むべきを知りて然る無きを得むや。均しく鳥といふと雖も更に去て鷙鳥の一群を見よ、彼は翼あるもの中に優絕なる能力を有するを意識する者の如く、深沈逼らず、他を蔑視するの概あり。而して一たび翰を奮ふや、背に青天を負ひ、綠雲を劈いて盤舞するに非ずや。シルレルが「手套」の詩中に、獅子虎豹を形容したる數句は、强き者ほど從容の姿態あるを描破したる處に於て、價値の存するを見るべきなり。かの陳蔡の野に圍まれ、食はざること數日、從者病んで能く興る者なきに際し、弦歌輟まざりしもの、天、德を予に生ずといひし者と同一人に外ならざりしを見ば、思半ばに

過ぐるものあらむ。かくの如くして、自ら恃むものは、生死の間に處して善く晏然たるを得るなり。一たび關原に敗れて、身は囚人となりし後、可憐の石郎が擧止、如何に涼しく且つ美しかりしを見よ。彼は確かに自己の何者たるかを悟了したるものなり。而して是れ、小丈夫輩の與り如ることころに非ざるなり。世に憐れむべきは、最大能力を意識する能はざる者に外ならず。彼等は根なき浮草の昨日は東、今日は西と流れ行く如く、取り止めもなく覺束なき生活を斷送するなり。是に於てか、彼等は未來の希望なく、唯だ現在目前に於て快樂を得むことを勉む。而かも之を內に求めずして外に求むむ期するところは、萬一の僥倖のみ、現實主義の弊こゝに極まれりといふべく、やがて醉生夢死の止むを得ざるに至らずむば、蓋しもつけの幸のみ。彼等にして幸福を享受したりとするも、要するに空中の樓閣のみ、何ぞ能く生々存續の勢力あらむや。一言以て之を掩へば、生活に基礎なければなり。明日の觀念なくして、財布の底まで敲

くもの滔々たる天下、即ち是のみ。

能力は修錬さるべきものなり、之を社會發達の歷史に徵して、容易に明白なる確證を得べし。太古の人類、即ち吾人の祖先は、未だ十分に能力を解知せず、外界の爲に絕えざる攻擊を受くるを免れざりき。或は高樹の枝上に巢居し、或は湖心の杙上に住し、以て猛獸毒蛇の害を避けたりしが、今は自らあらゆる動物を征服すべき能力を意識して、因て萬物の靈長と稱するを得たりき。而して出來べくむば、あらゆる天然力にも抗敵せむと欲する念慮あり、萬種科學の研究は駸々として歩武を進めすべて現象の理因と勢力とを察如し、地震雷さへも、さばかり怖れずなりぬ。かくの如くして能力を意識し、且つ今後長しへに其度を高むべきを知るを以ての故にこゝに確固たる普遍的安心を得たるなり。今夫れ優勝劣敗といひ、適者生存といふは、生物進化の大法則にして、萬世に亘りて變せざるなり。されば天賦の最大能力を自覺して、之を修錬するは、自

然の理法に適合したる唯一の行動たるべく、かゝる基礎は絶對的價値を有する者といはざるべからず。以上人類一般に就いて言ひしものは、また之を個人に移して誤なかるべく、所謂人類は個人の集合體に命せし單なる名稱に過ぎざればなり。

能力の意識と修錬とは、人生の基礎なり。故に教育はこの方面に趨向する場合に限り、初めてその價値を認むべきのみ。余はペスタロッチーの教育説に就て、頗る取る所あらむとする者なり。曰く教育の目的は、人をして、そが自然に享け得たる天賦の本性を啓發せしむるにあり、而して、人には一定の勢力あり、外部の感動刺衝によりて、次第に發育す。かくて、この能力を進歩せしめ、人性を完成するは、畢竟各自の力によりて、他人の左右し得べきものに非ず、故に教育者の職務は、兒童が本具の力を以て、自己の性能を進歩せしめむとするに際し、之を妨害せむとする、外部の阻害を除去し、發達の便を圖るに外ならずと。用語の少く相異なる

者あるが爲に、未だ全く吾が所説と符合する能はざるとあるべしと雖も、大體に於て、背馳する所なかるべきを確信す。人の不幸、能力を修練する機會を缺くの一事を以て、その最たる者と爲さむかな。

古しへの學者は、堂々たる大諸侯の間に對し、下の答辭を呈するを敢てしたり。曰く、臣に三樂あり。凡そ天地の間生あるもの、何ぞ限らむ、而して萬物の靈となるを得たるは、一樂なり。古の聖賢と臂を一堂の上に把るを得たるは一樂なり。而して所謂樂の最も大なるものは、幸に卑賤に生れて侯家に生れざりしと是なりと。彼は、一般人間としての能力と自己本然の要求を滿足せしむべき能力との存在を認識し、其處に怡樂を發見したる外に、かゝる能力を修錬し得べき絶好の位地と機會とに逢着したるに對し、最大快樂を享受したりきかくの如きは、人間生活の基礎を、最も簡明に、最も適切に道破したるものにして、誠に千古不磨の確言と稱すべきに非ずや。

一般人間能力の意識は、繼續傳承の久しきや、殆んど一種先天的觀念の看をなし、人類の希望を起し、福履を增さしむ。之と同じく個人的最大能力の意識も、やがて亦た此くの如き形相を具ふるに至れば、愈よ牢固にして、決して搖動すべからざるなり。たとへば、群なす羊が牧童に導かれて、芳草天に連る廣莫の野に赴くが如くに、余輩の身は、この準先天的觀念の爲に推し進められつゝ、美的生活に向て歩を運ぶを得。その進行の道程を按ずるに、必ずしも、直髮の如き者に非ず、四分五岐、時に楊朱の嘆を爲すべき者さへあり。之に加ふるに、平夷砥の如きものならず、峻坂急流、處々にあり。かゝる場合に於て、如上の觀念なきもの却退せずむば、蓋し幸のみ。見よや、古來の偉人傑士、さては思想界の天才の如き、猜疑構陷、これ事とせる冷酷なる、社會に對し、百折屈せざる底の勇氣と自信とを以て、如何に目ざましき戰鬪を試みたりしか。かくの如きは、美的生活の第一歩の好模範を垂れしものにして、余輩は此に就いて學ぶところあ

るを要す。

知識といひ、道德といふもの、方便に過ぎざること言ふまでもなし。然れども、方便の缺くべからざるを知らば、その價値を、さばかり無視すること、誠に謂れなきことなり。道を行くものは、最も近くして最も安全なるものを取るべし。所謂方便は、目的を成就せむが爲に、出來得る限り、最簡最確の者たるべし。余は、かくの如き絶好の方便に想及せずして、倒行逆施の止むを得ざるに至りし者の罪を叱責するよりも、先にその痴愚を憐まずむばあらず。故を以て獄裏の鐵鎖に、その自由を束縛されし罪人を見るに際しては、その生活を爲すの方便の拙なりしを憐むを至當と爲さむのみ。自ら政治家たる能力を自覺して起ちし星亨は、頗る蹇となすに足る者ありしと雖も、憐れむべし、政治家の必ず取るべき方便の何者たるべきかを解せず、二十世紀の新社會に野蠻的手段を用ひ、血腥き慘澹の最後に、其身を滅したりき。なほ欲求する所ありし彼は未だ美

的生活に到達せずして、斃れしものに非ざる無きを得むや。知識道德は出來得べき範圍に於て常に巧に活用運施すべし。之を用ふるに足らずとして棄つる者は、その愚や實に及ぶべからず。美的生活を遂ぐる爲に知識道德に資するところ、決して尠少に非らざるべきなり。樵夫の斧に於ける漁者の鉤に於ける未だ價値を如何を云々せしを聞かず。彼等は之に由て以て命となせり。今の世、知識道德の價値を評量するもの、却て樵夫漁者に若かざる乎。

人は如何なる事を爲すに際しても最も完全なる方便を以てせざるべからず。かくの如くして僥倖を望むの卑劣なる態度を爲すこと無かるべし。未來の運命は豫め知るべからず、かくても猶ほ失敗すること無きを保せざれども爲に悔ゆるところ無かるべく、俯仰天地に對して耻ちざるを得べきなり。上方谷の火攻、諸葛亮は必ず其敵たる司馬懿父子を焚殺すべくありしが、その期するところに反きしは測らざるに猛雨

の降り來りたればなり。而かも孔明は、單に「事を謀るは人にあり、事を成すは天に在り、強ゆべからざるなり」といひしのみ。自己の一身に省みて、決して不滿足を感ずること無かりき。余はしば〳〵言ひし如く、目的とせる或る物に到達すべき進程の各點が、如何なる價値を有するかを判定せむとする者にして、完全なる方便を以て事を行ひ、不幸中道に斃れし者に對しても、之を苟くも視ず、天の冥寵を得て之を成就せし者と同一の價値を認むるのみならず、之を後者に比して、方便の更に勝れたる者あらむには、一層の尊敬を加べきなり。未だ知らず、彼の重きを目的成就の上にのみを置き、方便を輕視するものは、未成長の俊傑、夭折の天才に對して、如何なる價値の評量を爲さむとする乎。

余は少しく岐路に入りし感なきに非ず、されば猶ほ論すべき者多きに係はらず、こゝに如上の論を總括せむか。曰く、心靈の內部深奥の處に存する靈慧は、最大能力を意識せしめ、やがて先天的觀念の形相を爲す

本然の要求は、此に基礎を置き、以て必ず到達するを得べきなり、と。余の理想は他に非ず、最も確固なる基礎の上に立ち、最も完全なる方便を假り、絶えざる活動を以て無限の進程を趁はむとするに在り。今夫れ善く舞ふものは袖の長きを要し、多く買ふものは錢の多きを要す、萬事に基礎の缺くべからざるを知らば、余が此論の決して徒爾ならざる、何の疑ふ所あらむや。

「文學研究法」の序

かの陋劣甚しき肉體的慾望と伴ひたる物質的傾向は、今や一世を風靡して、正にその絶頂に達しぬ。之を社會のあらゆる階級に見るに、皆然らざるはなく、醉生夢死の間にありて、閑居爲す所の不善は、賭博、飲酒、漁色の類、惡風、弊俗の醞釀されつゝある者、亦宜なりと謂ふべし。

戰勝後の所謂膨脹的日本は、此の如くして、一面には、早く社會內部の

腐敗を招致し、邦家前途の大計、將に奈何ともするなきに至らむとす。その之を救濟挽回するの一事は、志士の焦心苦慮すべき所。而して余は、精神的快樂を勸奬するを以て、その極致と爲さむとす。敎育の如き、宗敎の如き、殆んど根底より一國の人心を改進し得べきもの、その須要は、今復た贅せず。而して文學は、絶對神聖なる最高藝術として、その普及は、確に社會を美化し、人格をして高尙ならしむ。故に文學の鼓吹は、今の時に方りて、最もその必要を認めつゝあり。若し夫れ文學亡國論を主張する者に至りては、其愚や實に及ふべからず、余は此輩に對して瓜哇邊の蠻島に退隱すべきを、忠告せすむはあらず。

文學普及の第一方法は、その攻究を容易に領會せしむるに在り。江藤氏が本書を著はされし旨意、亦たこゝに存するや疑を容れず。その內容の價値は、姑らく問ふを要せず、唯だ大旱の雲霓に似たるの感あり、その汎く世に行はれむことを望まざるを得ず。今やその序を囑せらるゝに方

りて、平生懷抱の一端を書し、聊か以て酬ゆと云爾。

「小山水」の序

むかし蘆が散る浦邊に、梅の花、今を春べと咲きしこともありと聞くに、あはれ難波よ、いかで、とこしへに、都と備はらずして止むべきよしや、人、蠅頭の利を逐ふにのみ慣れしといはるものから、心だに誠にして、美しき情の失せであらむ限りは、誰か康衢に文學を生せずといふこゝに一卷の『小山水』は、關西文壇の隆興を謀らむための先驅として出でしなりとか。あゝ毛嬙西施、何ぞ面を見たる後ばしめて之を美といはむ。『小山水』の書、われ未だ讀むに及はず、さてもその名のかぐりなく快く耳に聞ゆるは、いかに。

高山樗牛「文藝評論」の序

五城同學の先輩、濟々たる多士、盡く是れ一時の選、余が欽仰の意を表し益を受くる者、少からず。高山君、その最たり。之について、畔柳芥舟、土井晩翠の二氏あり。余か淺學不才を以て、其間に伍す、譬へば駑馬の麒麟に並び、寒鴉の鸞鳳に配する如きのみ。而かも我か生を中書君に託し、以て命と爲し、幸に世の棄つる所とならざる、汲引の惠、諸子に負ふところ頗る多きを自白するに躊躇せざるなり。

高山君、腹笥宏富、左右逢原、その學術文章、傑然として重きを爲すは、世人均しく仰望するところ、今復た贅せず。この一卷收むるところ、短篇零章と雖もすべて是れ當年の評論壇を震撼せるもの、鷙鷙の一毛皆能く日に映し、虬龍の片甲、雲を成さゞるは無く、氣焰萬丈、赫々として人の眉目を燭する固より其所といふべきのみ。

さきに海外留學の官命を受け、將に發せむとして、忽ち湘南養痾の客となる、天の才人を厄する、古より然る者あり。高山君の如き、亦た此に漏

れず。然れども惟へ海内の文章、布衣に落つるすでに久しきのみ、苟くも志ある者は、空しく死せず、願くは努力餐飯を加へ、長しへに巍然たること、靈光殿の如くなれ。余も亦た驥尾に付して愈よ爲す所あるべきなり。

高橋紫燕遺著「獨眼龍」の首に書す

河北の英雄、獨眼龍を推して、その翹楚となす、おもふに、萬口一異辭なかるべきところ。彼は正に豪傑の天資あり、而かも不幸にして時に乘ずるなく以て終りし者なり。身を尺水に潛めて、雲之に從はず、因て變化を神にすること能はざりしと雖も、龍の性は居然として長く存し、自ら獺と異なる者ありしを見るへきなり。

奥羽の地たるや、荒寥遼曠、左右海に瀕し、北に蝦夷を控ふ、高山大河、自然の保障をなす、所謂四塞天府の地、人健にして馬駿、萬古神秀の氣の鍾るところ、斯人を出せし者、怪しむに足らず。唯だ夫れ四海鼎沸の時、東北に僻在するの故を以て、上國の事に與るを得ず、結髮夙に軍に從ひ、櫛風沐雨の苦を嘗め盡し、その半生を擧けて兵馬の間に鞅掌したりきと雖も、畢竟閭巷の私鬪を爲せしに過ぎず。中原に向て空しく一籌を輸しつゝありし間に、天下は早く已に豐太閤の手に平定され了りしなりき。彼は此に至りて手を收め復た爲す無き者の如し。然れどもなほ他家の興廢を左右すへき非常の重望を負へりき。

豐太閤は一世の雄なり、かの撥亂反正の功をなすや、固より常人の企て及ぶべきところに非ず。たゞその智謀籌略は己に披瀝し盡し、いつしか耄せし者の如く、後世子孫の計を爲すに方りては、遂に曉然目に其事を見て之を爲す如くなること能はず。五大老を置き、五奉行を擧げしが如き、唯だ彌縫的方策にして、黨を立て爭を起せし外、後年一の得る所なかりしにあらずや。之を要するに、太閤の意は、その憚るところを誅除し、以て後患を防がむとしたるのみ。かの天下輕重の勢を制し、内外相形し、

姦を禁じ亂に備ふといふが如きは、未だかつて想及せざりしところなり。太閤は固より政宗の人傑たるを識れり而かも大に忌憚する所あり、常に示威的態度を以て之に臨み、遂に肝膽相照し、以て羽翼となすに及ばず。秀次の獄起るや、天下の群雄、戰々焉として自ら危み、相顧みて菹醢たらむを恐れき。政宗の如きも亦た免れざらむとするに至り、家康之を救うて、細川最上の諸將とともに保全を得せしめぬ。悲しいかな、太閤の謀りしところ、偶ま以て家康の爲に積みしに過ぎざりき。關原の役可憐の石郎、その奇才を以て、一擲將に乾坤を賭せむとす。是に於てか、天下の諸侯、往々にして首鼠兩端、勝敗を觀望し、未だ決せざる者あり。而して政宗先づ上杉氏を掣し、その兵を西するを得ざらしめ、然る後に細川忠興等相率いて東軍に屬し、成敗の機早く決しぬ。その後、家光の將軍職を襲ふや、又一言善く群侯の膽を奪ひ、全く之を奉戴するに至らしめ、以て覇府三百年の基礎を定めき。政宗が德川氏の爲にせし者、亦大なりといふ

べし。蓋し昔人一飯の恩を忘れざるものあり、況んや我を水火の中に拯ひしをや、我安んぞ爲に死力を盡して酬ゐざることあらむや。是に於てか、知るべし、伊達氏の向背は、實に豐德二氏興廢の係るところといふも不可なく、政宗たるもの、少くとも此點に於て、史家の縝重なる考察を値すべきものあるを、而かも余は太閤が政宗の知己たらず、因て之を收用する能はざりしに就いて、頗る遺憾の想に堪へず。余は生來人格的に太閤の豪雋豁達を好み、家康の陰柔奸譎を惡くむものなればなり。

おもふに英雄なるものは、他に比して偉大なる活動力を有する者に外ならず。是に於てか昔時厠に上りて、髀肉を撫し、その肥えたるを嘆じたる者あり。獨眼龍が圖南の鵬翼を奮はむとしたる、亦たかくの如きのみ。而かも時や復た之に負きしを奈む。若し彼をしてその謀るところを遂ぐるを得せしめば、マニラの麻は、早くすでに旭日旗を繫ぐに足るべく、少くとも齋藤拙堂の海外異傳は、鄭成功、山田長政、濱田彌兵衛の三人

を記するに止まらざりしならむ。されば成否は以て人物を上下すべきに非ず、彼が雄略宏圖は唯だ規畫のみを以て長しへに懦豎を興起せしむるに足る者あるなり。

之を要するに、獨眼龍は東北の土地が產出せし唯一の歷史的大人物にして、その傳記は確かに論著すべき價値を有する者なり。獨り怪む、今日史傳の流行、その盛を極むる時に方りて、未だ甚た人の之を稱道するを聞かざるを。吾曹由來幾分の俠を負ひ、闇幽顯微を以て自ら任ずる者、豈に多少の感なきを得むや。余は未死の毅魄が、地下に瞑せざるを臆想せしこと數ばなりき。

獨眼龍は、すでに余が少時より欽慕措く能はざりし所の一人なり、而して五城樓下は余が今に夢寐の間、忘るゝ能はざる地なり。余は元と南信兜城山下の一書生のみ、幼より東西に流寓して未だ嘗て寧處せず、而かも獨り此地に眷々たるもの他の故あるに非ず、かの青春の希望に滿ち〳〵たる高等中學時代、余が歲十七より二十二に至るまで最も愉快なる五年の生活を其地に送りたればなり。加ふるに余はこの間に於て、遍ねく獨眼龍の史蹟を見るを得たりき。かの經峰靈廟の下にある古精舍は、余が學校の運動場に於て、小隊敎練を學びしとき、常に射擊八百メートルの目標たりき。所謂貞山掘、十數里の長渠は、余かつてボートに乘して、數回上下せしことあり。日東の博望侯といふべき支倉常長の遺墳は、余が其地を去らむとする半年前に於て、北山光明寺中に發見せられ、又しば〳〵余が憑弔を促したりき。獨り仙臺の市中といはず、余が游跡は六縣の地に遍ねかりしを以て、米澤の市、岩出の山、摺上の原、三春の城その他政宗が轉戰せしところ、すべて其地を歷ざるものあらず。私に思ふ、今の世、獨眼龍を傳せむ者、余に非ずして誰ぞと。而かも余は實際その志を有せしなりき。

かへり見れば、一たび仙臺の地を去り、跡を都門に寄せて以來、すでに

四裘葛を換たり。志大にして才疎學未だ成らずして空しく塵間に流落す。窮や猶ほ傳家の劍を剩すと雖も、典は時に琴書に及ばむとし、芻米の資を求むるに汲々たり。故を以て往年の宿志、之を遂ぐるに由なく、將に思ひ絶えなむとしたりき。しかも料らざりき、こゝに勞せずして余が曩に爲さむと欲せし者の一半を實現するを得むとは。

頃ろ書肆鍾美堂主人、一稿本を携へ來りて、余に示す、高橋紫燕氏の著に係るもの、題して伊達政宗傳といふ。紫燕氏は如何なる人か、余之を知らず。然れども、かつて之を友人笹川臨風に聞く氏は實に仙臺の人、書劍留滯、久しく京華に在り。暫く雜誌「日本人」に從事し、後聘せられて、毎日新聞社に入り、病を得て鄉に還り、幾くもなくして、天は之を玉樓の選に上ぼしきと。數奇の才子、固より尋常職々者流に非ざりしを推知するに足る。この書すでにその遺著といふ、固より之を敗紙堆裡に埋沒すべきに非す、余乃ち主人に勸めて、上木することゝはなしぬ。

然れども、この書は猶ほ未定稿に屬し、實に氏が病中の苦を忍びて起草せしものといふ。故を以て、文字の間、議すべきところ少しとせず。是に於てか、余は主人の請を容れ、僭越の罪を忘れて、聊か雌黃を加ふることゝなしぬ。唯だ夫れ人各心あり、彼の爲せしもの、必ずしも我が欲する如くならざるは、常に當に然るべきところ、余は一讀の後、囑付せられし事項に對して少からざる困難を覺えたりき。他なし、事柄の取舍に關して、大に余の見と異なる者の存することと是なり。例せば開卷第一に掲げられし「奥州と偉人」の一章中に於て、暗愚庶弱、毫も爲すに足らざる一の素衡を擧げ、勇を以て之に許したる如き、余はその理由を知るに苦しむ。然らば何故に、かの唐妹棧道の嶮を扼して奮戰せし大河次郎義任の俠をあげざりしか。余が知るところを以てすれば、近代奥羽の偉人は、氏が與げし者のみに止まらず。矢立峠の一擊、博浪沙を學びし下斗米將眞（相馬大作）あり。堂々たる經濟の策、以て普ねく天下の民衆を救助せむを計り

し佐藤信淵あり。若松城上、降旗飄りしとき、飯盛山の露と消えたる白虎の十六士、桓々たる少年軍、亦た稱するに足らざらむや、氏は如何に輕重するところありて、此等を算せざりしか。而して余は常に謂へらく、奥羽の地は南北朝の頃よりして、著しき關係を歴史に有するに至りきと、靈山城は、延元二年、北畠顯家が義良親王を奉じて據守せしところにして、陸奥の浪岡は、顯信が兵を屯せし地たり。浪打峠の北に方りて、長慶天皇の陵と呼ぶもの、凡そ三處。史蹟の增加は、何が故にかく著しかりしか。而して伊達氏の祖先も、亦たこの際に於て名を竹帛に留むるを得たりしなりき。余は本書が一層精緻なる記述を爲さざりしを憾まさるを得ず。又纖微毛髮の比の如き瑣事なれども政宗が羅馬法王ポール第四世に贈りし書翰の如き、何が故に本のまゝなる和文のろれを引抄せざりしか。凡そかくの如き類、氏たるもの、意見を有せしや必せりと雖も、道山遠くして尋ぬべからず、今や榻を連ねて之を論ずる能はざるを奈何とも

し難し。

伊達治家記錄中の貞山公實記より以下、伊達成實記、伊達便覽志、伊達三代略、命期集、仙臺武鑑、會津四家合考、葦名家記、最上記、義光功績錄、白河文書、仙臺史料、金城秘韞、歐南遣使考の類、政宗の事蹟を、檢究する者、必讀の書、固より少からず。然れども、余は氏が著書を以て此種の根本的史料に對照し精密なる校訂の勞を執る暇なかりしのみならず、又かくすることの甚だ正當ならざるを想へり。何となれば、內容にまで變化を及ぼすことあらむか、この書はすでに氏がものならずして、余がものなるべければなり。

玉の璞に在るや、光氣未だ天に騰らず、魍魎之を抱いて哭す。余はこの書に對して、幾分の彫磨を加へしのみ、若し天然の美質を損せしことあらば、その罪全く余にありとして不可なし。こゝに余をして、この書を評價するを許さしめば、乃ち敢て謂はむ、事實の敘述は確然たる史的考證

に出でざる者多しと雖も原委を考へ終始を綜ぶるに於ては甚しき誤謬を認めず其の東西の史乘に就て對比を試むるところは往々奇創の見を出せしものあり優に以て一隻の眼孔を具ふる者と呼ぶべからむ歟と。

「獨眼龍」の一書刊行の由來略ぼ此の如し未だ知らず紫燕たるもの余を以て身後の知己と爲すや否やを。こゝに余は聊か責任を以て補訂の任を全うしたるを自認して深く之を喜ぶと雖も尚ほ敢て日著の獨眼龍を以て世に問ふの日あらむを期する者なり。

文學評論　塵中放言　終

（塵中放言）

明治三十四年十月十五日印刷
同年十月二十日發行
同年十一月廿五日再版發行

著作者　久保得二

著作權所有

發行兼印刷者　東京市日本橋區本銀町三丁目二番地　福岡元治郎

發行者　大阪市南區鹽町三丁目六十九番屋敷　中村寅吉

印刷所　東京市神田區西今川町六番地　鍾美堂印刷部

發行所　大阪市南區鹽町三丁目六十九番屋敷　鍾美堂本店　特電話東千七百廿番

發行所　東京市日本橋區本銀町三丁目二番地　鍾美堂支店　特電話本局百〇三番

4,00